鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（78）

一般地方道紫尾田～牧園線改良工事（横川町小原地内）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

栫（かこい）　遺　跡

（姶良郡横川町）

2004年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無およびその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路維持課（栗野土木事務所道路維持係）は，「一般地方道紫尾田～牧園線改良工事」の計画に基づいて，姶良郡横川町小原地内で計画した道路改良工事に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

平成10年度に分布調査を実施した結果，事業区域内には周知の遺跡である栫遺跡が所在することが判明した。

これを受けて，栗野土木事務所・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の三者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし，調査は埋文センターが担当することとした。

平成13年６月11日から平成13年６月27日にかけて予定地の2,400㎡を対象に確認調査を実施した結果，事業区域内のうち字二俣と字羽田の２地点において縄文時代，近世の遺跡が残存していることが確認された。

そこで，栗野土木事務所・文化財課・埋文センターは再度協議し，これら２地点については，現状保存や設計変更が不可能であることから，記録保存のための緊急発掘調査（本調査，以下本調査）を実施することになった。

本調査は，平成14年７月22日から平成14年８月12日にかけて行った（実働12日）。調査面積は計600㎡である。

調査終了後，平成16年に埋文センターにおいて整理作業・報告書作成を行った。

第２節　調査の組織

確認調査（平成13年度）

起因事業主体：　鹿児島県土木部道路維持課（栗野土木事務所道路維持係）

調査主体：　鹿児島県教育委員会

調査統括：	県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
調査企画：	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	調査課　調査課長	新東晃一
	〃	〃　調査課長補佐	立神次郎
	〃	〃　主任文化財主事	池畑耕一
	〃	〃　主任文化財主事兼第一調査係長	青﨑和憲
	〃	〃　主任文化財主事	中村耕治
調査担当：	県立埋蔵文化財センター	〃　文化財主事	松尾　勉
	〃	〃　文化財研究員	上床　真

調査事務：	県立埋蔵文化財センター	総務課	総務係長	前田昭信
	〃	〃	主査	栗山和己

本調査（平成14年度）

起因事業主体：　鹿児島県土木部道路維持課（栗野土木事務所道路維持係）

調査主体：　鹿児島県教育委員会

調査統括：	県立埋蔵文化財センター	所長		井上明文
調査企画：	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長		田中文雄
	〃	調査課	調査課長	新東晃一
	〃	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一
	〃	〃	主任文化財主事	中村耕治
調査担当：	県立埋蔵文化財センター	〃	文化財主事	三垣恵一
	〃	〃	文化財研究員	上床　真
調査事務：	県立埋蔵文化財センター	総務課	総務係長	前田昭信
	〃	〃	主査	栗山和己

整理作業・報告書作成（平成16年度）

起因事業主体：　鹿児島県土木部道路維持課（栗野土木事務所道路維持係）

整理作業主体：　鹿児島県教育委員会

整理作業統括：	県立埋蔵文化財センター	所長		木原俊孝
整理作業企画：	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長		賞雅　彰
	〃	調査課	調査課長	新東晃一
	〃	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一
	〃	〃	主任文化財主事	中村耕治
整理作業担当：	県立埋蔵文化財センター	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一
調査事務：	県立埋蔵文化財センター	総務課	総務係長	平野浩二
	〃	〃	主事	福山恵一郎

報告書作成検討委員会	平成16年10月14日	所長ほか	９名
報告書作成指導委員会	平成16年10月５日	調査課長ほか	７名

企画委員：	県立埋蔵文化財センター	横手浩二郎
		上床　真

第３節　調査の経過

確認調査は平成13年６月11日から平成13年６月27日，本調査は，平成14年７月22日から平成14年８月12日まで実施した。以下，日誌抄をもって調査の経過を略述する。

確認調査

○平成13年６月11日（月）

発掘調査開始。１～３，５～９トレンチを重機によって表土除去。１～３，５トレンチⅢ層の掘り下げ。

○６月12日（火）

10～11トレンチを重機によって表土剥ぎ。１～６トレンチのⅢ層掘り下げ。２・３トレンチ精査。横川町文化財審議委員会来跡。

○６月13日（水）

１トレンチを重機によって下層確認。２トレンチを拡張し，掘り下げ。４トレンチの表土掘り下げ。６トレンチⅢ層の掘り下げ。８トレンチ攪乱部の掘り下げ。

○６月14日（木）

２トレンチの拡張部掘り下げ。１～３トレンチ精査。３トレンチ写真撮影，出土遺物平板実測（№１～18）。７～11トレンチの掘り下げ。海老迫氏（横川町文化財保護審議委員）来跡。

○６月15日（金）

１トレンチの地層断面及び完掘状況，２トレンチの軽石集積検出状況の写真撮影。３トレンチⅡａ層遺物出土状況写真撮影及び平板実測（№19～31）。４トレンチの地層堆積状況写真撮影。５トレンチⅡ層の遺物出土状況写真撮影。６トレンチのシラス混り層掘り下げ。７トレンチを重機によって下層確認。完掘状況を写真撮影し，埋め戻し。８トレンチを重機によって表土除去。９トレンチの薩摩層上面検出。10トレンチの薩摩層上面で表土埋土のピット検出状況写真撮影。11トレンチの表土掘り下げ，アカホヤ上面検出。今村氏（栗野土木事務所用地係）来跡。

○６月18日（月）

１トレンチの地層断面実測。２トレンチの軽石集積ミニトレンチ及び周辺掘り下げ。３トレンチの土坑写真撮影及び平面実測。５トレンチのシラス上面の噴砂及び軽石層写真撮影，掘り下げ。６トレンチの粗砂層掘り下げ。９トレンチ掘り下げ。10トレンチのピット半裁及び写真撮影。11トレンチの遺物平板実測（№32～37）及び焼土域検出状況写真撮影。

○６月19日（火）

３トレンチのアカホヤ掘り下げ。４トレンチ埋め戻し。５トレンチのアカホヤ腐植土層（？）砂礫層掘り下げ。６トレンチの砂礫層掘り下げ。８トレンチのアカホヤ掘り下げ。

○６月20日（水）・６月21日（木）

雨天のため作業中止。プレハブにて出土遺物の水洗作業，図面整理作業を行う。８トレンチの表土除去，一部重機による下層確認。土砂流入防止対策実施。レベル原点移動。９トレンチの散礫部分精査。

○６月22日（金）

１トレンチの埋め戻し。２トレンチの軽石集積（自然堆積と判断，記録済み）の除去。３トレン

チ集石土坑の実測。周辺アカホヤ以下の掘り下げ。８トレンチ掘り下げ（薩摩火山灰層まで），地層断面実測。９トレンチ掘り下げ。10トレンチを重機によって下層確認。

○６月25日（月）

１トレンチの埋め戻し。２トレンチの地層断面写真撮影。３トレンチのアカホヤ以下掘り下げ。５トレンチの地層断面清掃，アカホヤ腐食土層遺物取り上げ（一括）。６トレンチの地層断面写真撮影，実測。埋め戻し。８トレンチの薩摩火山灰層上面地層断面写真撮影・実測，下層確認。９・10トレンチの地層断面写真撮影。11トレンチのアカホヤ上面精査。

○６月26日（火）

２トレンチの地層断面実測。３トレンチのアカホヤ以下掘り下げ，出土遺物平板実測（№38～76）。５トレンチの掘り下げ。６トレンチの雨水対策実施。８トレンチ写真撮影，地層断面実測。９・10トレンチ地層断面実測，埋め戻し。11トレンチ検出遺構を保護し，埋め戻し。臼井・今村（栗野土木事務所），南（農業改良普及所），有川（横川町教育委員会）氏他２名（文化財保護審議委員）来跡。

○６月27日（水）

２トレンチの埋め戻し。３トレンチの掘り下げ，地層断面実測。検出遺構を保護。５トレンチの地層断面実測。８トレンチの埋め戻し。後片づけ，確認調査を終了。横川中学校２年生来跡（４名・引率１名）。

本調査

○平成14年７月22日（月）

発掘調査開始。発掘器材・ベルトコンベア・発電機等搬入。

Ａ地点　Ⅱａ層上面まで掘り下げ，集石検出。春日式土器出土。重機による表土除去。ダンプによる排土搬出。

Ｂ地点　ピット・焼土域等検出。

有村和秀氏（横川町教育委員会）来跡。

○７月23日（火）

Ａ地点　溝状遺構検出。東側溝２条掘り下げ。集石平面実測。重機による表土除去。

Ｂ地点　Ⅱａ層上面で遺構検出作業。柱穴・土坑等検出，写真撮影後，掘り下げ。下層確認トレンチ設定，掘り下げ。

有村和秀氏（横川町教育委員会）来跡。

○７月24日（水）

Ａ地点　Ⅱａ層上面まで掘り下げ。調査区割り用杭打ち作業。掘り下げ。溝状遺構（古道）検出。

Ｂ地点　検出遺構の掘り下げ。柱穴・土坑の平・断面写真撮影。調査区割用杭打ち作業。

○７月25日（木）

Ａ地点　Ⅱａ層上面コンタ図作成。溝状遺構平面図作成。県道境ベルト状部分掘り下げ。

Ｂ地点　柱穴完掘及び新たに検出した柱穴の掘り下げ，半裁。遺構内遺物取り上げ。土坑平面実測。下層確認トレンチ掘り下げ（Ⅵ層シラス上面まで）。台風対策実施。

○７月26日（金）　台風接近のため作業中止。

○７月29日（月）

Ａ地点　集石の清掃，写真撮影。断面実測。

Ｂ地点　レベル原点移動。柱穴・土坑等平面実測。

有村和秀氏（横川町教育委員会）来跡。

○８月１日（木）

Ａ地点　Ⅱａ層上面コンタ図作成。溝状遺構検出。重機による表土除去。

Ｂ地点　柱穴の完掘。下層確認トレンチの掘り下げ（Ⅵ層上面まで）。

○８月２日（金）

Ａ地点　下層確認トレンチ掘り下げ。溝状遺構ミニトレンチ掘り下げ。溝状遺構・古道再検出。遺構配置図作成。

Ｂ地点　遺構の清掃及び再精査。

○８月５日（月）

Ａ地点　下層確認トレンチ掘り下げ。溝状遺構ミニトレンチ掘り下げ。遺構の清掃，写真撮影。検出遺構（溝状遺構・古道）の平板実測。断面写真撮影。

Ｂ地点　下層確認トレンチ完掘，写真撮影。ピット掘り下げ。調査区域図平板実測。

○８月６日（火）

Ａ地点　７～８－Ｄ区のⅡａ層以下掘り下げ。溝状遺構清掃。５～７－Ｃ区のⅡａ層上面地形測量図作成。

Ｂ地点　検出遺構（柱穴・ピット）掘り下げ。焼土域１写真撮影，平面実測・半裁，断面写真撮影。土坑写真撮影，掘り下げ。

○８月７日（水）

Ａ地点　５～８－Ｄ区のⅡａ層以下掘り下げ。出土遺物平板実測（№１～110）。６Ｄ区の土坑掘り下げ。遺跡の遠景写真撮影。Ⅱa層上面検出の遺構写真撮影。５～６－Ｃ区のⅡa層以下掘り下げ。

Ｂ地点　検出遺構（柱穴・土坑・焼土域・ピット）平・断面実測。

○８月８日（木）

Ａ地点　５～８－Ｄ区のⅡａ層以下掘り下げ，南側一部下層確認。地層断面の写真撮影。２Ｂ・３－Ｃ・４～６－Ｃ区のⅡａ層以下掘り下げ，出土遺物平板実測（№118～187，251～265）。２Ｂ区の溝状遺構・古道，遺物出土状況（№201～233）平板実測。

Ｂ地点　焼土域１・土坑の平・断面実測。

○８月９日（金）

Ａ地点　２～３－Ｂ区，４～５－Ｄ区のⅡａ層以下掘り下げ，出土遺物平板実測（№401～544）。

Ｂ地点　柱穴・土坑の完掘状況全体写真撮影。柱穴レベル測定。

○８月12日（月）

Ａ地点　７Ｄ区地層断面実測。７～８－Ｄ区Ⅱａ～Ⅳ層出土遺物平板実測（№293～299）。溝状遺構・古道断面実測。

Ｂ地点　１Ｂ区下層確認部の地層断面実測。焼土域２・３断面実測。土坑完掘状況の平面実測。

発掘調査終了，土木事務所へ引き渡し。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡のある姶良郡横川町は，鹿児島市から北東方向へ約46㎞のところにあり，東は牧園町，西は薩摩郡薩摩町および祁答院町・姶良町，南は隼人町・溝辺町，北は栗野町に接しており，霧島火山群の西麓に位置している。

栫遺跡は横川町下ノ字栫・二俣・須崎・羽田・山住に所在する。確認調査ではほぼ全面を対象としたが，本調査を実施したＡ地点は字二俣，Ｂ地点は字羽田にあたる。

栫遺跡の所在する山住地区・小原地区は牧園町との境にあたり，横川町の東端，横川町役場から南南東へ約４㎞のところにあり，地形的には，標高250m級の山地から南へ延びる標高約180mの丘陵に位置する。現況は，ＪＲ肥薩線霧島温泉駅の西から馬渡川に沿って東西に広がる畑地帯となっている。この畑地を縫うように馬渡川が緩やかに北西から蛇行しながら東へと流れ，当地区の東南下流で，鹿児島湾奥へ注ぐ天降川に合流している。

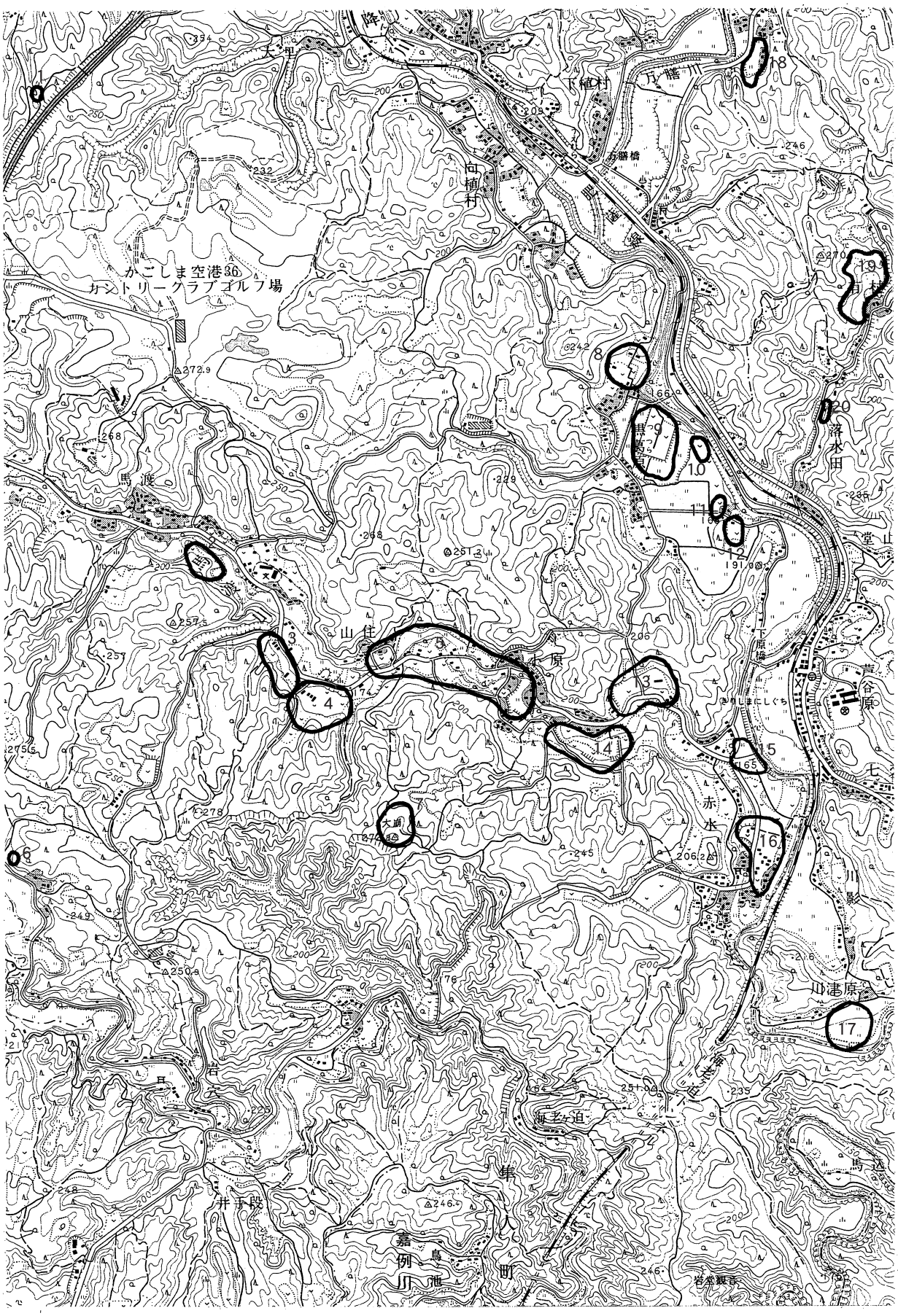
第２節　歴史的環境

山間部にあるため，遺跡は川沿いの台地に主として存在している。

旧石器時代の遺跡は少なく，横川町中尾田遺跡で細石核が，同星塚遺跡で台形石器・細石核などが出土し，牧園町宮園原遺跡では三稜尖頭器が採集されている。

縄文時代になると遺跡数は増加し，牧園町九日田遺跡では中期の竪穴住居跡４軒以上からなる集落も発見されている。早期の遺跡として中尾田・星塚・牧園町内之野などの遺跡があるが，地形的にもこの他にキャンプ的遺跡が各地にあるものと思われる。星塚遺跡では貝殻条痕文円筒土器・押型文土器・手向山式土器・石鏃などとともに集石５基も発見されている。中尾田遺跡では石坂式土器・桑ノ丸式土器・押型文土器・撚糸文土器・手向山式土器など多様な土器と，石鏃・石匙などの石器が出土し，炉穴３基・集石10基が発見されている。前期には星塚・九日田・内之野・牧園町大窪・同一本松・同中野Ｉなどの遺跡がある。星塚遺跡では曽畑式土器・深浦式土器が，九日田・内之野遺跡では轟式土器，一本松・中野Ｉ遺跡では曽畑式土器が出土している。中期では先の九日田遺跡の他に中尾田・牧園町中福良・中野Ｉ遺跡などがある。中尾田遺跡では阿高式土器・並木式土器などとともに，多くの石鏃や石匙・石斧・磨石などの石器が出土しており，炉跡３基・土坑１基が発見された。九日田遺跡では阿高式土器・石鏃・石斧・磨石・石皿などとともに円形を呈する竪穴住居跡４軒・炉跡１基が発見されている。ほかに中福良・中野Ｉ遺跡で阿高式土器が，中福良遺跡で春日式土器が出土している。後期では中尾田・星塚・中園・内之野・中野Ｉ遺跡などがある。中園遺跡では指宿式土器，内之野遺跡では指宿式土器・御領式土器が，中野Ｉ遺跡では鐘崎式土器が発見されている。晩期の遺跡として星塚・中福良・中園などがある。星塚遺跡では入佐式土器・黒川式土器・突帯文土器が出ており，土坑も発見されている。ほかに中園遺跡では突帯文土器，中福良遺跡では黒川式土器・突帯文土器が出土している。

平野が少ないこともあって弥生時代の遺跡は少なく，牧園町川床遺跡しか知られていない。


大甲
下植村
万膳川
万膳橋
向植村
かごしま空港
カントリークラブゴルフ場
馬渡
落水田
堂山
山住
小原
芦谷原
赤水
川津原
海老迫
井手段
嘉例川
鳥越
池町
岩六
馬込
岩屋観音

第１図　周辺遺跡位置図

古墳時代になると，丘陵・台地に多くの遺跡が知られており，集落が各地に営まれたことが想定されるが，発掘調査がされていないため詳細は不明である。九日田遺跡では竪穴住居跡１軒が発見されている。牧園町中園遺跡では地下式横穴墓２基が調査されており，鉄鏃が８点出土している。

古代の遺跡には横川町の米原・崩平・羽山・弓場原・星塚，牧園町中園などの遺跡がある。星塚遺跡では土師器・黒色土器・須恵器とともに墨書土器２・紡錘車２・土錘６も出土している。

中世の遺跡として中尾田遺跡・佐々木城跡などの山城が知られている。中尾田遺跡は片城と呼ばれ，堀・隧道・土塁などとともにそれぞれの郭では掘立柱建物跡・柵列・土坑・排水溝などが見つかっている。出土品は輸入陶磁器・国産陶器・石鍋・金銅製金具と多様である。中園遺跡では掘立柱建物跡２軒と竪穴遺構が，中福良遺跡では掘立柱建物跡１軒が発見されている。

第１表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所　在　地	地　形	時　　代	遺　　物　　等	備　考
1	二　石　田	横川町中ノ字二石田・長坂上	台　　地	古代	土師器・須恵器	
2	前　　原	横川町下ノ字前原	丘　　陵	古墳	土器片	Ｈ２分布
3	元　境　迫	横川町下ノ字元境迫	丘　　陵	古墳	土器片	Ｈ２分布
4	米　　原	横川町下ノ字米原	台　　地	古墳・歴史	成川式土器・土師器	
5	栫	横川町下ノ字栫・山住ほか	台　　地	旧石器･縄文･古代･近世	縄文土器･土師器･陶磁器	本報告書
6	前　川　内	横川町下ノ字前川内・脇ヶ迫	台　　地	弥生・古代	弥生土器・土師器	
7	佐々木城跡	横川町下ノ字大崩	山頂緩斜面	中世	山城	
8	崩　　平	横川町中ノ字崩平・枯駄	台　　地	古墳・奈良・平安	土師器	
9	羽　　山	横川町中ノ字羽山	台　　地	古墳・奈良・平安	成川式土器･土師器･須恵器	Ｈ２本調査
10	羽　山　2	横川町下ノ字羽山	低　　地	縄文	縄文土器	Ｓ60テクノ分布
11	羽　山　3	横川町下ノ字羽山	低　　地	縄文	縄文土器	Ｓ60テクノ分布
12	中　　原	横川町下ノ字中原	台　　地	縄文・古墳	縄文土器･成川式土器･青磁	Ｓ60テクノ分布
13	弓　場　原	横川町下ノ字弓場原	台　　地	古墳・奈良・平安	成川式土器・土師器	
14	多奈ヶ迫	横川町下ノ字多奈ヶ迫	丘　　陵	古墳	土器片	Ｈ２分布
15	星　　塚	横川町下ノ字星塚	低　　地	旧石器・縄文・平安	細石核･押型文･曽畑式･入佐式 黒川式･石鏃･墨書土器･土錘	県立埋文７
16	姪　　原	横川町下ノ字姪原	台　　地	縄文・古墳	成川式土器・土師器	Ｈ２調査
17	川　津　原	牧園町宿窪田字川津原	台　　地	古墳	成川式土器	H11分布
18	渡　瀬　C	牧園町万膳字渡瀬	台　　地	古墳	成川式土器	
19	有村城跡	牧園町万膳字城ヶ宇都	台　　地	中世		伝承
20	落　水　田	牧園町万膳字落水田	台　　地	縄文	縄文土器	

〈参考文献〉

「国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書－昭和60年度－」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(37)
1986　鹿児島県教育委員会
新東晃一・中村和美『星塚遺跡』(『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』7)
1993　鹿児島県立埋蔵文化財センター
新東晃一・井ノ上秀文『中尾田遺跡』(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』15)　1981　鹿児島県教育委員会

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　確認調査の概要

確認調査は遺跡の範囲約500m（道路部分）のうち，調査可能な範囲2,400㎡を対象として実施した。トレンチ名は東から１トレンチ，2トレンチ，・・として，11トレンチまである。調査面積は162㎡である。このうち３トレンチ・４トレンチ・11トレンチについては遺構・遺物が発見され，本調査が必要となった。この部分についてはあとで詳しく触れるため，ここでは省略する。

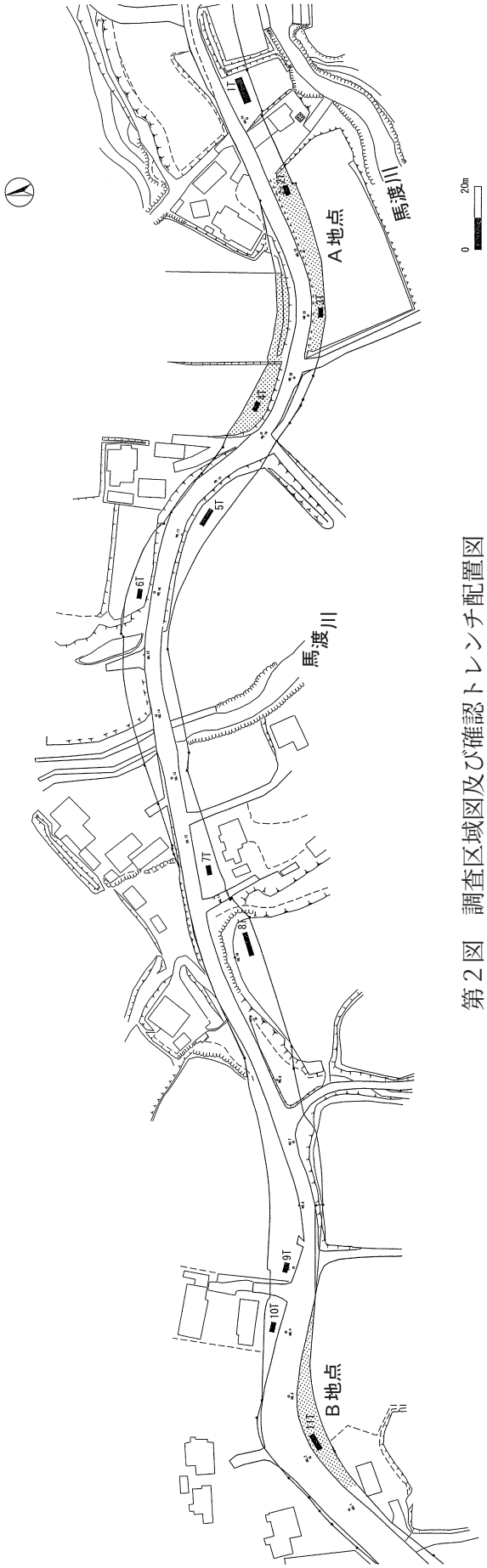
１　１トレンチ（第２図・第３図１）

調査対象地のもっとも東にあたる字須崎の標高約174.7mの原野中央に設定した３m×８mの東西に長いトレンチである。この地は馬渡川を南眼下に見おろす位置にあり，東側が切り土，西側が盛土となる段々畑となっている。川との比高は5.5mほどである。地層は黒色土（表土，厚さ40㎝），アカホヤ一次（豆粒状軽石，部分的にしかなく厚くて10㎝ほど），青灰色粘質・砂質土まじりのしまった土（部分的に10㎝ほどの厚さである），明黄褐色軽石まじりの砂質土（厚さ50㎝），にぶい黄橙色砂質土（厚さ70㎝），灰褐色砂質土まじりのにぶい黄橙色砂質土（厚さ30㎝）となり，その下は暗灰褐色砂質土・黄褐色粘質土・茶褐色砂利の互層となった川砂層となっている。

遺物は淡茶褐色硬質土で，縄文土器が１点出土している。これは外面に山形押型文を基調とした押型文があり，内面はナデ調整である。淡茶褐色を呈し，焼成度は良い。黄白色石・石英・金雲母などのこまかい石を含んだ胎土である。これは，縄文時代早期の手向山式土器である。

２　２トレンチ（第２図）

１トレンチの30mほど西にある字二股の標高175.3mの畑に設定した２m×３mの東西に長いトレンチである。川との比高は約６mほどである。地層は黒色土（表土，厚さ40㎝），にぶい黄褐色土



第２図　調査区域図及び確認トレンチ配置図

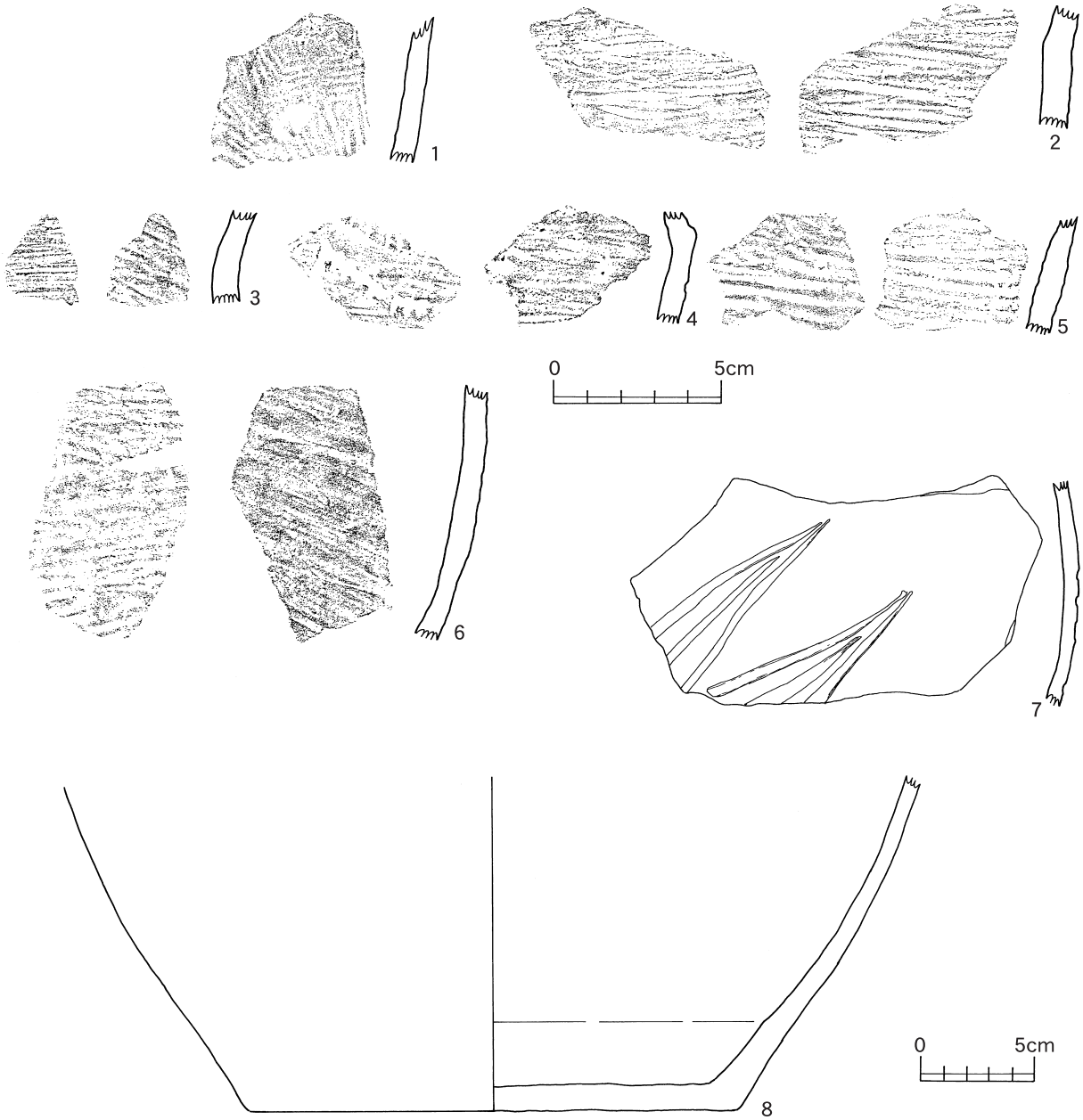
（厚さ30～60㎝），灰褐色砂質土まじりのにぶい黄褐色土（厚さ30～50㎝）と続き，その下は軽石集中層，砂礫交互層となっている。

このトレンチでは遺物の出土がなかった。

３　５トレンチ（第２図・第３図２～８・第５図Ｓ１・第７図）

150㎡ほどの半月形をした，字二股にある標高172.5mの水田に設定した３ｍ×８ｍの北西から南東方向に長いトレンチである。県道から一段下がった場所で，川との比高は2.5mほどしかない。この水田は戦後開田されたものである。

地層は西から東へ下降している。上から黒色土（表土，厚さ50㎝），黄褐色弱粘質粗土（厚さ40㎝），明黄褐色粗土（厚さ20～50㎝），にぶい黄橙色粘質土（厚さ30～40㎝），灰褐色粘質土（厚さ50㎝），にぶい黄橙色弱粘質土（厚さ40㎝），灰黄褐色砂質の弱粘質土（厚さ20㎝）と続き，その下



第３図　確認調査出土の遺物(1)

は灰白色の砂と砂礫の互層になっている。

遺物は２層目の黄褐色弱粘質粗土から出土している。縄文土器12，石皿１，剥片１，近世陶磁器３がある。

２～６は内外とも横方向の貝殻条痕文のある縄文土器である。概して深いが，３は浅い条痕である。４はくの字状に内反するもので屈曲部にきざみのある低い突帯文が貼り付けられ，その下に突帯と並行に貝殻押圧がみられる。これらはいずれも焼成度が良く，淡茶褐色・茶褐色・黄茶褐色・淡黒褐色などを呈している。胎土は黄色や茶色などの色を呈する細礫・石英・火山ガラスなどを含むこまかい土である。これらは縄文時代前期の轟式土器である。７・８は薩摩焼甕である。７は黒釉甕で，内側は横方向の櫛歯状ハケナデで仕上げている。外面には白っぽい釉もかかっており，釉切れもみられるが，菖蒲葉状に釉をかきとっている。白っぽい石粒を多く含む土を用い，内面には砂粒が突出している。８は厚い緑色釉の上に白っぽい釉が垂れており，底の釉はとけている。内面は幅が3.5㎝ほどの板状ハケによる横ナデで，底はヘラでナデているが，底の立ち上がり部分はヘラでケズっている。内底には重ね焼きに用いた二枚貝圧痕がみられる。Ｓ１は21.5㎝×27㎝，厚さ６㎝の砂岩円礫を使用した石皿で，広い面を二面使っている。両面とも平坦であるが，一面はややくぼむほど使い込んでいる。

４　６トレンチ（第２図）

５トレンチと道路を隔てた反対側にあたる字二股にある標高175.85ｍの畑350㎡を対象として設定した2.5ｍ×４ｍのトレンチである。西側を流れる馬渡川とは比高６ｍある。地層は黒色土（表土，厚さ20～30㎝），黄褐色砂質土（厚さ20㎝），灰黄褐色砂質土（厚さ20㎝）と続き，その下は深さ2.2ｍまで砂利・砂などが交互に堆積している。

表土で黒曜石チップ１，土師器片４，近代茶花２（同一個体）が出土している。

５　７トレンチ（第２図）

馬渡川の右岸，字須崎にある標高174ｍの原野110㎡を対象に設定した３ｍ×４ｍのトレンチで，川とは比高４ｍである。表土の下は砂礫層で，出土品はない。

６　８トレンチ（第２図・第４図９～17・第５図Ｓ２）

７トレンチの西にある字須崎の原野（標高180ｍ）300㎡を対象に設定した３ｍ×８ｍの東西に長いトレンチである。

地層は黒色土（表土，厚さ190㎝），アカホヤ２次堆積土（厚さ20㎝），アカホヤ火山灰（厚さ20㎝），明茶褐色土（厚さ30㎝），黒褐色土（厚さ40㎝），薩摩火山灰（厚さ35㎝），黒褐色砂質土（厚さ25㎝），黄褐色砂質土（厚さ50㎝），灰白色砂質土（厚さ20～30㎝），黄色軽石まじり灰白色砂礫（厚さ80㎝）と続き，その下は黄白色粗粒まじり粘質土となる。この層はシラスと想定されている。

表土で多くの遺物が出ている。縄文土器１・叩石１・黒曜石１・土師器坏23・土師器甕７・須恵器壺１・須恵器甕１・中世土鍋把手１・中世磁器６・常滑焼甕１・近世陶磁器49・ふいご羽口１・砥石１・近世瓦１である。

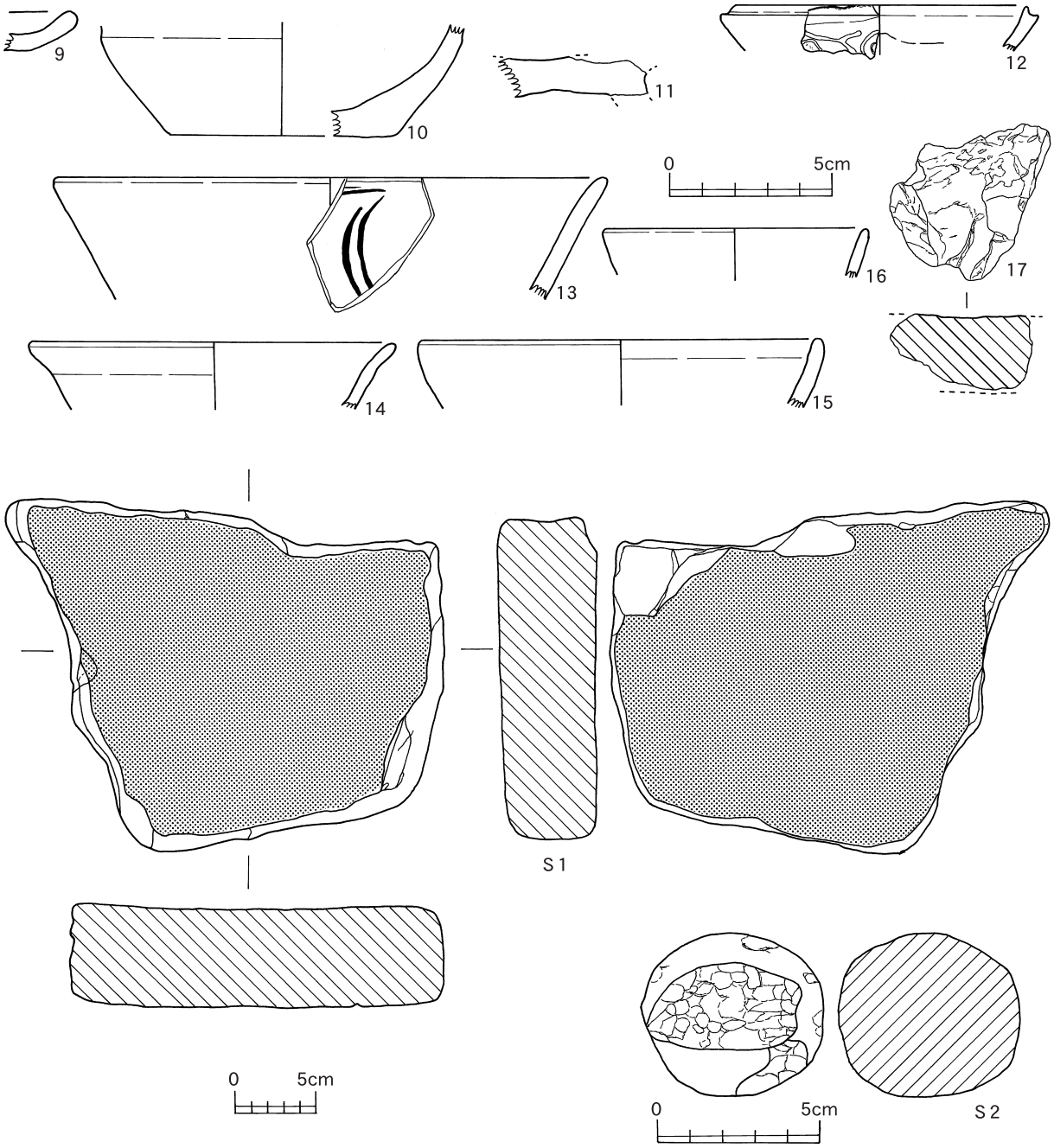
９・10はヘラ切離し底の土師器である。９は口縁部が厚くなる高さ１㎝の低い皿である。10は底部直径７㎝の坏で，口縁部へまっすぐのび，上部でやや外反する。ともに淡茶褐色を呈しているが，10の外はやや赤みをおびている。胎土はともにこまかいが，10は８㎜大のものなどやや大きめの茶

色石を含んでいる。焼きはよいが，10はやや磨滅している。

11～15は中世の輸入磁器である。

11・12は白磁である。11は玉縁口縁の碗底部で，外面は無釉，内面には釉切れがみられる。12は合子の身で，受部から内面にかけては無釉となる。釉は黄みがかったクリーム色をしており，外面に唐草文らしき陽起文様がみられる。

13～15は青磁である。13は内面に蓮花文の花文がみられる龍泉窯０類の碗でオリーブ色の釉がかかっており，内外とも貫入がみられる。14は坏，15は碗で，ともに無文である。14は外反，15は内反する器形となる。14は青緑色，15はにぶい緑色を呈し，15は一部に釉切れがみられる。11・13は



第４図　確認調査出土の遺物(2)

13世紀前半，14・15は15世紀頃のものである。

16は白薩摩の椀で，直径８㎝と小型である。白色のこまかい土に透明釉がかかっている。

17は周辺が欠けているが，ふいご羽口の先端部である。致密な土を用い，赤みがかった茶褐色を呈している。Ｓ２は５㎝×５㎝の平面をし，厚さが５㎝ある安山岩円礫を使用した叩石で，２面を使っている。

７　９トレンチ・10トレンチ（第２図・第７図）

字栫の標高約180mにある畑約500㎡を対象にして設定したトレンチで，９トレンチが３ｍ×４ｍ，10トレンチが２ｍ×４ｍとそれぞれ東西に長い。地層は黒褐色土（表土，厚さ20㎝），黒色土（厚さ20㎝），明茶褐色土（厚さ10㎝），黒褐色土（厚さ50㎝），黄褐色ローム（厚さ50㎝），灰褐色砂質土（厚さ40㎝）と続き，以下暗茶褐色・濁黄白色などの砂質土がくり返し堆積している。

表面で近世の擂鉢が１点採取されているのみである。

第２節　発掘調査の方法

平成13年度の確認調査の結果を受け，平成14年度に事業区域内の字二俣及び羽田の２地点について本調査を実施することになったが，便宜的に字二俣地区をＡ地点，字羽田地区をＢ地点と区分して調査を行うこととした。また，調査区の幅が狭く，調査区内での排土処理が困難であったため，掘削によって生じた排土は，隣接する事業区内の施工終了区間等に搬出する方法をとった。

調査は，測量基準としてＡ地点は施工計画図のＴ－13とＴ－14の２点を結ぶ線を基軸に，東西方向に１・２・３～，南北方向にＡ・Ｂ・Ｃ～とする10m間隔の調査用区割り（グリッド）を設定して実施した。Ｂ地点は，東西方向に１・２・３～，南北方向にＡ・Ｂとする10m間隔の任意の調査用区割りを設定して行った。なお，レベル原点は，姶良郡横川町下ノ字山住（3099－6番地の西，山住橋の橋梁上）に所在するＫＢＭ－１（Ｈ＝176.961m）を基準として利用した。

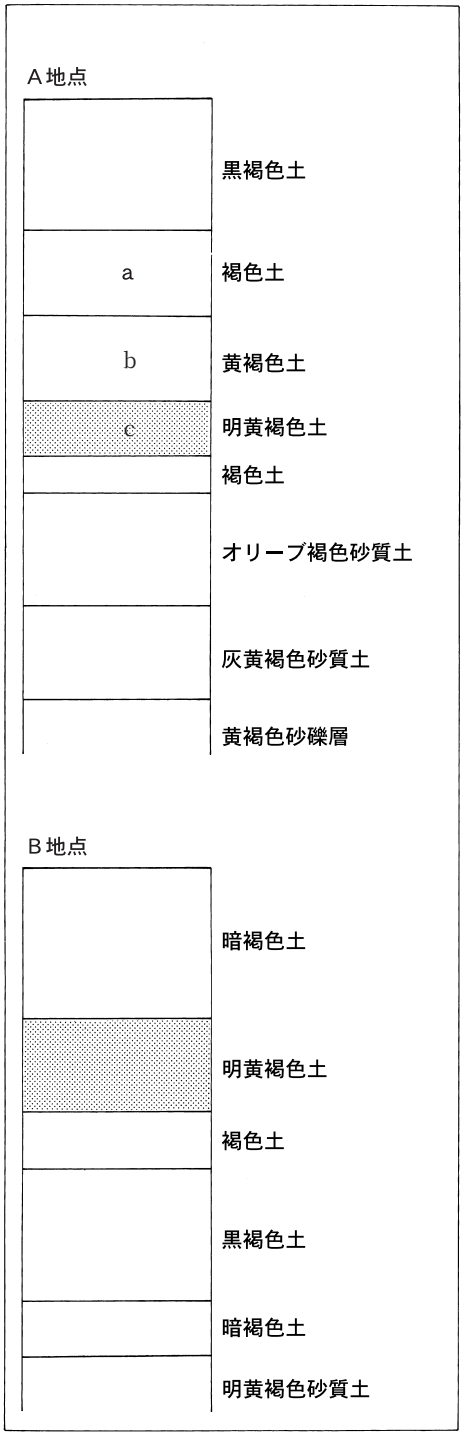
本調査は，両地点の県道拡幅部分を並行して実施することとし，Ａ地点のうち歩道施工予定部分については，工事掘削による遺物包含層への影響の有無を確認するため，重機（バックホー）による掘り下げを行った。その際，現道との高低差が１～２ｍをこえることから，作業上の安全等を考慮し，法勾配をとりながら掘削を行った。その結果，歩道施工面より上位で遺物包含層が確認されたため，人力による発掘調査を継続して実施することになった。

調査の方法としては，伐採等の環境整備を実施した後，重機（バックホー）によって表土を除去し，Ａ地点は，Ⅱａ層（アカホヤ火山灰腐食土）上面，Ｂ地点はⅡ層上面まで人力（山鍬・ジョレン等を利用）による掘り下げを行った。検出した遺構については，丁寧に掘り下げ（移植ゴテ等を利用），写真撮影や図面作成作業を実施した。その後，Ⅱｃ層またはⅢ層上面まで人力によって掘り下げ，遺物の取り上げ等を行った後，再度，遺構検出・図面作成作業等を実施した。さらに下層確認のため，部分的に先行トレンチを設定して掘り下げを行い，遺物を包含する層の確認を行った。

なお，Ａ地点の現県道部分については，現道下位に遺物を包含する層が残存する可能性があったことから，道路脇に沿う形で先行トレンチを設定し，地層の断面観察等を行った。その結果，Ⅲ層またはⅣ層下位に黄褐色砂礫層の堆積が確認され，当該層からは遺物の出土も認められなかったことから，県道を挟む部分に範囲を絞り込んで発掘調査を実施した。

第３節　遺跡の層位

栫遺跡は，標高約180mの丘陵および馬渡川の開析によって形成された浸食谷に立地する。河川の浸食作用・沖積作用や後世の畑地造成等の影響もあり，層の堆積状況や残存状況には調査区によって差異が認められた。



表土・盛土・耕作土。層厚約10～180cmである。

アカホヤ火山灰腐植土。層厚約20～40cmである。縄文時代中期の遺物包含層である。

アカホヤ火山灰二次堆積層。硬くしまっている。層厚約20～30cmである。

アカホヤ火山灰一次堆積層。鬼界カルデラを噴出源とする約6,300～6,400年前の噴出物である。層厚約10～30cmである。

層厚約10～15cmである。硬くしまっている。

層厚約30～40cmである。

層厚約30cm～

礫の径５～10cmである。

表土・耕作土。層厚約70cmである。

アカホヤ火山灰一次堆積層。鬼界カルデラを噴出源とする約6,300～6,400年前の噴出物で層厚約20～30cmである。近世～近代の遺構検出面である。

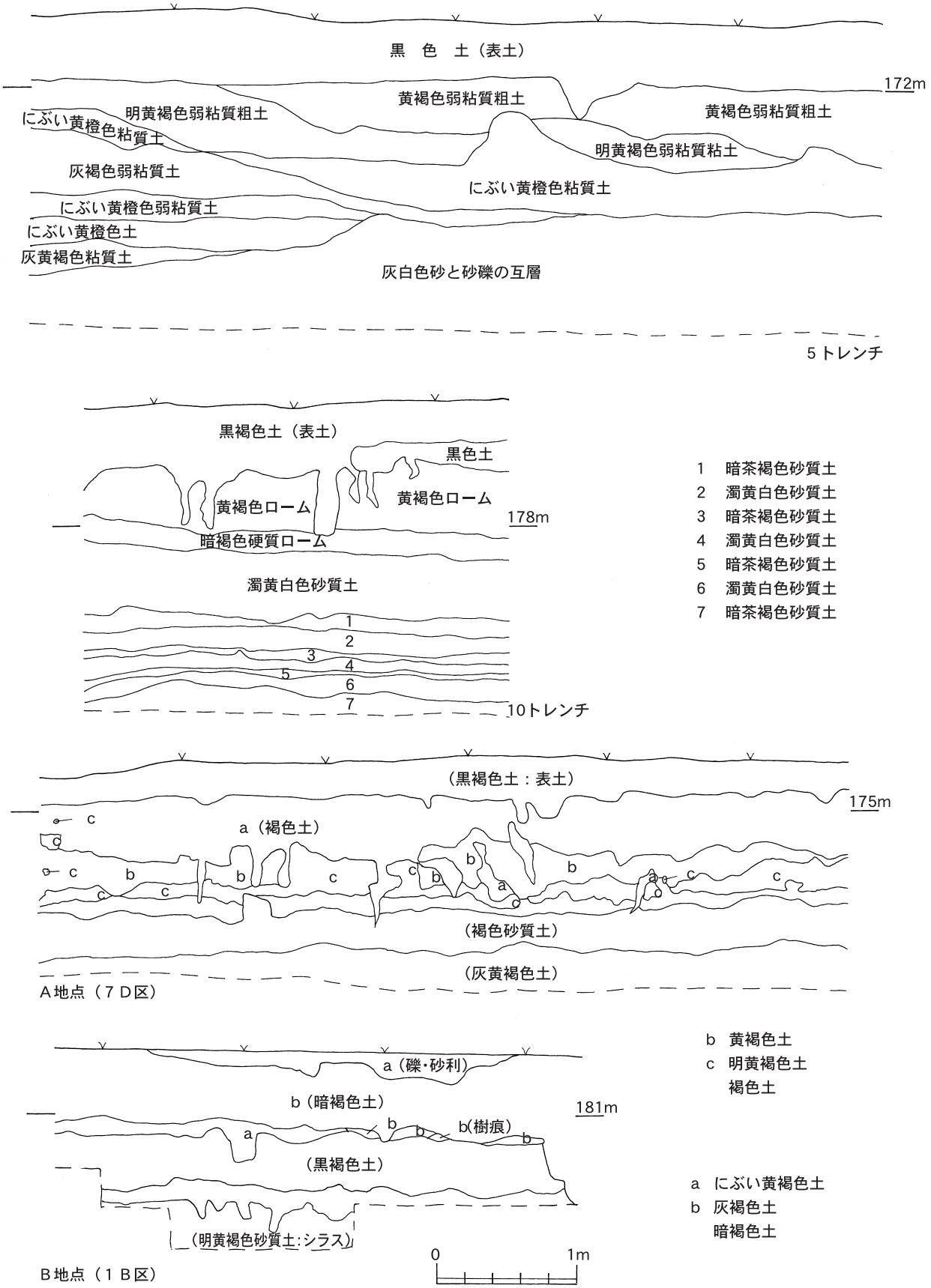
層厚約20cmである。

層厚約40cmである。

層厚約10～20cmである。

明黄褐色砂質土　シラス層。姶良カルデラを噴出源とする約25,000～28,000年前の噴出物である。

第５図　基本地層図


黒　色　土（表土）
172m
黄褐色弱粘質粗土
明黄褐色弱粘質粗土
にぶい黄橙色粘質土
黄褐色弱粘質粗土
明黄褐色弱粘質粘土
灰褐色弱粘質土
にぶい黄橙色粘質土
にぶい黄橙色弱粘質土
にぶい黄橙色土
灰黄褐色粘質土
灰白色砂と砂礫の互層
5トレンチ
黒褐色土（表土）
黒色土
黄褐色ローム
黄褐色ローム
178m
暗褐色硬質ローム
濁黄白色砂質土
1
2
3
4
5
6
7
10トレンチ
1　暗茶褐色砂質土
2　濁黄白色砂質土
3　暗茶褐色砂質土
4　濁黄白色砂質土
5　暗茶褐色砂質土
6　濁黄白色砂質土
7　暗茶褐色砂質土
（黒褐色土：表土）
175m
a（褐色土）
（褐色砂質土）
（灰黄褐色土）
A地点（7D区）
a（礫・砂利）
b（暗褐色土）
181m
b(樹痕)
（黒褐色土）
（明黄褐色砂質土:シラス）
B地点（1B区）
0
1m
b　黄褐色土
c　明黄褐色土
褐色土
a　にぶい黄褐色土
b　灰褐色土
暗褐色土

第６図　地層断面図

第Ⅳ章　Ａ地点の調査

第１節　調査の概要

Ａ地点では縄文時代早期の土器がⅢ層から出土，縄文時代中期の土器がⅡａ層で出土した。またⅡａ層上面で縄文時代中期の集石２基と，時期不明の土坑１基，古代の溝状遺構２条，近世・近代のものと思われる溝状遺構４条と古道５条が検出された。

第２節　検出遺構

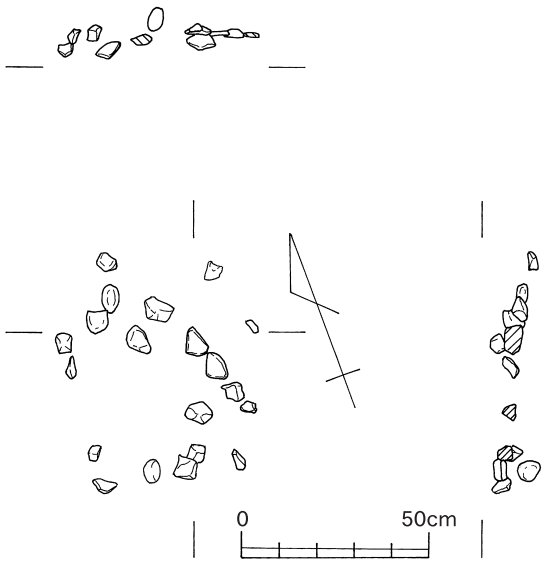
いずれの遺構もⅡａ層上面で検出されており，時代は出土品で判断した。

１　集石

１）１号集石（第７図）

確認調査の時に５Ｄ区にあたる場所にあるトレンチ３で検出された。径約90×130㎝のだ円形をした浅い掘り込みの中に20点の礫で構成される。安山岩・砂岩の円礫・亜円礫が0.65×0.55㎝の範囲から出土している。

時期ははっきりしないが，周辺から出土している土器などから縄文時代中期のものと思われる。



第７図　１号集石

２）２号集石（第８図）

６Ｄ区で検出された。礫は1.8×4.5mの範囲に散在している。安山岩・砂岩の円礫・亜円礫で構成される。集石内で炭化物，掘り込み等は確認されなかったが，周辺から縄文土器片や石器の出土があった。表土から集石検出面までの深度が浅いこともあり，礫の散布状況から判断すると後世の耕作などによって礫が二次的に移動している可能性がある。中で出土した土器片からして縄文時代中期のものと思われる。

２　土坑（第８図）

６Ｄ区で検出されたややだ円形のもので，長径50㎝，短径35㎝である。埋土は黄灰褐色土で，埋土内からは遺物は出土していない。２号集石を切っていることから，２号集石より新しいが，はっきりした年代は不明である。

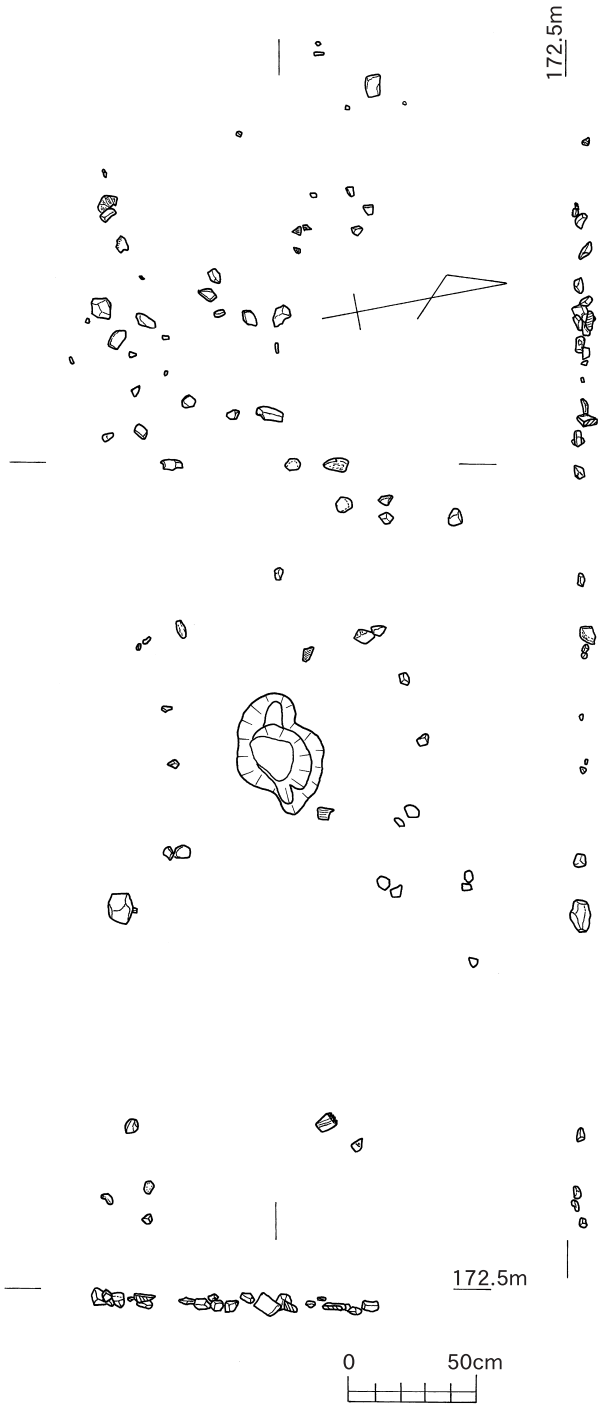
３　溝状遺構（第９図～第11図）

２区から８区にかけて６条の溝状遺構が検出された。

１）１号（第９図・第10図）

８Ｄ区で検出された南北方向に流れる幅1.6～2.4m，深さ約15㎝の浅い溝である。北側へ登っているため浅くなり，道路付近では確認できていない。長さ約５ｍで，底は狭くなる，ゆるやかなＶ字状を呈する。

土師甕が１点（19）出土している。丸みをおびた口縁部で，くの字状に強く屈曲している。外面



第８図　２号集石

と，口縁部内面はヘラによる横ナデで仕上げ，胴部内面は縦方向のヘラケズリで仕上げている。淡茶褐色を呈し，焼成度は普通である。黄白色・石英などのこまかい石が多いが，６㎜大の大きなものも含まれている。

古代のものと思われる。

２）２号（第９図・第10図）

８Ｄ区から７Ｄ区へ流れている幅1.0～1.6m，深さ約10㎝の浅い溝である。南から北西へ曲がっており，西端は浅くなって，それ以西は検出できていない。長さ約８ｍの，底が狭いＶ字状を呈する。

18は内黒土師器の高台付埦である。外面はヘラナデ，内面はヘラミガキをしており，外面は乳灰色を呈している。火山ガラス・茶色石などのこまかい石を含み，外はまめつしている。

埋土・出土品から考えて１号と同じ古代のものと思われる。

３）３号（第９図・第11図）

２Ａ区から２Ｂ区で検出された幅約0.8m，深さ10㎝の浅い溝で東側は撹乱され，西側は用地外へ延びている。長さ約3.5mの逆台形溝である。

20は薩摩焼壺の底部で，底部直径は7.5㎝ある。外は緑っぽい釉がかかり，内は黒っぽい淡茶褐色を呈しているが，内側の一部には釉垂れがみられる。

４）４号（第９図・第11図）

２Ａ区から２Ｂ区で検出された幅60～80㎝，深さ約20㎝の浅い溝で，東西の端は用地外へ延びている。長さ約６ｍのＶ字溝である。

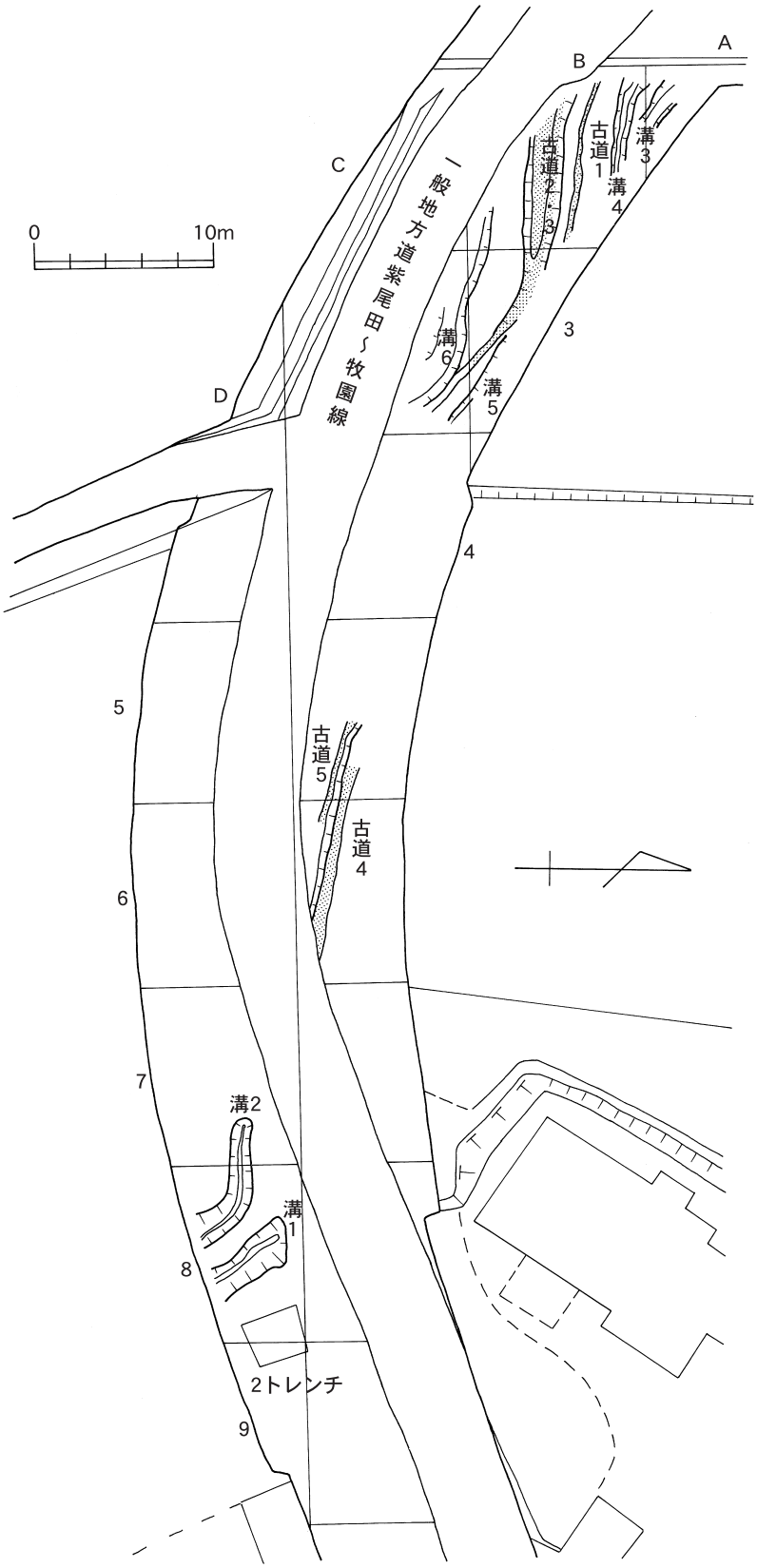
５）５号（第９図・第11図）

３Ｂ区・３Ｃ区で検出された溝で，北端が調査区外にあるため幅は不明である。深さは５㎝と浅く，長さ6.7mが検出できた。

６）６号（第９図・第11図）

２Ｂ・Ｃ区から３Ｂ・Ｃ区で検出された幅190㎝，深さ10㎝の逆台形の浅い溝で，蛇行しており長さ12mが検出された。

21は陶器擂鉢の底部近くである。内外とも横方向にナデており，外面には３か所にくぼみがみら



第９図　Ａ地点遺構配置図

れる。内面には間隔をあけた下から上への８条からなるかき目がみられ，下半部は使用痕による摩滅が目立つ。きめこまかい土を用い，黄みがかった茶褐色を呈している。焼きは良く堅い。

江戸時代前半のものである。

４　古道

床面に硬化面が残った古道が５条検出されている。

１）１号（第９図・第11図）

２Ｂ区で検出された硬化面幅20～40㎝の道跡で，長さ6.5mが検出された。東端は北側が溝状になっている。

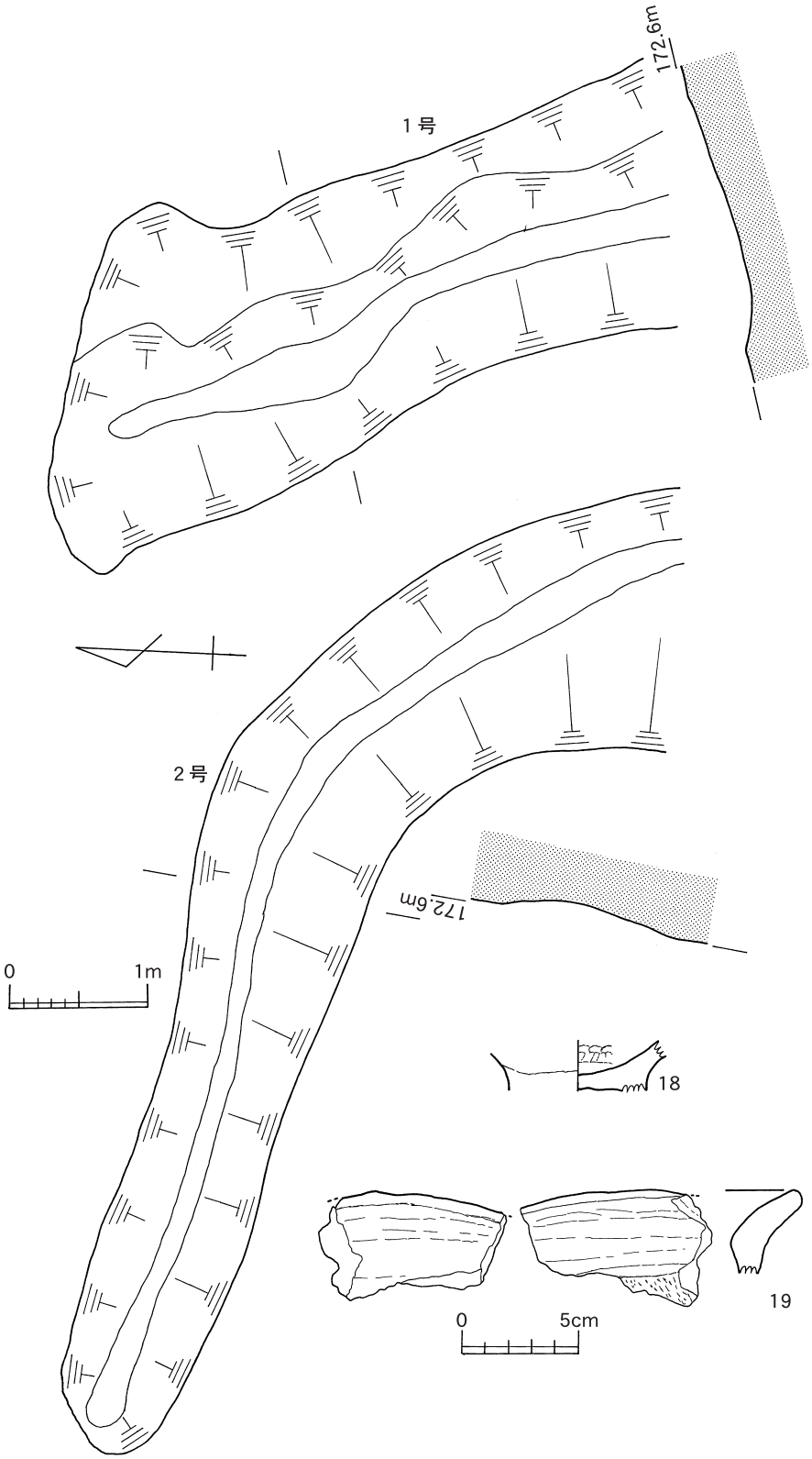
２）２号（第９図・第11図）

２Ｂ区から３Ｂ区，３Ｃ区と続く幅40～80㎝，深さ20㎝の溝状を呈する道跡で，古道３号より新しい。長さ約18mが検出された。

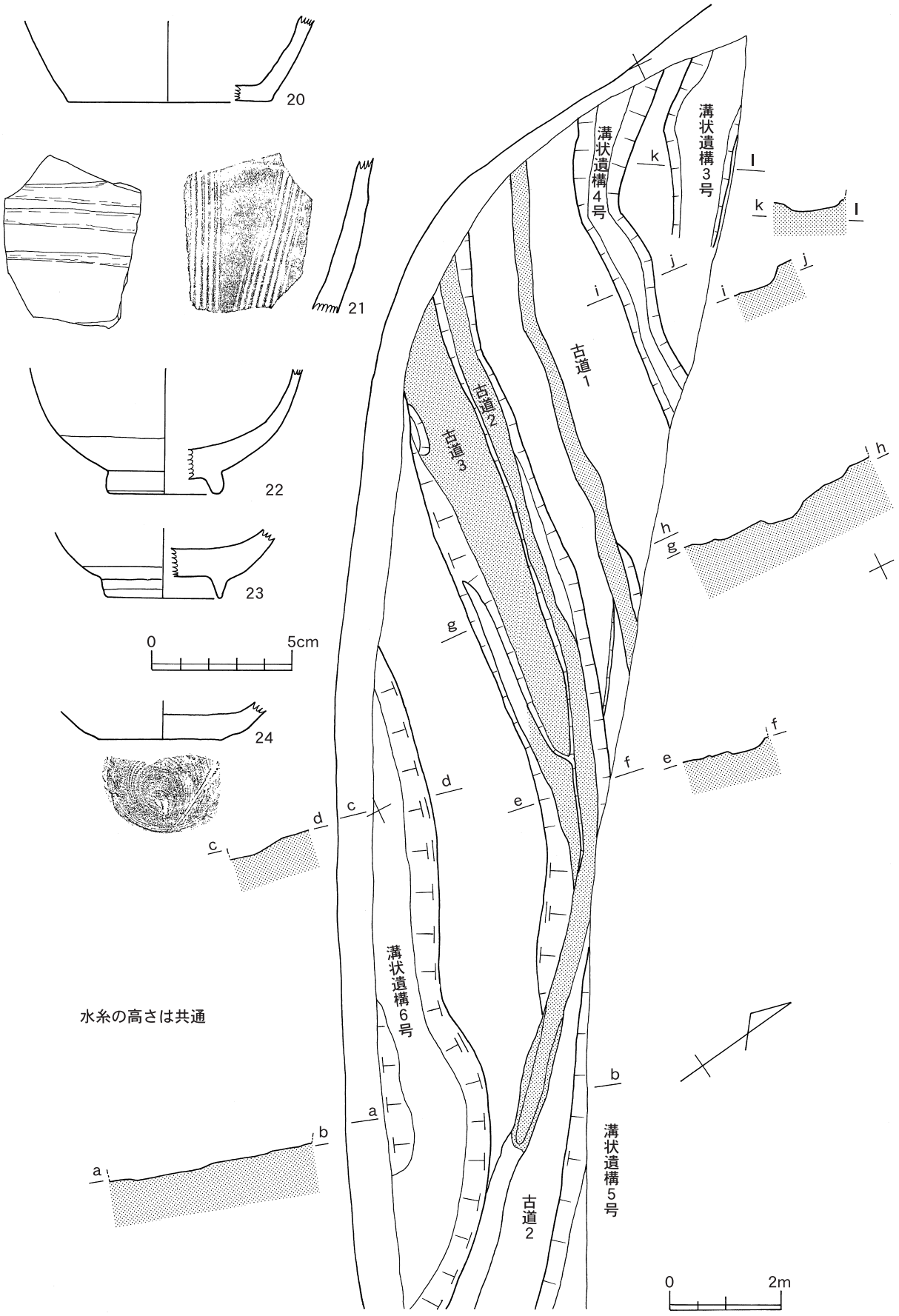
22は外が緑色，内が灰色（透明釉）をした磁器の高台付碗である。高台の直径は４㎝で，外の底から高台にかけては無釉である。23は灰色を呈した透明釉がかかった磁器の高台付碗である。外面に淡い青色をした３条の圏線があり，高台や内底部では釉切れがみられる。畳付部のみ露胎となっている。先のとがった高台で，直径は４㎝ある。部厚い体部で，内外とも貫入がみられる。

３）３号（第９図・第11図）

２Ｂ区・３Ｂ区で検出された幅120㎝，深さ20～30㎝の浅い



第10図　溝状遺構１号・２号と出土土器



第11図　２・３区検出の溝・古道及びその出土土器

溝状を呈する道跡で，硬化面幅は60～100㎝ほどある。長さ約10mが検出された。

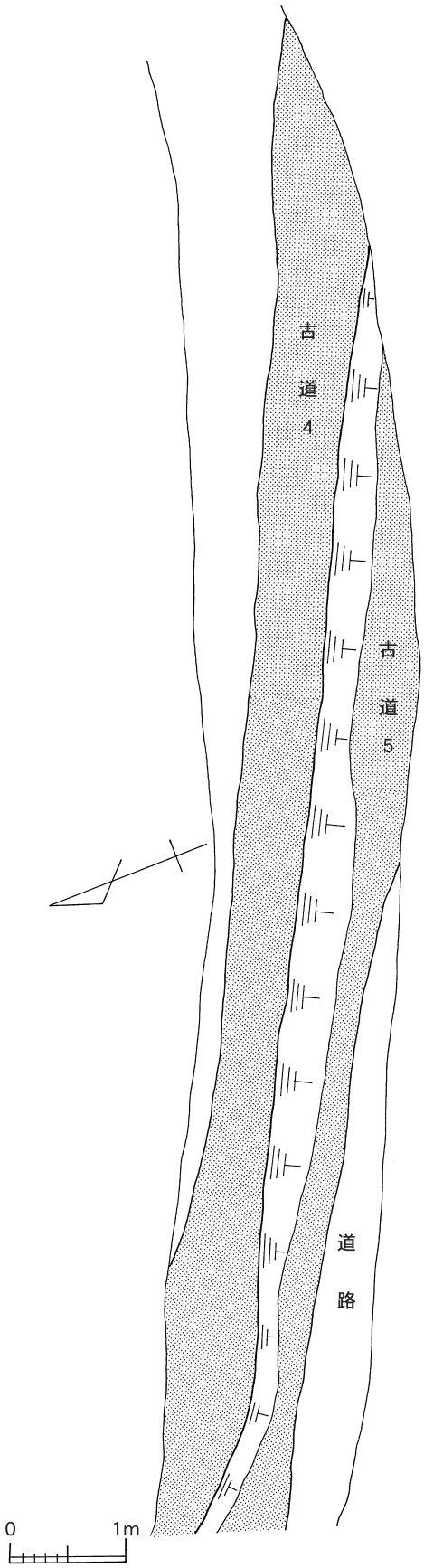
24は内面に緑色釉のかかった陶器坏である。二次的に火を受けており外面は灰白色を呈している。底の直径は４㎝で，切り離しは糸切りである。

４）４号（第９図・第12図）

５Ｃ・６Ｃ区で発見され，古道５号の北にほぼ並行している。硬化面の幅は60～70㎝で，東西方向が道路と用地外へ延びているため，長さ13.4mだけが検出された。

５）５号（第９図・第12図）

５Ｃ・６Ｃ区で発見された東西に続く古道だが，南側が道路へ延びているため幅は不明である。長さ11.3mが検出された。溝状を呈するが，浅い。下面は硬化面となっているため，本来の用途は道だろうと思われ，古道４号よりは新しい。



第12図　古道４・５

第３節　出土遺物

出土遺物は，縄文時代早期・中期の土器，石器，土師器，陶磁器などがある。

１　縄文時代早期の土器

６～９－Ｃ・Ｄ区で12点出土している。手向山式土器と塞ノ神Ａ式土器がある。

１）手向山式土器（第13図25～32）

山形押型文と同心円文押型文・菱形状押型文がある。25は外反する口縁部で，口唇部は矩形を呈しているが，山形押型文があるため凹凸がみられる。外面は横方向の山形押型文で，内面はていねいなナデ仕上げである。内面は剥脱している。26～28も外面は山形押型文土器である。29・30は同心円文押型文土器である。31は菱形を意識した条痕文である。これらは内外ともていねいにナデている。色調は黄みがかった茶褐色・乳茶褐色などをしており，焼成度は良い。32は壺形をしている。外反する口縁部で直径が13.5㎝ある。外面は撚糸文の上をヘラでナデている。内面はヘラで縦方向にナデている。口唇部に山形押型文がある。

２）塞ノ神Ａ式土器（第13図33～36）

６－Ｃ・Ｄ区で４点出土している。33は外へ広がる口縁部で，口唇部は丸みをおびているが，ここにヘラで綾杉状の押圧文が施されている。外面はナデ整形のあと２条の凹線文がみられる。34～36は胴部でいずれも斜格子状に撚糸文や刺突文・凹線文が施される。34は２条の横方向凹線の下に，これと並行するヘラ刺突文があり，その下には３条の斜方向凹線とその間にヘラ刺突文があるという文様形態を作る。口縁に近い破片で，やや外反している。35は斜格子状に撚糸文がみられる。36は横方向のヘラ凹線とその下に斜方向撚糸文がみられる。これらの内面はいずれもヘラによってていねいな横ナデ調整がされる。淡茶褐色あるいは黄みがかった茶褐色を呈し，33の外面にはススが付着している。焼成度は良好で，火山ガラスや長石を多く含む土を用いている。

２　縄文時代中期の土器

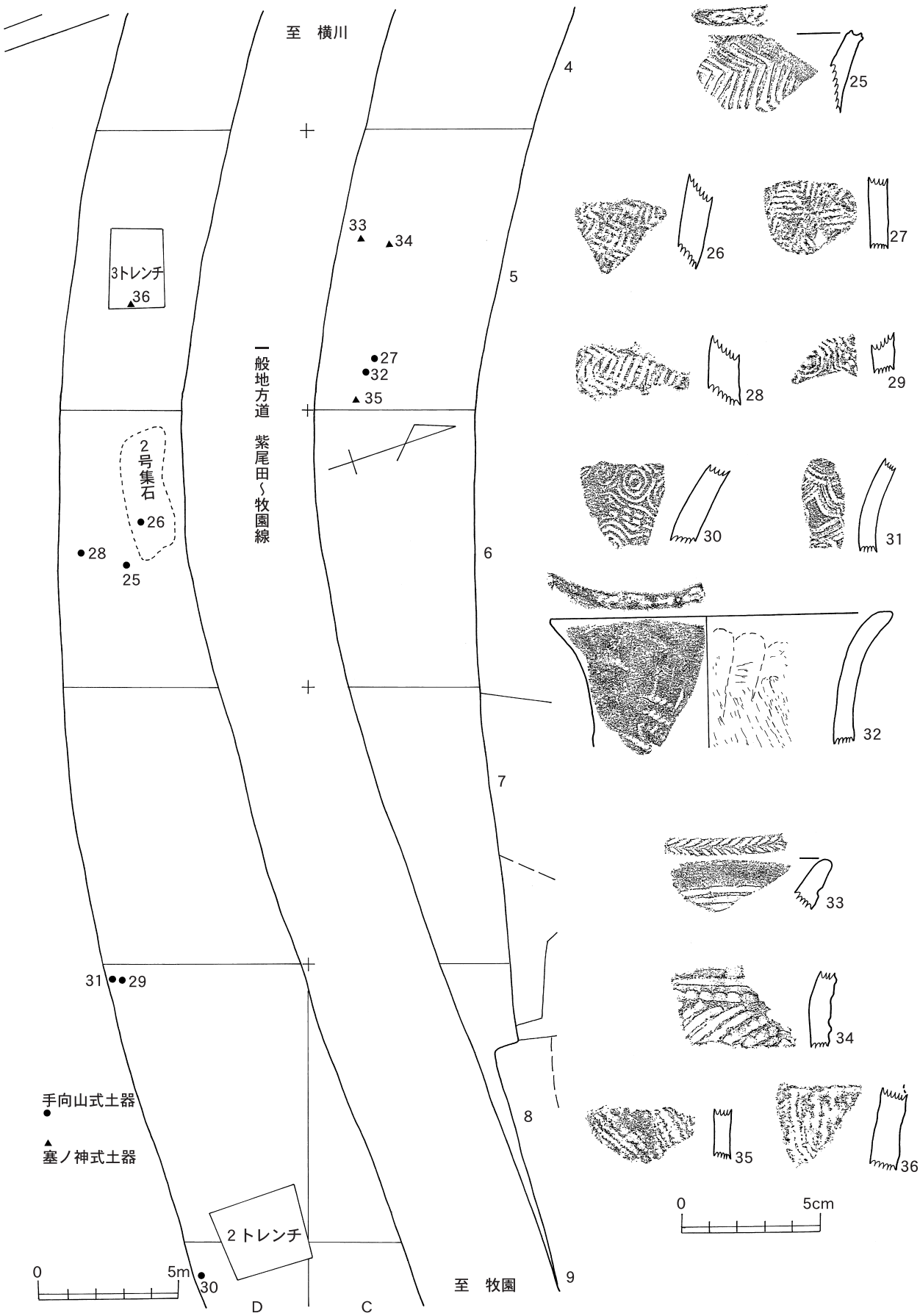
Ａ地点ではもっとも多く出土しており，第14図に示したように２Ｂ区から８Ｄ区まで広い範囲で出土している。これらはすべて春日式土器であるが，全形がわかるものはないので口縁部・胴部・底部に分けて記述する。なお，胎土に滑石を多量に含んでいるものについては分けて記した。

１）口縁部（第15図～第19図37～83）

形状・文様によって６類に分ける。

①１類（37～44）

キャリパー形に内弯するものである。37・39・40・43・44は押引き手法による沈線で文様を描いている。40・44は口唇部にも同様の手法で刻みを施している。37と39は押引き手法による文様の他に，口唇部に沿って貼付け文を施している。37は２条の鋸歯状沈線とその上に押圧文がある。内面にも一部押圧文がみられる。38は３条のヘラ沈線によって波状文を描き，その上に刺突文があるが，刺突文は沈線の下側にはみ出る傾向がある。波状口縁である。41は外面に横方向２条，斜方向１条のヘラ凹線があり，口唇部にもヘラ押圧文がみられる。42は素文であるが，口唇部外側にのみ貝殻腹縁による刻みが施されている。



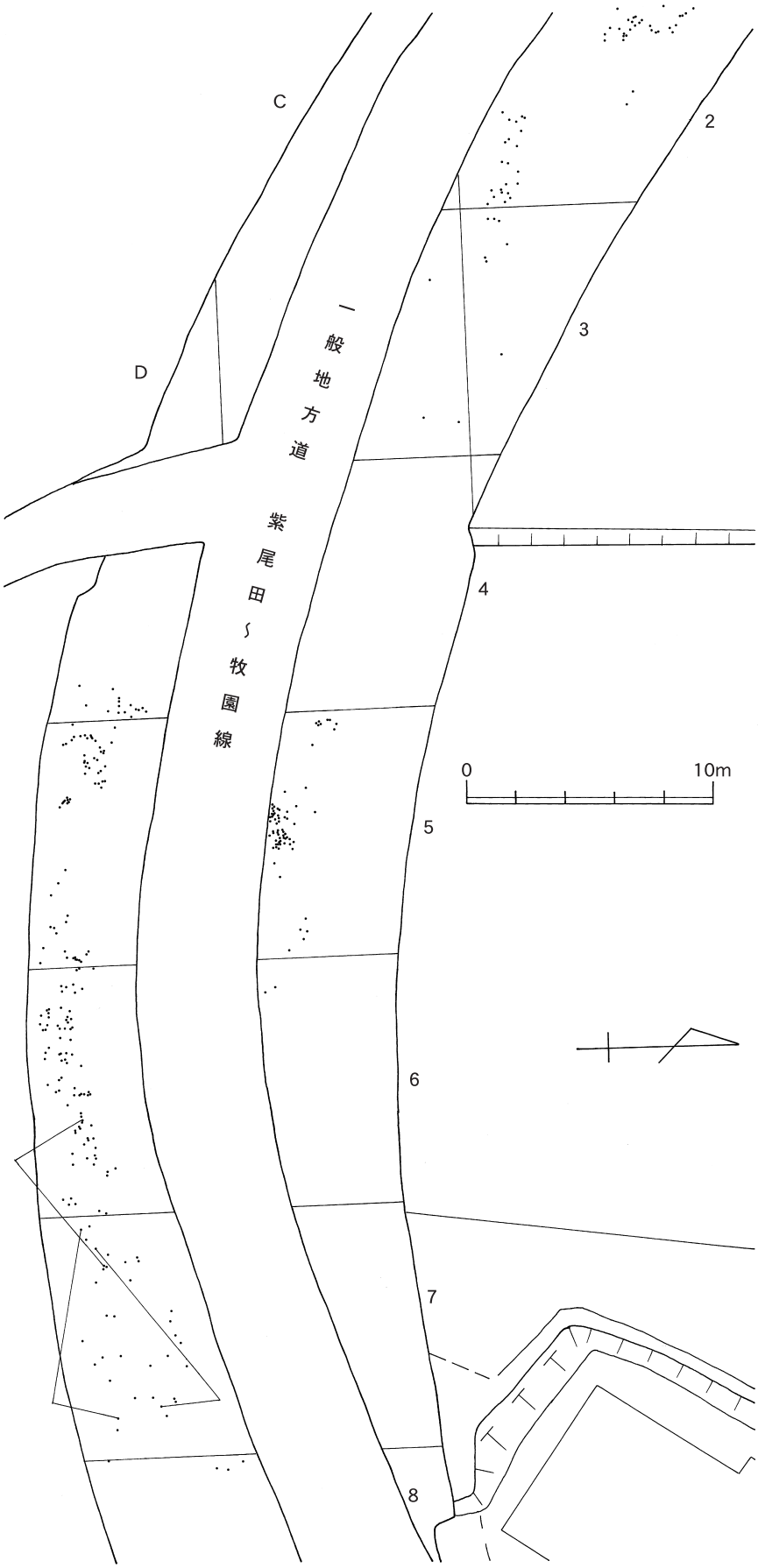
第13図　縄文時代早期の土器とその出土状況

②２類（45～56）

キャリパー形の内弯度がゆるくなっているが，口縁部上端をわずかに内弯させるなどしてキャリパー形を保っているものである。

45はヘラ沈線による鋸歯状の波状文と横線があり，口唇部にはヘラ押圧文がみられる。46は沈線によって２条の波状文を描いているが，波頂部がとがりぎみになっており，口唇部内側には刻みと１条の沈線文が施されている。波状口縁となる。47は縦あるいは横方向の短い貼付け文とその上に巻貝殻頂による刺突文で文様を描いている。48は斜め下がりの貼付け文の上に一条の貝殻沈線が引かれる。

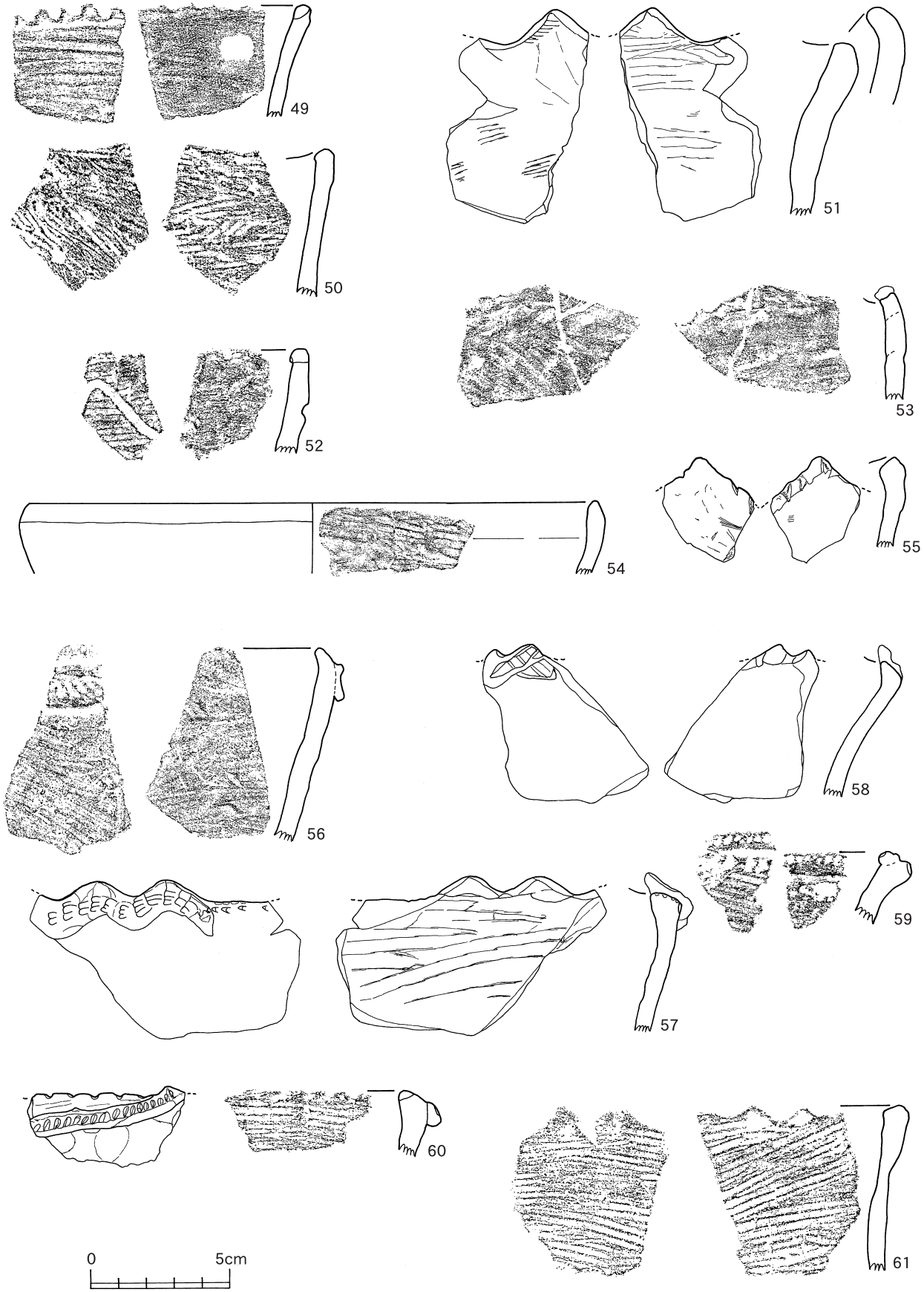
49～56は口縁部上端をわずかに内弯させてキャリパー形を保つもので，ほとんどが無文である。49は口唇部に貝殻押圧文が連続して施され，波状を呈している。50・51・53・55は波状口縁になっている。51は部厚い作りで，突起部外面に浅いヘラ押圧文がみられる。52はヘラ凹線による波状文が描かれ，口唇部に２か



第14図　春日式土器出土状況

第15図　春日式土器(1)

所，貝殻押圧文がみられる。53も口唇部にヘラ押圧文がみられ，輪積み痕跡が目立つ。54は口縁直径が20.5㎝ある。55も口唇部に内側から貝殻による押圧文がみられる。56は口縁端の少し下に太めの貼付け文が施され，そこに貝殻押圧文がみられる。



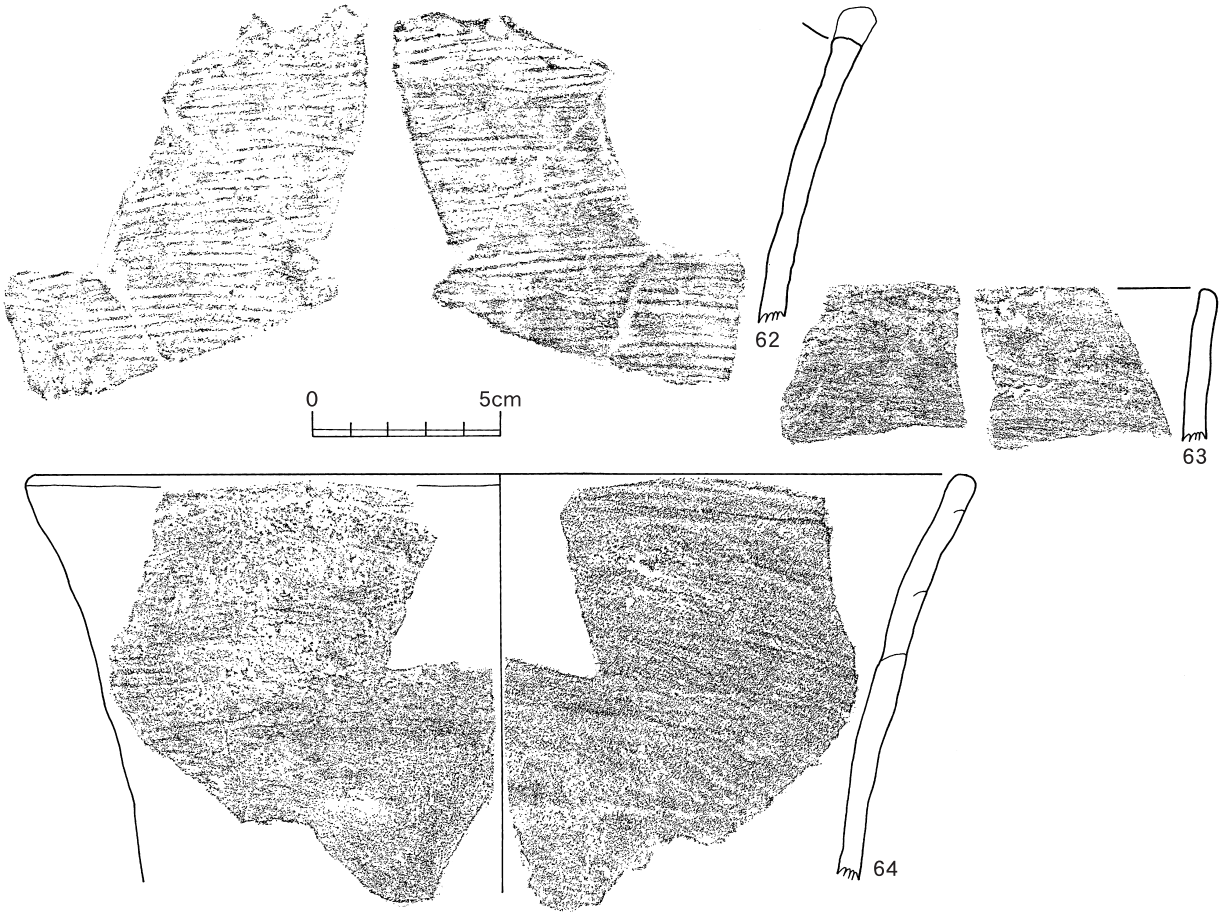
第16図　春日式土器(2)

③３類（57～62）

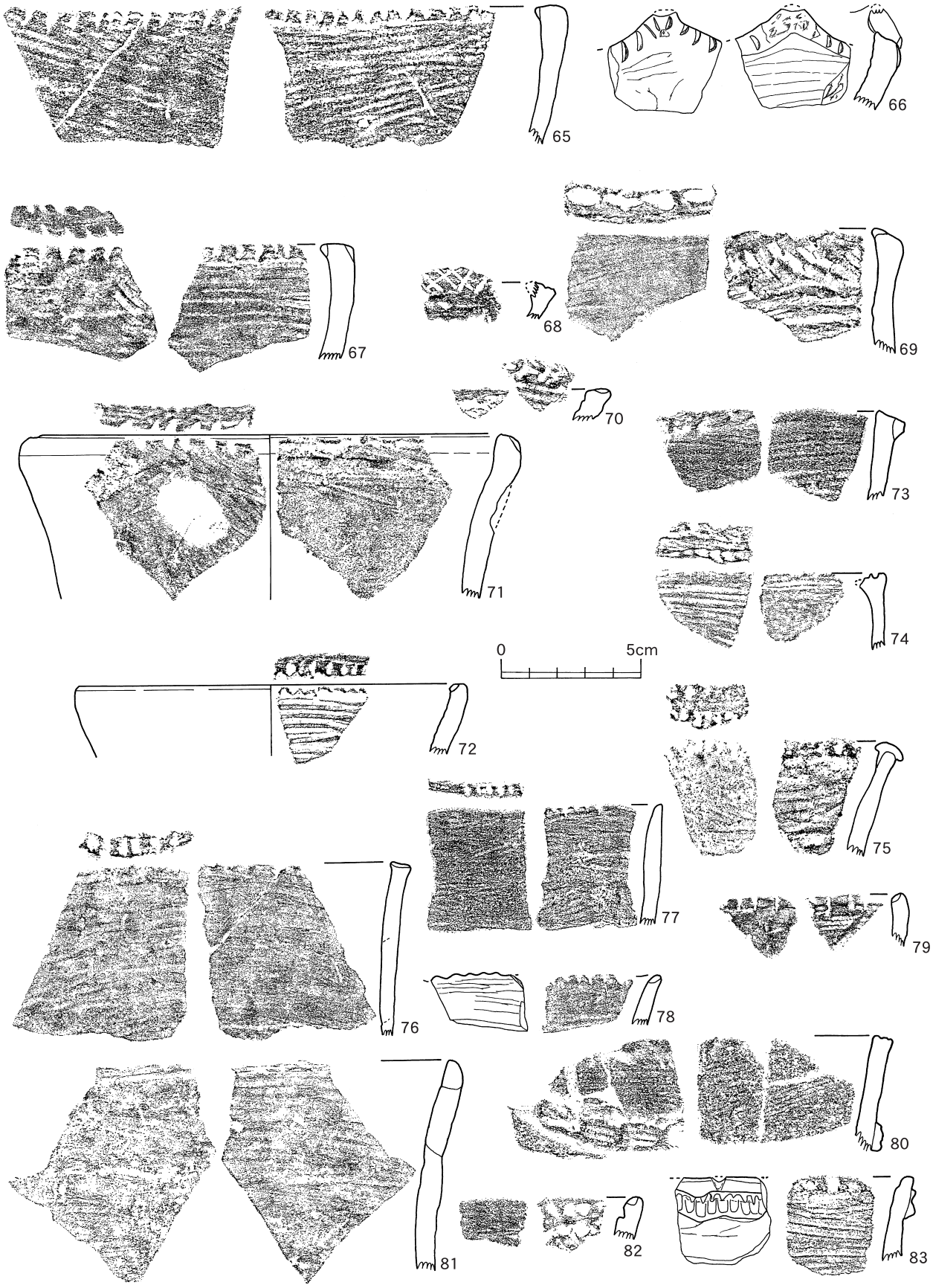
口唇部に沿って貼付け文を施すことによってキャリパー形を保っているものである。57はまっすぐのびた口縁部で，やや平らに広く面取りした口唇部と，口縁外面に押引き状の貝殻殻頂の刻みを施している。その口唇部の一部に太めの貼付け文を波状に施し，二枚貝腹縁で押さえている。58は貼付け文と口唇部が一体化しているが，57と同じ手法によるものである。59・60は口縁部からわずかに下がったところの内外に貼付け文を巡らしている。59は内側貼付け文上には巻貝殻頂で，外面口縁端には二枚貝腹縁による押圧文がみられる。60は口唇部と斜方向に貼付けられた突帯上に貝殻押圧文がみられる。61は口縁端を二枚貝殻頂部で強く押し，口縁端の波状が高い。62は口縁部と一体化しているものの，口唇部の一部に粘土を重ねて２つの波状文を作り出そうとしている。

④４類（65～75）

口唇部の一端をつまみ出すことによって，かろうじてキャリパー形の形状をとどめているもので，端部には刻み目が施されている。65・67は内側に引き出して内弯ぎみにしたもので，波状を呈し，口縁内外に二枚貝押圧文がみられる。66は突起を有するもので，外は二枚貝の殻頂で，内はヘラによって押圧がみられる。68は内外に引き出しており，口唇部に斜格子状沈線が施される。69は内側



第17図　春日式土器(3)



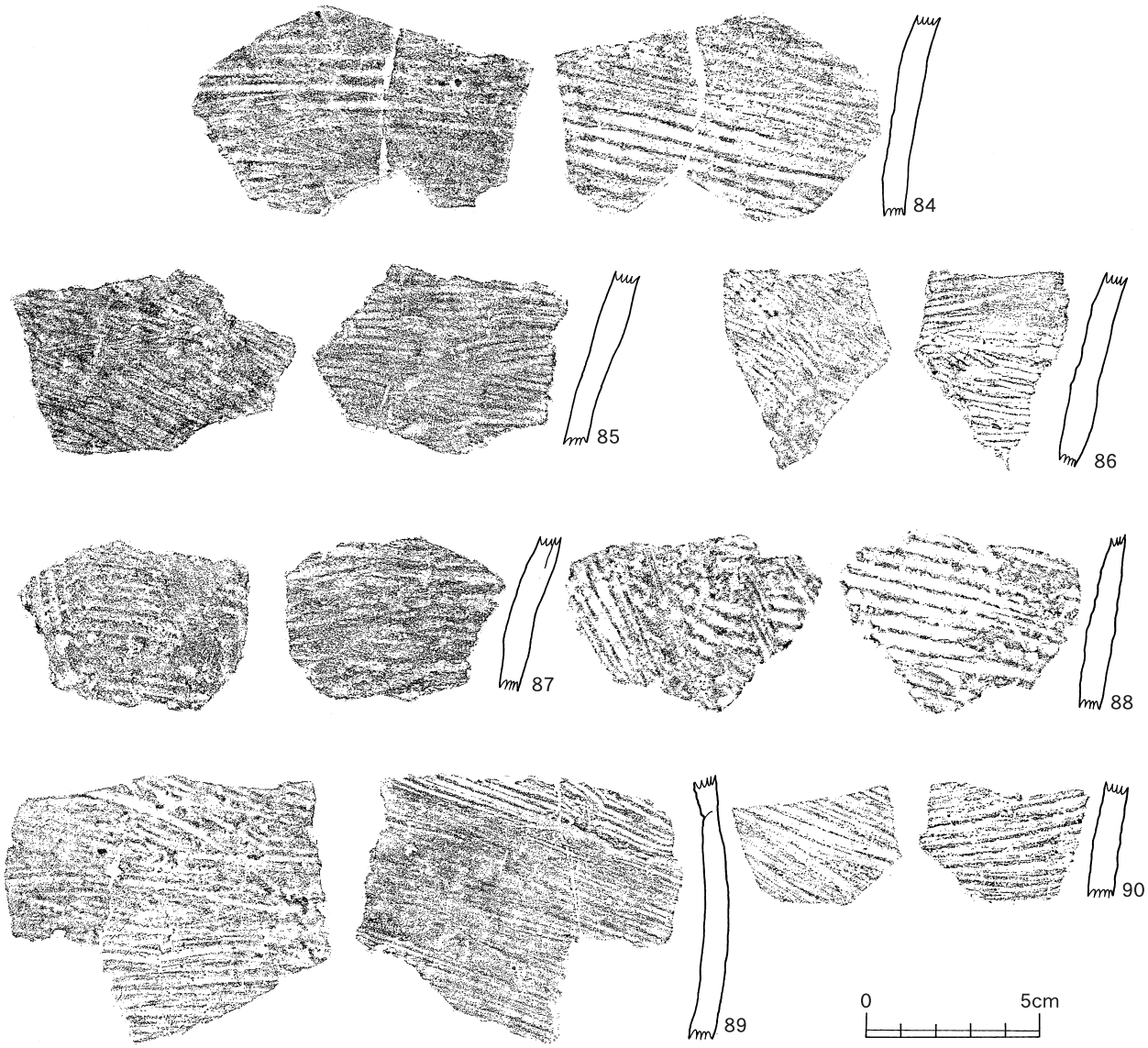
第18図　春日式土器(4)

に引き出し，口唇部に巻貝による大き目の押圧文がみられる。70は外に引き出し，口唇部に二枚貝腹縁による押圧文がみられる。71は内側へ引き出し，口縁外面から口唇部にかけて貝殻の押圧文がみられる。口縁部直径は18㎝ある。72も内側へ引き出しているが，内側から口唇部にかけてヘラ押圧文がみられる。口縁部直径が14㎝である。73は外側へ逆台形状に引っぱり出して，その端部に刺突文がみられる。74は内側へ強く引っぱり出し広くなった口唇部に２条の押圧文がみられる。75は口唇部に貼付け文があり，その口唇部に２条の貝殻押圧文がみられる。

⑤５類（76～80）

直口する口縁のものである。

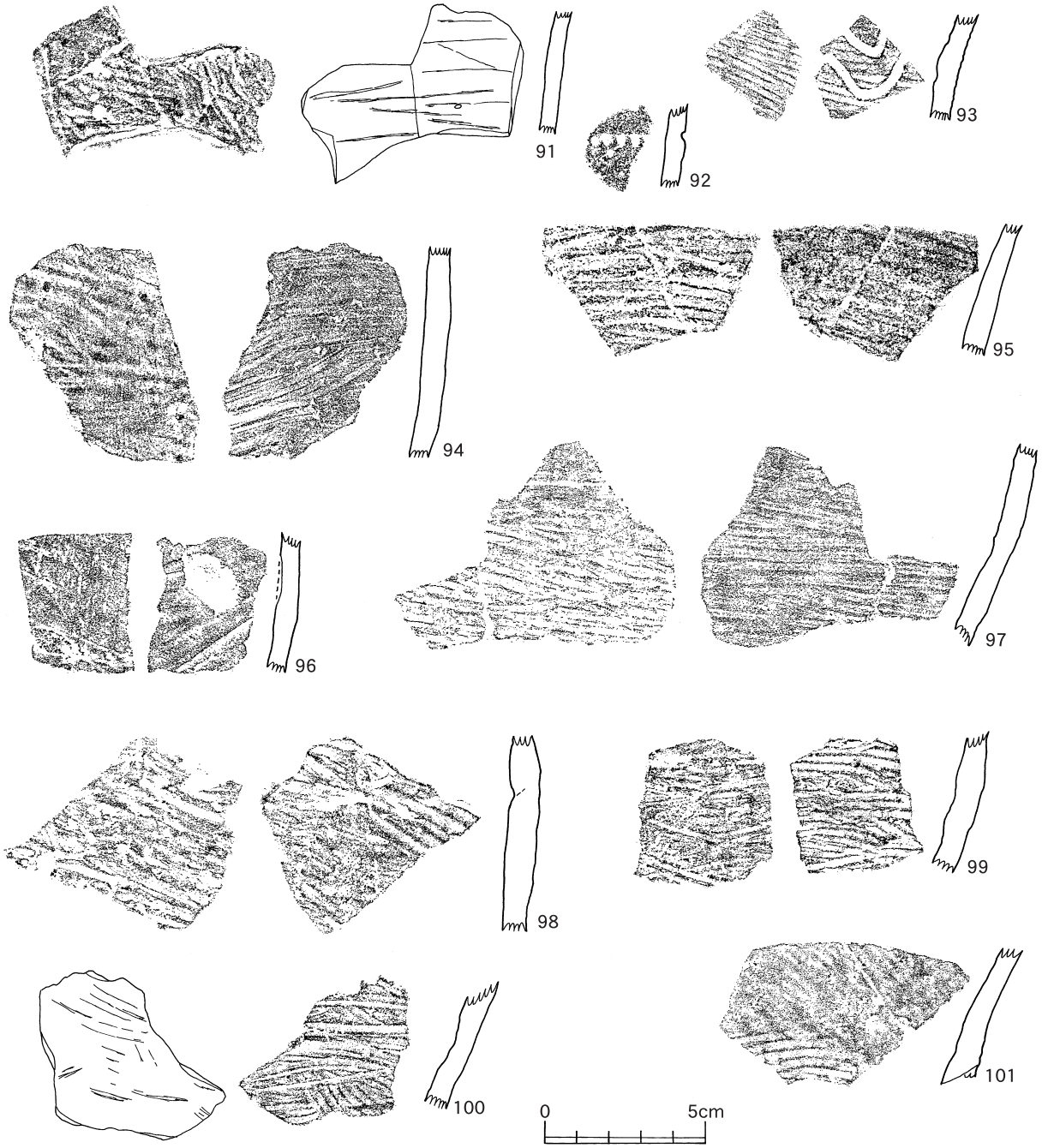
76～80は口唇部に二枚貝やヘラによる押圧文がみられるが，77は６か所だけで途切れている。80は口縁の下に斜方向の貼付け文があり，その上に二枚貝押圧文がみられる。



第19図　春日式土器(5)

⑥６類（63・64・81～83）

その他の土器である。64は口縁直径が25㎝あり，外へ広がりながらまっすぐのびている。幅１～２㎝ほどの輪積み痕がよく残っている。81は外反ぎみに直口し，輪積み痕がよく残っている。口唇部はわずかに肥厚し断面が三角形状となる。器面調整は横方向の浅い条痕によるものである。口縁部付近の外面にはススがついている。63・64・81は同一個体と思われる。82は内面の２段に巻貝殻頂による刺突文を施すものである。83は，わずかに外反した口縁部に貼付け文を巡らすもので，その上を何らかの施文具で押さえている。



第20図　春日式土器(6)

２）胴部（第19図・第20図　84～101）

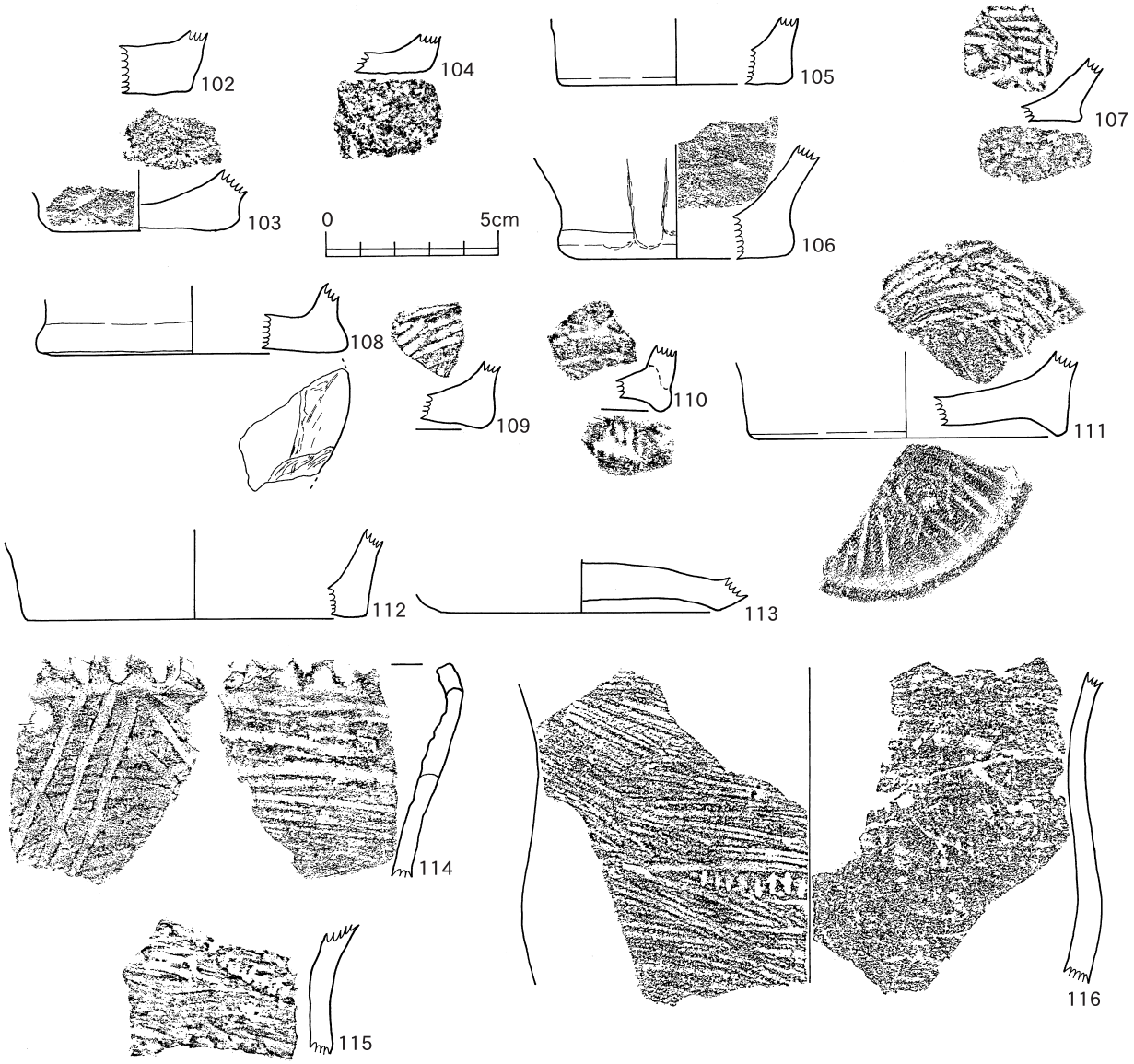
胴部の調整には横方向の貝殻条痕が多くみられる。内面は粗いものと浅いものとがある。

84～90・93・98～100は粗いものである。91・94～97は浅いものである。92は外面にヘラによる刺突文がみられる。93は内面に貝殻による２条の波状文がみられる。100・101は底部近くで，101は底との積みあげ痕がみられる。

３）底部（第21図　102～113）

平底のものと，上げ底のものとがあるが，平底のものにはまっすぐ接地面へ至るものと，張り出しをもつものとがある。

102・104は外がでこぼこしており，104は底もでこぼこしている。103が直径６㎝，105が直径９㎝ある。106・107は張り出す底部だが，106が丸みをもっているのに対し，107は角ばっている。



第21図　春日式土器(7)

第２表　春日式土器一覧表(1)

図番	出土区	外の調整	内の調整	色　調	焼成度	胎　　土
37	７Ｄ	貝殻条痕	横ナデ	内・淡茶褐色 外・黒褐色	良	火山ガラス・白色石などの小石の多い土
38	４Ｄ	ヘラ沈線の上にヘラ押圧　浅い貝殻条痕	横方向浅い貝殻条痕	灰黒褐色	普通	火山ガラス・白色石などの小石の多い土
39	６Ｄ	浅い貝殻条痕	浅い貝殻条痕	明茶褐色 外にスス	普通	火山ガラス・黄白色石などの混ざった細かい粘土
40	２Ａ	浅い条痕　口唇と外面に殻頂押圧	ナデ	黄褐色	良	白色石・石英・茶色石の多い細かい石
41	６Ｄ	内外ともに浅い 右下がりヘラ凹線	横方向貝殻条痕 口唇にヘラ押圧	外・灰茶褐色(部分的に黒) 内・黒褐色	良	黄白色石・黒雲母・火山ガラスの細かい石粒
42	４Ｄ	貝殻条痕　口唇二枚貝腹縁押圧３条	横ナデ	内・淡茶褐色 表・淡黒褐色	普通	長石・白色石・火山ガラスの多い細砂
43	７Ｄ	浅い貝殻条痕	横方向貝殻条痕	淡茶褐色	良	長石・白色石などの細かい石
44	１集石	口唇部と胴部に二枚貝腹縁押圧	ヘラ横ナデ	茶褐色 外やや黒み	良	火山ガラス 黄白色石多
45	７Ｄ	内外浅い条痕（ナデ風）		黄みがかった淡茶褐色	普通	火山ガラス多
46	７Ｄ	貝殻押圧とその上に沈線　浅い貝殻条痕	２条の波状沈線 浅い条痕	黄茶褐色	普通	火山ガラス・石英・黄色石の多い細かい土
47	４Ｄ	横貼付・ナデ	浅い貝殻条痕	内・黄っぽい淡黒褐色 外・スス付着淡黒褐色	普通	茶色石・火山ガラス・長石の多い細砂
48	５Ｄ	ヘラナデ	口縁近くの突帯の上から一条の貝殻凹線	内・黒褐色 外・明茶褐色	良	黄白色石・白色石
49	７Ｄ	ナデ　口唇部貝殻押圧	横方向条痕	灰がかった淡茶褐色	良	白色石・石英・長石の多い細かい石
50	７Ｄ	貝殻条痕	貝殻条痕	淡茶褐色	普通	石英・茶色石など多
51	４Ｄ ６Ｄ	浅いヘラ　浅い横条痕 スス付着	横方向条痕	暗茶褐色 黄白色	普通	石英・火山ガラスの細かい土
52	４Ｄ	横方向貝殻条痕の上にヘラ凹線	浅い貝殻条痕　口唇部２か所に貝押圧	淡茶褐色 （表面やや黒褐色）	普通	黄白色石・石英・火山ガラスの多い細砂質土
53	４Ｄ	内外とも浅い貝殻条痕とナデ 口唇部にヘラ押圧		表・黒褐色 内・淡茶褐色	普通	火山ガラス多　石英・長石などの細かい石粒
54	６Ｃ	横ナデ	貝殻条痕（横方向）	明茶褐色	普通	黄白色石・茶色石 長石の細かい石
55	４Ｄ	内外・浅い貝殻条痕		淡茶褐色（外は黒み）	普通	火山ガラス・黄白色石
56	２Ｂ	内外・浅い貝殻条痕		淡茶褐色 （外は黒っぽい）	良	火山ガラス・黄白色石
57	２Ｂ	浅い貝殻条痕	貝殻条痕	灰茶褐色　外にスス	良	黄白色石・火山ガラス 石英などの細かい土
58	４Ｄ	内外・横方向条痕		黒褐色(一部赤みがかった茶褐色) 内にスス	良	長石多　５㎜大の石もあり細かい土
59	５Ｄ	浅い貝殻押圧		内・淡茶褐色 外・淡黒褐色	普通	黄白色石・茶色石 石英の多い細かい石
60	６Ｄ	横ナデ	横方向貝殻条痕	淡茶褐色	良	火山ガラス・黄白色石などの多い土
61	７Ｄ	内外とも貝殻条痕　殻頂部押圧		外・黒褐色 内・淡茶褐色	普通	黄白色石・茶色石 石英の多い細かい土
62	７Ｄ	内外・横方向条痕		外・淡茶褐色，スス 内・黄みがかった淡茶褐色	普通	火山ガラス・石英・黄白色石・茶色石の多い細かい土
63	２Ａ	浅い貝殻条痕	横ナデ	黒褐色	良	火山ガラス多

第３表　春日式土器一覧表(2)

図番	出土区	外の調整	内の調整	色　調	焼成度	胎　　土
64	２Ｂ ７Ｄ	浅い貝殻条痕，ススス	浅い貝殻条痕	白っぽい乳茶褐色	良	火山ガラス多
65	２Ｂ	内外とも二枚貝押圧 浅くて幅の広い貝殻条痕	左さがり貝殻条痕	灰がかった明茶褐色	普通	長石の細かい石
66	２Ｂ	内外・貝殻条痕		淡茶褐色	普通	火山ガラスの多い細かい土
67	２Ｂ	浅い貝殻条痕	貝殻条痕	黄みがかった淡茶褐色	普通	石英・火山ガラス
68	４Ｄ	口縁・斜格子沈線	横方向ヘラナデ	淡茶褐色	普通	石英・火山ガラスの多い細かい石
69	３Ｂ	うすい貝殻条痕　口唇部に巻貝押圧	幅広の貝殻条痕	茶褐色　外にスス	良	白黄色・火山ガラスの多い細かい土
70	集　石	内外・横方向の貝殻条痕　口唇・貝殻腹縁押圧		黒褐色	良	火山ガラス・黄白色石の多い細砂
71	６Ｄ	条痕のあとナデ	浅い貝殻条痕	灰がかった黄褐色	良	石英・黄白色石・火山ガラスの多い砂質土
72	７Ｄ	摩滅している　口唇ヘラ押し	横方向の貝殻条痕	黒褐色	普通	火山ガラス・白色石
73	２Ｂ	浅い条痕	条痕	淡茶褐色　外にスス	普通	火山ガラス多
74	６Ｄ	横方向貝殻条痕　口唇２条の押圧	横ナデ	外・黒褐色 内・茶褐色	良	黄白色石・火山ガラスの細かい石
75	溝　状 硬化面	内外ともに横方向貝殻条痕		黒褐色　外にスス	良	黄白色石・白色石・火山ガラス・石英などの細かい石
76	４Ｄ	内外ともに浅い貝殻条痕（横） 口唇・二枚貝押圧		赤みがかった茶褐色（表面は黒っぽい）	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石
77	集　石	内外ともに薄い条痕　口唇・ヘラ刻み６		黒褐色 内側にはこげ	普通	細かい白色石・石英長石粒多
78	３Ｔ	浅い貝殻条痕　口唇部に内から貝殻押圧	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（内はやや黒色化）	良	火山ガラスなどの細かい土
79	４Ｃ	丁寧なナデ	横の浅い貝殻条痕	淡黒褐色	普通	白色石・火山ガラスの多い砂質土
80	２Ｂ	内外・浅い貝殻条痕　口唇に二枚貝押圧		暗茶褐色	普通	白色石・火山ガラス多
81	７Ｄ	ヘラ横ナデ	貝殻条痕（横方向）	外・スス付着　黒褐色 内・黒褐色	良	火山ガラスの多い細かい石（３㎜大の石もある）
82	４Ｄ	浅い貝殻条痕	内・口唇に二条の巻貝殻頂押圧	外・黄みがかった淡茶褐色 内・黒褐色	普通	火山ガラス・白色石
83	６Ｄ	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色（外・やや黄み，内・やや黒み）	良	火山ガラス・黄白石
84	４Ｄ	内外・横条痕　内は深い		外・ススのため黒褐色 内・淡茶褐色	普通	金雲母・黄白色石の多い細かい土
85	５Ｃ	内外ともに浅い条痕		外・黒褐色（スス） 内・黒灰色	良	火山ガラス・黄白色石 石英を含む砂質土
86	５Ｃ	細かい条痕	細かい条痕（一部その上をナデ）	内外・黒褐色 外は茶褐色にスス	良く堅い	茶石・黄白色石の細かい石
87	６Ｄ	内外：条痕		外：茶褐色 内：黒褐色	良	火山ガラス多
88	４Ｄ	内外：条痕		淡茶褐色	良	火山ガラス・雲母 石英の多い砂質土
89	３Ｔ	内外：細かい条痕		外：淡黒褐色 内：灰褐色(白っぽい粘土付着)	良く堅い	火山ガラス・茶色石・黄白色石などの細かい石
90	３Ｔ	内外：横方向条痕		外：黒褐色 内：淡茶褐色	普通	火山ガラスの多い細かい土

第４表　春日式土器一覧表(3)

図番	出土区	外の調整	内の調整	色　調	焼成度	胎　　土
91	３Ｔ	内外：条痕		黄みがかった淡茶褐色	普通	火山ガラスなどの細かい土
92	６Ｄ	ヘラ刺突文	ヘラナデ	外：茶褐色 内：黒褐色	普通	火山ガラス・黄白色細かい石
93	４Ｄ	内外：横方向貝殻条痕　内に貝殻沈線		淡茶褐色（表面は黒褐色）	普通	黄白色石・茶色石・石英・火山ガラス多
94	４Ｄ	内外：条痕 外：条痕のあとナデ		外：スス　淡茶褐色	良	火山ガラス・石英・黄白色石の多い細かい砂質土
95	５Ｃ	内外：貝殻条痕（横）		淡茶褐色	普通	白色石・火山ガラス・長石・細かい石
96	４Ｄ	ヘラによるていねいな縦・横のナデ	幅広の貝殻条痕	外：黒褐色　スス付着 内：灰褐色	良	白色石・黄白色石・火山ガラス・石英の多い細かい石粒
97	５Ｃ	内外：横方向条痕		外：にごった茶褐色 内：黄っぽい淡茶褐色	普通	黄白色石・火山ガラスの多い細砂
98	１－Ａ 集石25	内外：条痕		茶褐色	普通	石英・黄白色の細かい砂1.4㎝大の礫もある
99	７Ｄ	内外：条痕		茶褐色	良	茶石・石英・長石・火山ガラスの多い細かい石４㎜大
100	３Ｔ	条痕のあとヘラナデ	条痕	茶褐色（内：灰がかった淡茶褐色）	良	火山ガラス・茶色石・黄白色石などのこまかい土
101	６Ｄ	条痕	剥離のためナデ	淡茶褐色	普通	茶色石・火山ガラス・白色石など
102	８Ｄ	ナデ（でこぼこ）ていねいなナデ	やや摩滅	淡褐色	良	白色石・黄白色石・火山ガラス
103	５Ｃ	下から上へナデ　底に白い粉	貝殻条痕	黄みがかった淡茶褐色	良	火山ガラス
104	１Ａ	でこぼこ　底でこぼこ	ナデ	淡褐色（内：灰黒褐色）	普通	火山ガラス・石英・白色石のこまかい石
105	５Ｃ	内外：ナデ　やや摩滅		淡褐色	普通	白色石・雲母・石英
106	３Ｔ	ナデ	貝殻条痕	外・赤っぽい茶褐色 内・黒みがかった淡茶褐色	普通	黄白色石・火山ガラス
107	３Ｔ	内外：貝殻条痕（外ははっきりしない）		外・黒褐色 内・明茶褐色 底・白粉あり	普通	火山ガラス・茶色石・黄白色石
108	１Ａ 集石	ヘラ横ナデ 底：ていねいなナデ （浅い貝殻条痕）	粗いナデ	明茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色の細かい土
109	１Ａ 集石	内外とも貝殻条痕		淡茶褐色	普通	火山ガラス
110	８Ｂ	内外底とも貝殻条痕		淡茶褐色	普通	火山ガラス・白色石
111	４Ｄ	ナデ	内・底：貝殻条痕	内：黒褐色 外：明るい淡茶褐色	普通	火山ガラス・茶色石
112	５Ｃ	内外底ヘラナデ		淡茶褐色（内は黄みがかった黒褐色）	普通	茶色石・火山ガラスなど３㎜大のものも含む
113	５Ｃ	内外：ナデ		黄褐色	良	火山ガラス・白色石・黄白色石・石英
114	１Ａ 集石	横方向条痕の上にＶ線 鋸歯状　右下がりが先	横方向：粗い貝殻条痕	滑石入り	良	火山ガラス多
115	２Ｂ	内外：貝殻条痕（内は摩滅） 外：ヘラ押圧		滑石入り ピンクがかった褐色	良	火山ガラス多
116	６Ｄ	貝殻条痕に一部 ヘラ押圧	ていねいなナデ	滑石入り淡茶褐色	良	茶色石を多く含む

106が直径6.5㎝，107が直径７㎝である。あげ底となるものも108は接地面の幅が広いが，他は端部のみが接地している。108は底部近くが外へ張り出すもので，直径９㎝ある。底は浅い貝殻条痕，外はヘラ横ナデ，内は粗いナデで仕上げている。109・110は内外とも貝殻条痕で仕上げる。110は底も貝殻条痕で，つぎ目がよくわかる。111は接地面が矩形を呈し，直径が９㎝ある。内側は孤状の，底部は放射状の貝殻状痕で仕上げ，外面はナデ整形である。112も接地面が矩形で，直径は10㎝ある。内外，底ともヘラナデで仕上げる。113は接地面の少ないあげ底で，直径８㎝ある。

４）滑石を多く含む土器（第21図　114～116）

３点出土している。114はまっすぐのびる口縁部のやや内側に粘土紐を重ねてキャリパー形の形状を保っている。口唇部には深い刻みが施され，外面には３条を単位とする沈線で鋸歯状の文様が描かれる。内外とも横方向の粗い貝殻条痕で仕上げている。115はキャリパー形の形状を呈し，一部に刺突文が施されている。外面の調整は目のこまかな横方向の貝殻条痕である。116もくびれがはっきりした胴部破片で，外面にヘラ様の施文具で連続した刺突文がみられる。くびれ部の直径は16㎝あり，外面が貝殻条痕，内面がていねいなナデで仕上げる。

３　石器（第22図～第24図Ｓ３～Ｓ21）

石器には石鏃・石錐・磨石・叩石・石皿があり，他に剥片・石核がある。

Ｓ３・Ｓ４は石鏃である。Ｓ３は正三角形を呈しており，えぐりがある。片面は周辺からこまかい押圧剥離をしているが，片面は割と粗い剥離である。Ｓ４は二等辺三角形をし，えぐりがあるが，両脚とも欠けている。分厚い作りで，周辺からこまかい剥離がみられる。Ｓ５～Ｓ７は石鏃の未製品である。Ｓ５は二等辺三角形をしており，形は整っているが，こまかい調整は少なく，片面には自然面が残っている。Ｓ６はやや細長い正三角形をしており，一面は細かい剥離調整をしているが，片面は大剥離面が広く一部に加工痕がみられる。Ｓ７は分厚い作りで両面とも細部加工はほとんどない。

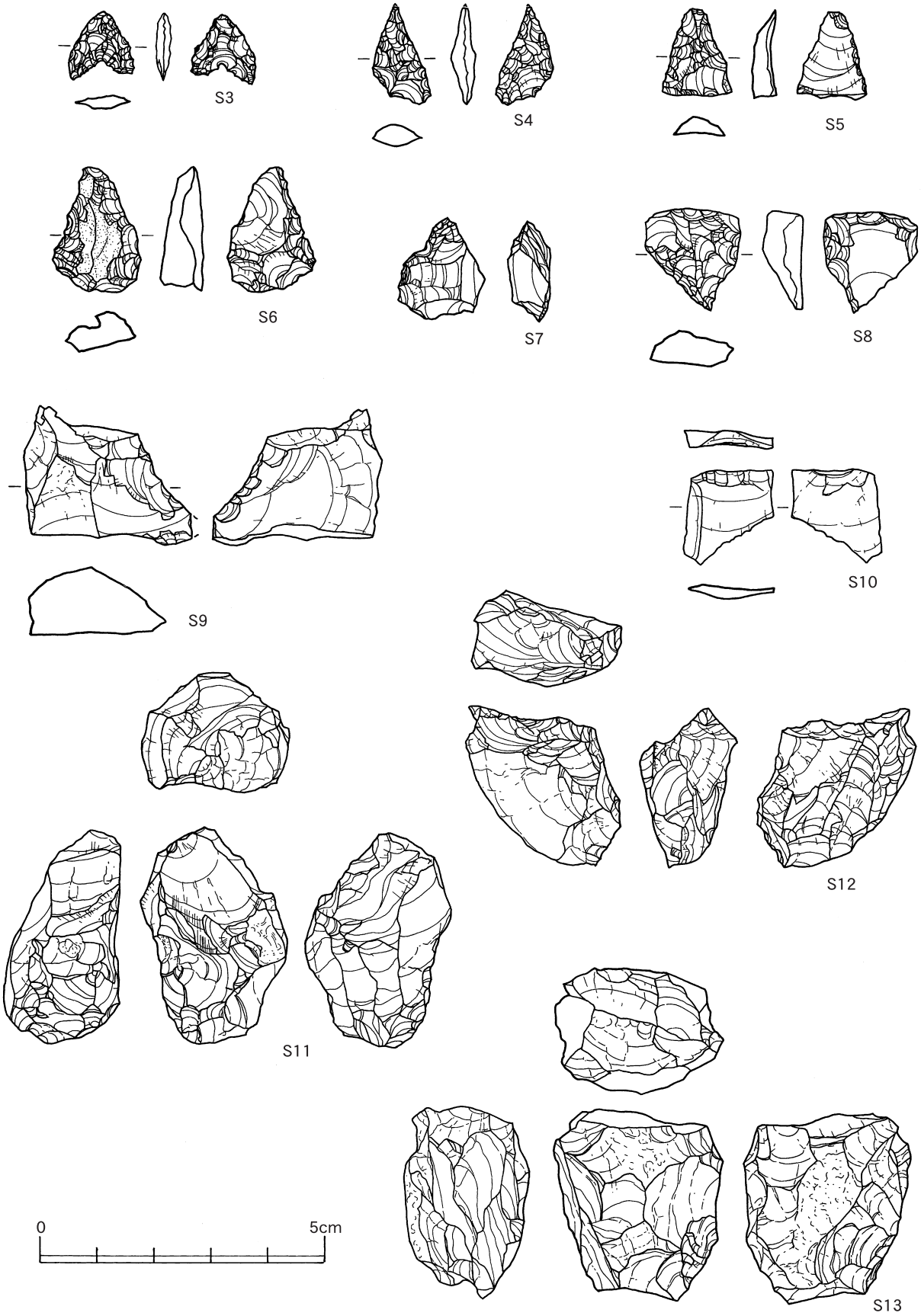
Ｓ８とＳ９は石錐である。Ｓ８は逆三角形をしており，片面は細かく調整しているが，あとの一面は周辺のみを細かく加工し，大剥離面を広く残している。刃部はするどい。Ｓ９は大きい剥片を利用したもので２次剥離は刃部周辺のみに両面から施している。刃部が欠けている。

Ｓ10は一部に加工痕がある薄い縦長剥片である。

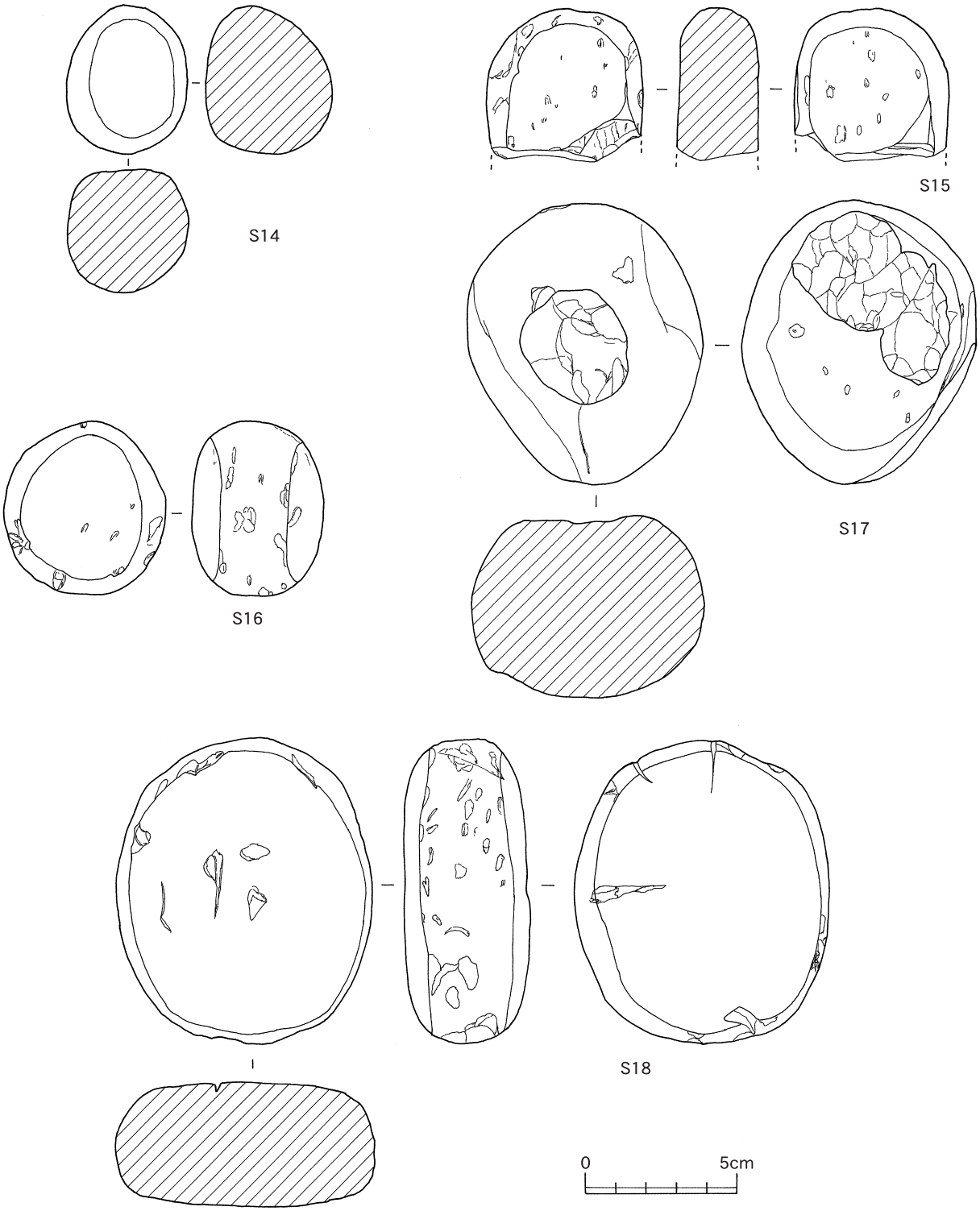
Ｓ11～Ｓ13は黒曜石石核である。Ｓ11はいずれの面も四方から幅の狭いこまかい剥離を施して円錐状を呈している。Ｓ12は半円錐状を呈した石核で，片面は横剥ぎ状に打ち欠き，逆面は上あるいは下から幅狭の剥片を打ち欠いている。上面は平坦に調整している。Ｓ13は天井を平らにした角柱状のもので自然面を各面に残している。周辺からこまかく打ち欠いている。

Ｓ14～Ｓ18は磨石である。Ｓ14は安山岩円礫の周囲を使用している。Ｓ15は半分ほど欠けている。表面がごつごつした安山岩円礫を用い，表裏と側面を使用している。Ｓ16は球形をした安山岩礫を用い，片面と側面を使用している。Ｓ17は安山岩円礫を用い，片面と，側面の一部を使用している。磨石と使用していない逆面はくぼみ石として使用し，磨っている面も敲打痕がみられる。Ｓ18は砂岩円礫を用い，表裏面と側面をよく使用している。側面は叩石としても用い，敲打痕がみられる。

Ｓ19・Ｓ20は叩石である。Ｓ19は安山岩円礫を用い，短軸の両面を使用している。Ｓ20は球琛岩円礫を用い，短軸の両面を使用している。上面は一部平らになっている。



第22図　石器(1)



第23図　石器(2)

Ｓ21は石皿の破片である。安山岩円礫の上面を使用しており，平坦である。

４　古代・中世の土器（第24図　117～119）

内黒土師器・土師器・白磁がある。

117は４Ｄ区Ⅱａ層で出土した内黒土師器埦である。外面は黒褐色を呈し，ナデ整形である。内面は黒色研磨である。焼成度は良く，精製土を用いている。平安時代のものと思われる。

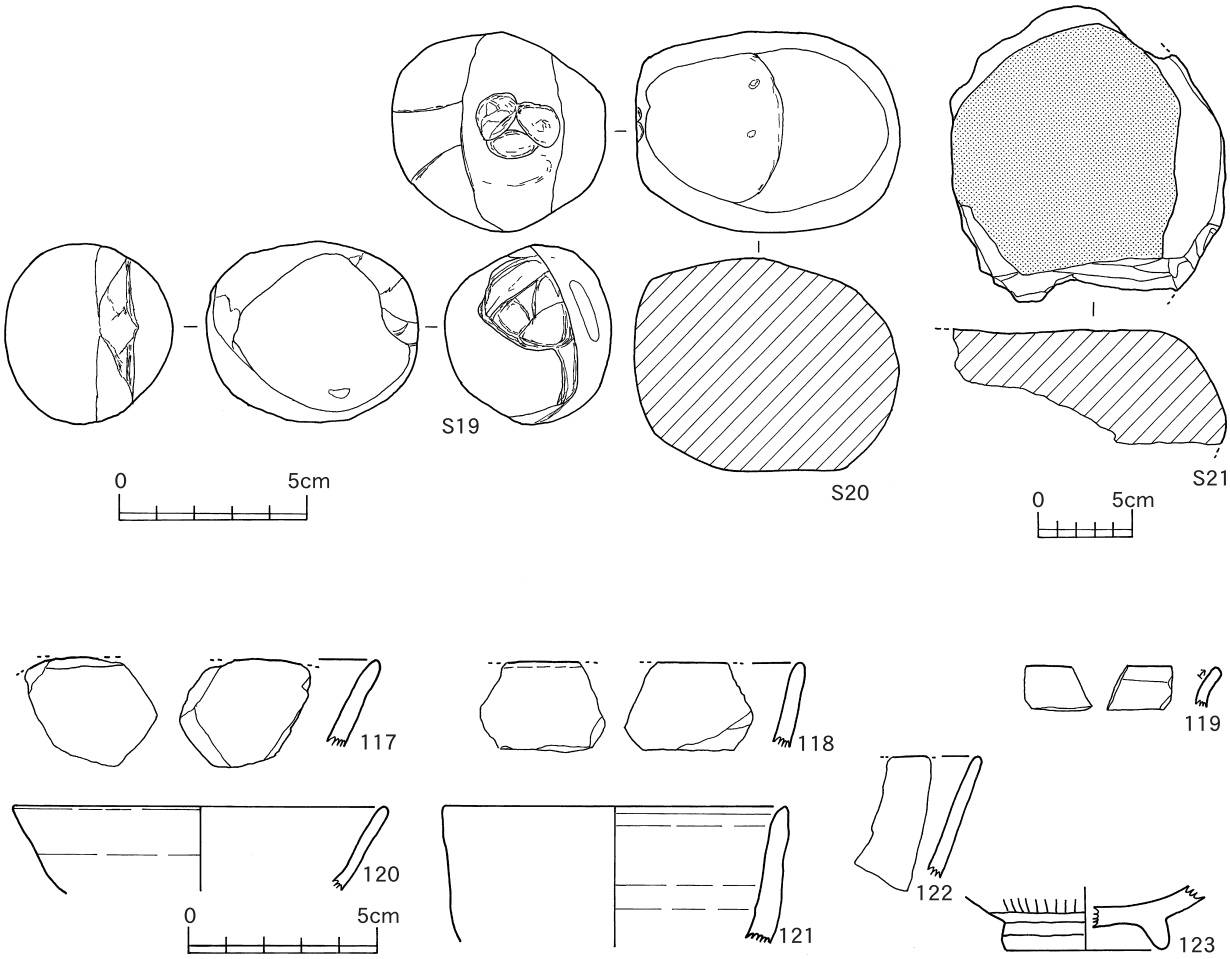
118は５Ｃ区表土で出土した土師器坏である。乳褐色を呈し，外面は横方向のナデ，内面は横方向のミガキで仕上げている。精製土を用い，焼成度は良い。中世のものと思われる。

119は２Ｂ区表土で出土した白磁皿である。口縁内側の釉がかぎ取られた口はげ皿で，13世紀後半のものである。

５　近世・近代の陶磁器（第24図　120～123）

２Ｂ区付近で埦・擂鉢・壺がある。

120～123は陶器・磁器の埦である。120は口縁直径7.5㎝の外反する深い陶器で，灰色土に透明釉がかかっている。柱穴内で出土しており，唐津焼と思われる。120は口縁直径は10㎝の外へまっすぐのびる浅い陶器で，２Ｂ区で出土している。緑がかかった胎釉がかかっている。121は口縁端へやや広がってまっすぐのびている部厚い陶器で，４トレンチで出土した。赤っぽい茶褐色のこまかい土を用い，褐釉がかかっている。口縁内側の釉がかきとられている。123は外へまっすぐ延びる磁器で２Ｂ区で出土している。



第24図　石器⑶と古代以降の出土土器

第５表　石器一覧表

挿図番号	注記番号	器　種	出土区	層	石　材	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重　量（ｇ）	備考
3	124	打製石鏃	５Ｃ	Ⅱａ	黒 曜 石	11	12	3	0.3	
4	集石21	打製石鏃	６Ｄ	－	黒 曜 石	16	9	4	0.45	欠損
5	溝４	石鏃未製品	３Ａ	－	黒 曜 石	15	12	3	0.59	
6	530	石鏃未製品	４Ｄ	Ⅱａ	黒 曜 石	22	16	7	1.97	
7	432	石鏃未製品	４Ｄ	Ⅱａ	黒 曜 石	17	15	8	1.69	
8	461	石錐	４Ｄ	Ⅱａ	玉　　随	18	17	7	2.09	
9	405	石錐	５Ｃ	Ⅱａ	玉　　随	23	32	11	7.66	
10	450	剥片	４Ｄ	Ⅱａ	玉　　随	16	15	2	0.56	
11	289	石核	３Ｂ	Ⅱａ	黒 曜 石	38	32	17	18.70	
12	285	石核	３Ｂ	Ⅱａ	チャート	35	17	14	10.61	
13	225	石核	３Ｂ	Ⅱａ	玉　　随	35	30	21	22.68	
14	101	磨石	６Ｄ	Ⅱａ	安 山 岩	49	39	40	120.12	
15	19	磨石		集石２	安 山 岩	50	51	26	114.13	欠損
16	471	磨石	５Ｄ	Ⅱａ	安 山 岩	57	53	43	161.57	
17		磨石	６Ｄ	Ⅰ	安 山 岩	93	77	59	640	
18		磨石	６Ｄ	Ⅰ	砂　　岩	101	85	41	560	
19	134	叩石	６Ｃ	Ⅱａ	安 山 岩	47	56	45	136.02	
20		叩石	４Ｔ	Ⅰ	球 琛 岩	53	70	56	282.85	
21	13	石皿	７Ｄ	Ⅱａ	安 山 岩	152	143	62	1618	欠損

第Ⅴ章　Ｂ地点の調査

第１節　調査の概要

Ｂ地点は道路より約２m高い地点にあるため，安全面を考えて北側はひかえて調査をした。また，用地内に立木や電柱があったため，これをさけて東側と西側に分けて調査した。その結果，西側では遺構が検出されなかった。東側では柱穴など近世の遺構が検出された。

第２節　検出遺構

Ⅱ層上面で48個のピット群（柱穴）と土坑，粘土貼遺構（仮称），焼土域３か所が検出された。

１　掘立柱建物跡（第27図・第28図）

検出したピット群から掘立柱建物跡２棟が復元できた。

１）掘立柱建物跡１号

南側が調査区外へ延びるため，全体的な建物跡の規模を把握することはできないが，それぞれ１間ずつの掘立柱建物が検出された。

主軸はN35度Ｅで，南北の柱間が2.2m，東西の柱間が2.2mある１間以上×１間以上の建物である。柱の規模は，１が直径48㎝，深さ60㎝，２が東西に長い85㎝×60㎝のだ円形をして深さ70㎝，３が直径40㎝，深さ68㎝である。２は段になっており，深いほうは円形を呈している。

柱穴の埋土から土師器片，陶磁器片，砥石が出土した。

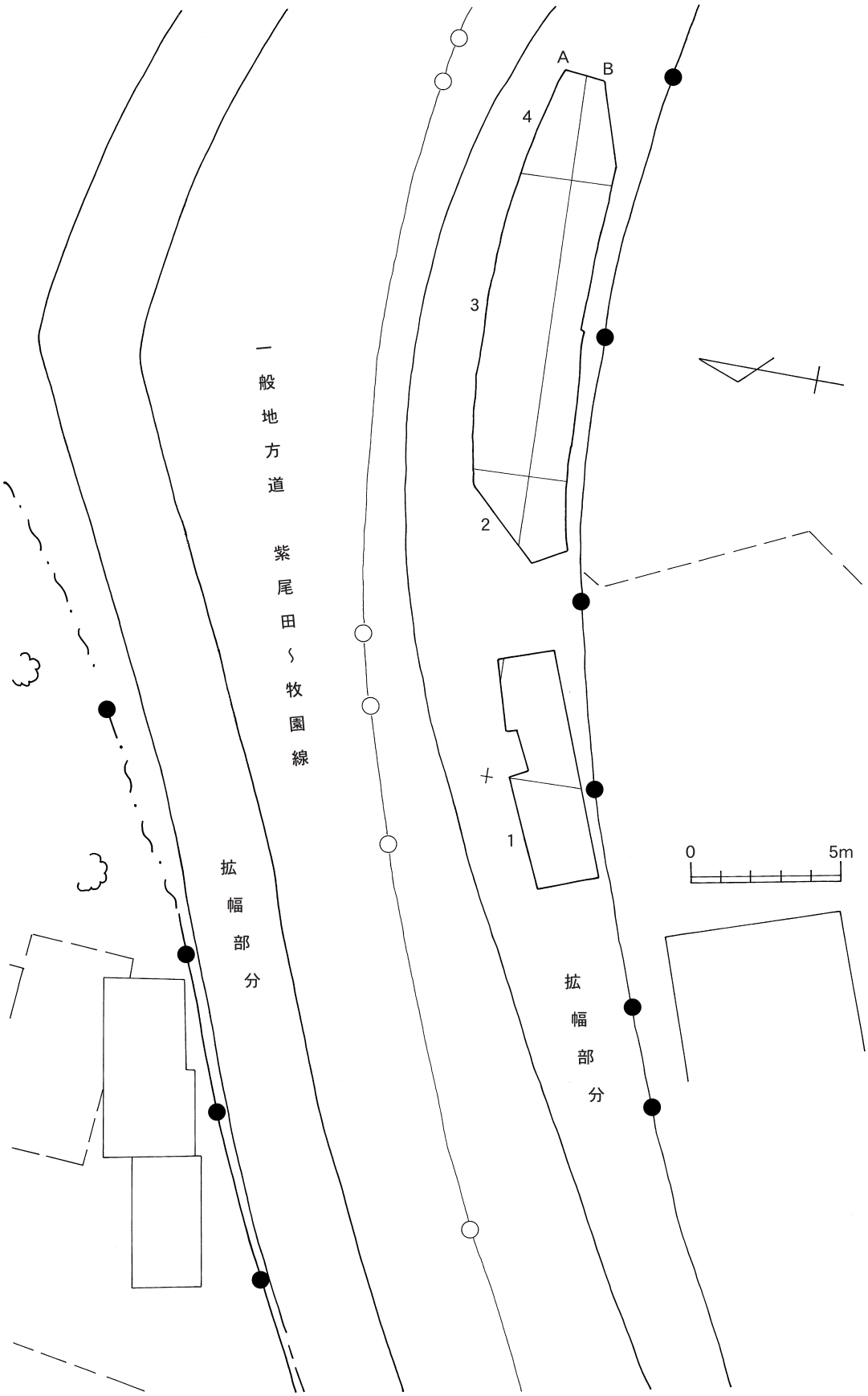
124は口縁直径19.5㎝，最大径21.5㎝の深い苗代川焼擂鉢で，柱穴２で出土した。口縁はやや外へ下降して幅広く，口唇部に露胎となる凹線がある。内外とも横方向にくし状のハケナデがみられ，飴釉がかかっている。内面のかき目は密で，こまかい土を用いている。125は糸切り離しの土師器坏の底部で，柱穴１で出土した。中央に直径６㎜ほどの焼成後にうがたれた孔がみられる。乳茶褐色を呈し，焼成度は普通である。石英・金雲母などを含む致密な土を用いている。

Ｓ22は長さ18.5㎝，幅7.5㎝，厚さ４㎝の花崗岩製仕上げ砥で，柱穴３で出土した。底はでこぼこしているが，上面はややくぼんでいるものの平坦に近い。角は打痕がみられる。

２）掘立柱建物跡２号

南側と東側が用地外へ延びているため，全体的な規模は不明だが，主軸がN35度Wで，東西に柱間２間以上，南北に柱間１間以上の掘立柱建物跡が３・４－Ａ・Ｂ区で検出された。東西は柱間が東から２mと２m，南北は２mある。柱の規模は，1が直径40㎝，深さ36㎝，２が直径45㎝，深さ85㎝，３が70㎝×40㎝，深さ110㎝，４が直径50㎝，深さ110㎝である。北隅近くに焼土域１があるが，これは形態からみてかまどの可能性も考えられる。

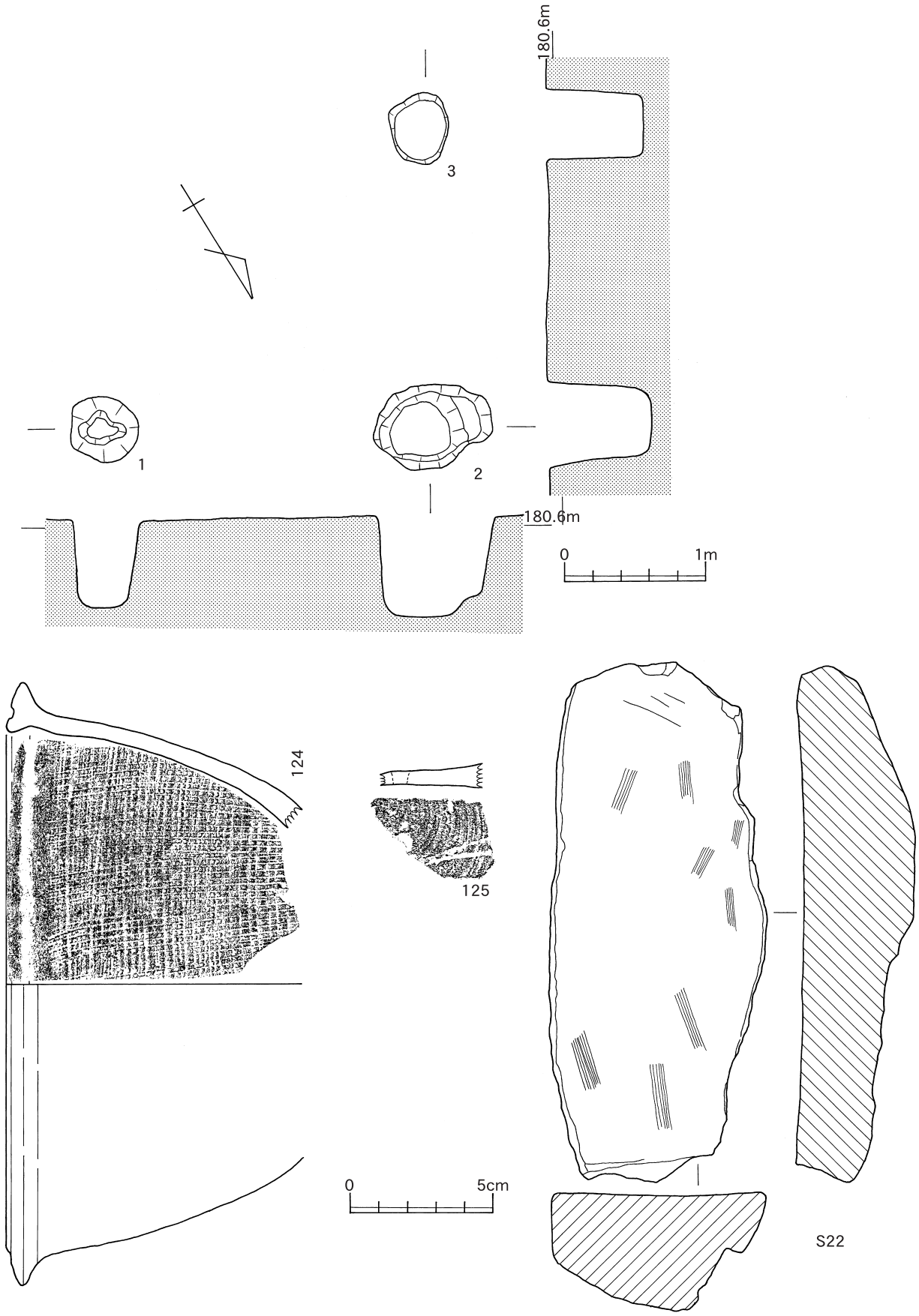
柱穴の埋土から砥石と陶器が出土した。Ｓ23は長さ9.5㎝，幅４㎝，厚さ３㎝の直方体をした砂岩製四面砥石で柱穴３で出土している。裏面や，側面の一部，長軸の片側などが剥離したり折れていたり，あるいはきずがついたりしている。126は柱穴２で出土した陶器埦である。口縁までまっすぐ広がりながら延びており，外側はややくぼんでいる。内外面とも暗い赤褐色を呈し，こまかい土を用いている。



第25図　B地点の調査区

第６表　Ｂ地点柱穴一覧表

ピット番号	旧番号	検出区	検出面	時期	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋 土 内 遺 物
1	24	２Ｂ	Ⅱ層上面	近世	26	21	59	
2	23	２Ｂ	Ⅱ層上面	近世	30	22	68	楕円形押形文土器１
3	20	２Ｂ	Ⅱ層上面	近世	44	35	22	
4	21	２Ｂ	Ⅱ層上面	近世	30	25	64	陶器摺鉢片（陶器片）
5	22	２Ｂ	Ⅱ層上面	近世	40	25	31	
6	19	３Ｂ	Ⅱ層上面	近世	30	13	63	
7	18	３Ｂ	Ⅱ層上面	近世	75	50	67	擂鉢・壺・甕・軽石
8	16	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	41	29	24	
9	17	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	37	33	69	
10	15	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	20	17	29	
11	14	３Ｂ	Ⅱ層上面	近世	43		34	
12	13	３Ｂ	Ⅱ層上面	近世	26	22	11	
13		３Ａ	Ⅱ層上面	近世	26	22	68	
14	10	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	36	32	98	
15	9	３Ｂ	Ⅱ層上面	近世	40		75	
16	28	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	56	34	61	陶器碗口縁部１
17	17	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	21	18	33	
18		３Ａ	Ⅱ層上面	近世	20	16		
19	34	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	32	28	31	
20	25	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	28	15	21	
21	27	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	28	22	49	
22		３Ａ	Ⅱ層上面	近世	33	25	37	
23		３Ａ	Ⅱ層上面	近世	55	42	68	
24	38	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	35		84	礫２
25	7	３Ｂ	Ⅱ層上面	近世	30	25	33	
26	6	３Ｂ	Ⅱ層上面	近世	27	24	23	
27	36	３Ａ	Ⅱ層上面	近世	30	28	37	
28		３･４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	48		19	
29	29	４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	55		30	
30	25	４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	70	46	92	
31	26	４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	77	50	56	礫１
32	32	４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	50	37	20	
33	33	４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	22	17	19.５	
34		４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	22	18	21	
35	1	４Ｂ	Ⅱ層上面	近世	68	53	66	
36	2	４Ａ	Ⅱ層上面	近世	65	45	80	
37	37	４Ａ	Ⅱ層上面	近世	20	17		染付碗　陶器土瓶蓋
38	31	４Ａ	Ⅱ層上面	近世		42	25	土師質土器片１
39		４Ａ	Ⅱ層上面	近世	23	23		
40	31	４Ａ	Ⅱ層上面	近世		38	66	
41	30	４Ａ	Ⅱ層上面	近世			25	



第26図　掘立柱建物跡１号

２　土坑（第28図）

２Ａ区で80㎝×85㎝のほぼ円形をしたプランを検出後，埋土の掘り下げを行ったところ，土坑内から桶の側板と底板の一部および５個の礫（凝灰岩３，軽石２）が出土した。桶の直径は60㎝ほどで，底板と思われる板の上に側板と思われるものが８㎝程度，立ちあがっている。埋土は黒褐色土で，南東側の底近くには黒褐色砂質土がある。深さ10㎝ほどしか残っていない。掘立柱建物跡に付帯する厠跡の可能性がある。

中から土師器坏の底部が出土した。底の直径は７㎝で，ヘラ切り離しである。灰白色を呈し，焼成度は普通だが摩滅が目立つ。こまかい土を用いている。

３　粘土貼遺構（第28図）

３Ａ区で検出された45㎝×48㎝のほぼ円形をした粘土貼遺構で，周辺に径60㎝ほどの土坑がある。厚さは10㎝ほどあり，上からにぶい黄褐色粘土，かなり硬質の褐色粘土，やわらかい暗褐色粘土となる。

４　焼土域（第28図）

焼土や粘土がはいった場所が３か所でみられる。

１）焼土域１

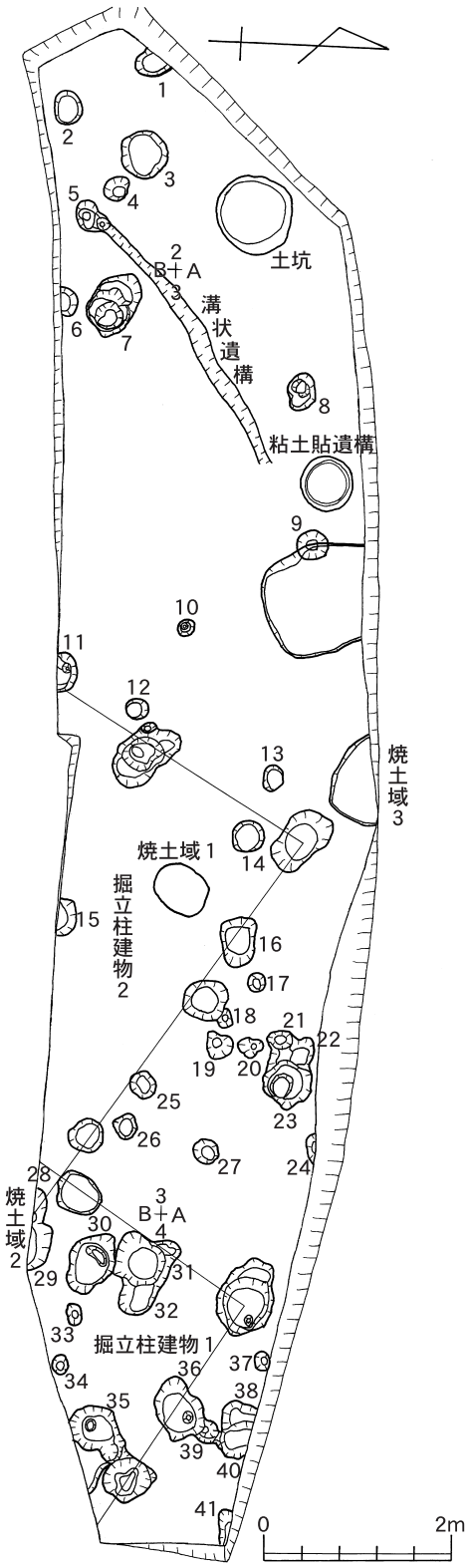
３Ａ・Ｂ区で検出されたかまど状を呈する土坑で，長さ62㎝，幅50㎝に２～８㎝幅の焼土が巡っている。中には，にぶい橙色が基調になった土があるが，南東隅には黒色を呈する炭化物がある。中に陶器片１点と軽石があった。

２）焼土域２

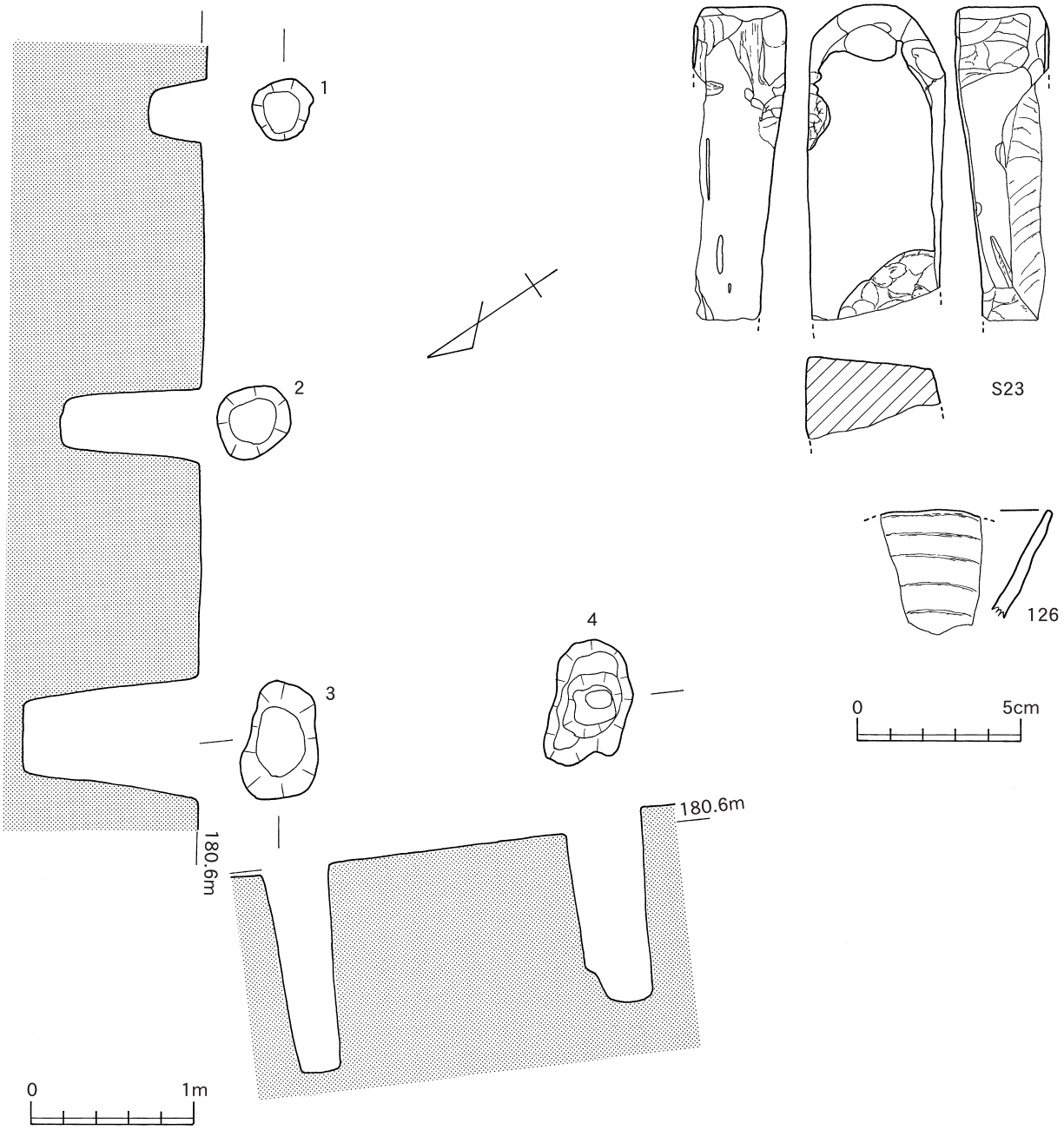
３・４Ｂ区で検出された幅60㎝ほどの部分で，用地外へのびているため全容は不明である。黒褐色土，にぶい褐色土，炭化物のはいった黒色土が７㎝ほどの厚さに堆積している。その下には２個の柱穴があることから，これらの柱穴群より新しい。

３）焼土域３

３Ａ区で検出された幅105㎝，奥行き45㎝以上，深さ10㎝ほどの浅い土坑であるが，用地外へ延びているため全容は不明である。炭のはいった黒色土，焼土を含む褐色土，黒褐色土がまざって堆積している。２つの柱穴に切られている。



QV}@　\zu}



QW } @ @ § ¤ Q

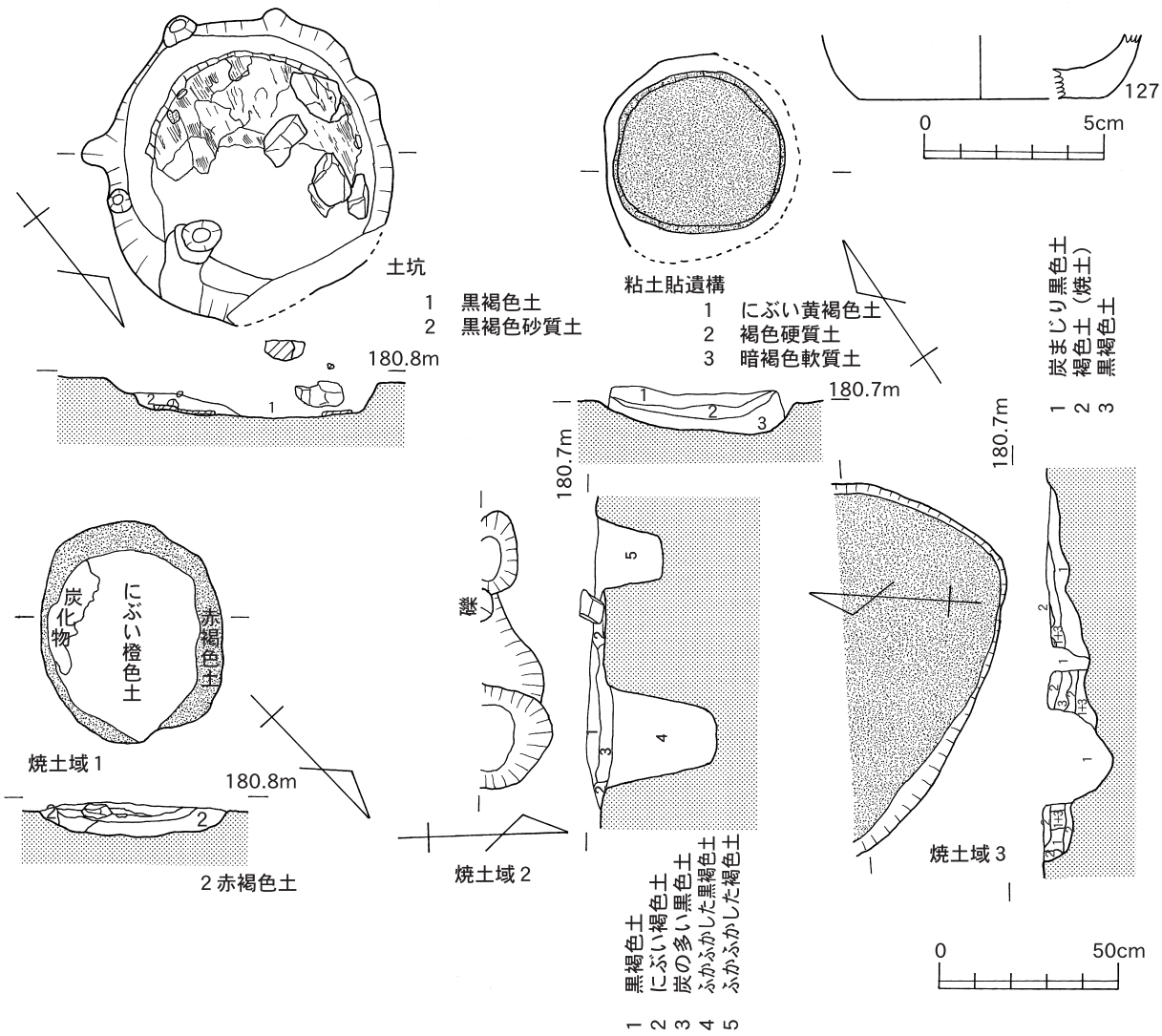
5　溝状遺構

２Ｂ区から３Ｂ区・３Ａ区へと続く幅10～20㎝，深さ10㎝足らずの浅くて狭い溝状遺構で，長さ3.2mが検出された。畑境の可能性もある。

6　柱穴出土の遺物（第30図）

掘立柱建物としてまとまった柱穴以外に41の柱穴があるが，そのうち４か所の柱穴から出土品がみられた。

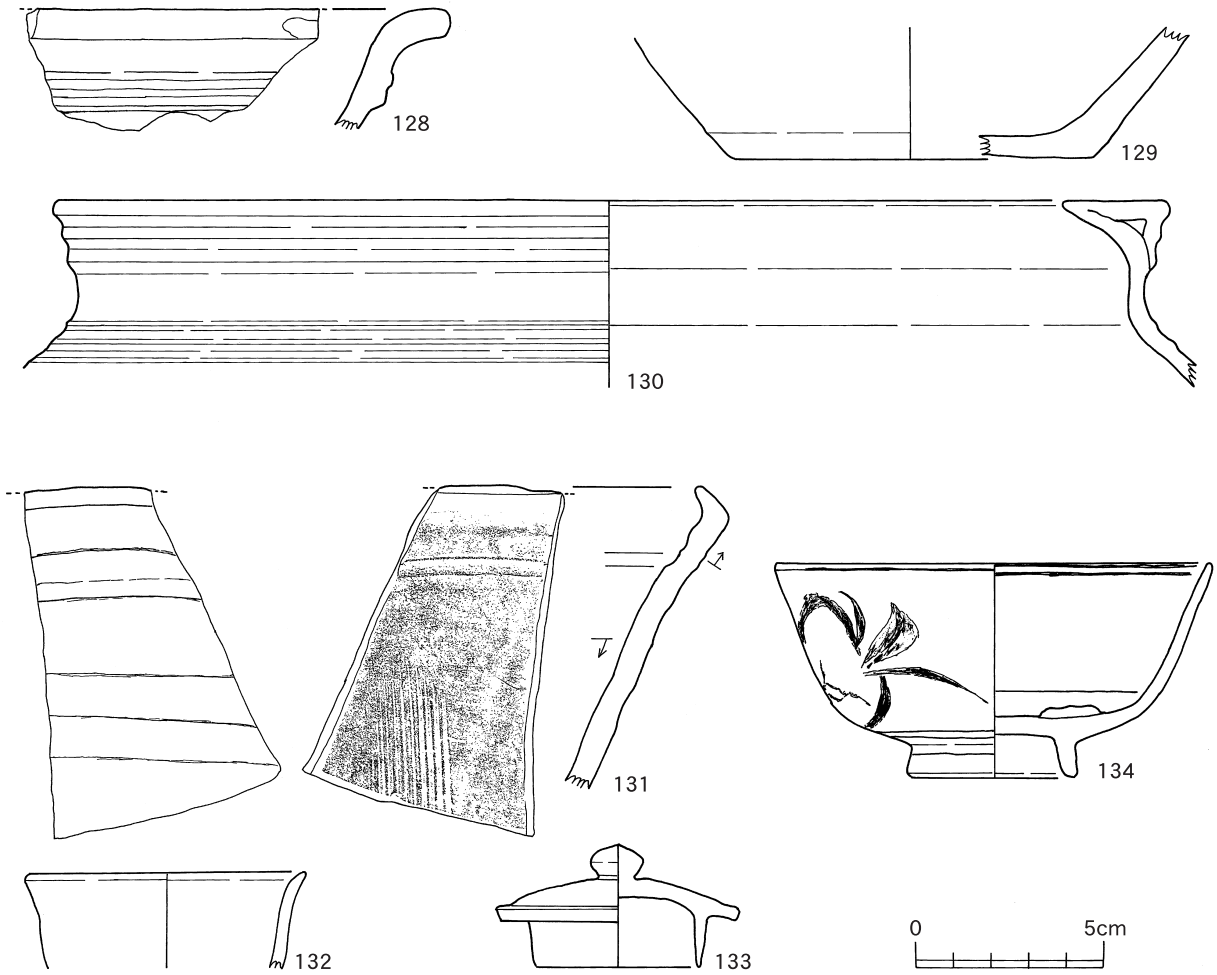
128～130は柱穴７から出土した苗代川焼である。128は強く外反し，頸部下に２条の突帯がみられる擂鉢である。内面下部にわずかに幅の広いかき目がみられる。口縁端近くの内面が露胎となり，赤みがかった茶褐色を呈している。白色石などを含むこまかい土である。内面に胡麻がみられる。



QX}@yBESy\　\E~y

129は直径9.5㎝の壺の底部で，ややあげ底となる。飴釉がかかり，部分的に上から厚く垂れている。底には粘土のかたまりがみられる。黒っぽいこまかい土を用いる。130は口縁直径14㎝の甕である。口縁部は折り曲げて幅広く作り，外面は口縁と２条の突帯で３条の突帯となる。肩部には３条の低い突帯がある。口唇部の２か所にアサリ貝目がみられる。外面は全体に，内面は部分的に緑釉がかかるが，外には白っぽい釉がみられる。白色石などのこまかい石を含む。

131は柱穴４で出土した陶器擂鉢である。口縁端はくの字状にするどく内弯しており，外面下部は露胎だが，そのほかは緑っぽい釉がかかっている。内面は11条のかき目がみられるが，次のかき目とは離れており，下部は使用痕が目立つ。長石などのこまかい土を用い，赤みがかった茶褐色を呈している。焼きは良く，薄く仕上げている。132は柱穴16で出土した口縁直径7.5㎝の外反する唐津焼埦で，灰色土を用いている。133・134は柱穴37で出土した。133は口縁直径4.5㎝，高さ3.2㎝の宝珠つまみのある苗代川焼土瓶蓋である。受部は直に立ちあがり，高い。この部分は露胎で，外面は暗褐色の鉄釉がかかっている。白色石などのこまかい土を用いている。134は口縁直径11.5㎝，高さ5.5㎝，底部直径4.5㎝の平佐焼半筒形碗である。重ねにはアルミナがある。外面は唐草つるの雪持笹文と３条十１条の圏線が，内面には２条の圏線がみられる。



第30図　柱穴出土の陶磁器

第３節　出土遺物

１Ｂ区に設定した下層確認トレンチのⅢ層から楕円形押型文土器が１点出土した。当該層から出土した遺物は１点のみである。このほか，Ⅱ層上面などで押型文土器，陶磁器片，土師質土器，砥石等が出土した。

135と136は円筒形の楕円押型文土器である。口縁部はまっすぐのび，端部にも押型文がみられる。つぎ目の残っている部分もあり，内側はヘラの横ナデで仕上げる。焼成度は良く，135は白っぽい乳茶褐色，136は黄白色を呈する。石英・白色石・長石・茶色石などのこまかい土を用いている。

137は土師器の三足かなえの脚部で，焼成度は良く，精製土を用いている。乳茶褐色を呈している。

138は直径15㎝の瓦質土器小鉢である。内外ともくぼみがある。乳白色をしているが，外は黒褐色を呈している。精製土を用い，軟質である。

139は口縁直径8.5㎝の磁器碗で，灰色の石にやや白っぽい釉がかかっている。140はまっすぐ外へ広がって延びる陶器埦で，こまかい土を用い，黄褐色釉がかかっている。

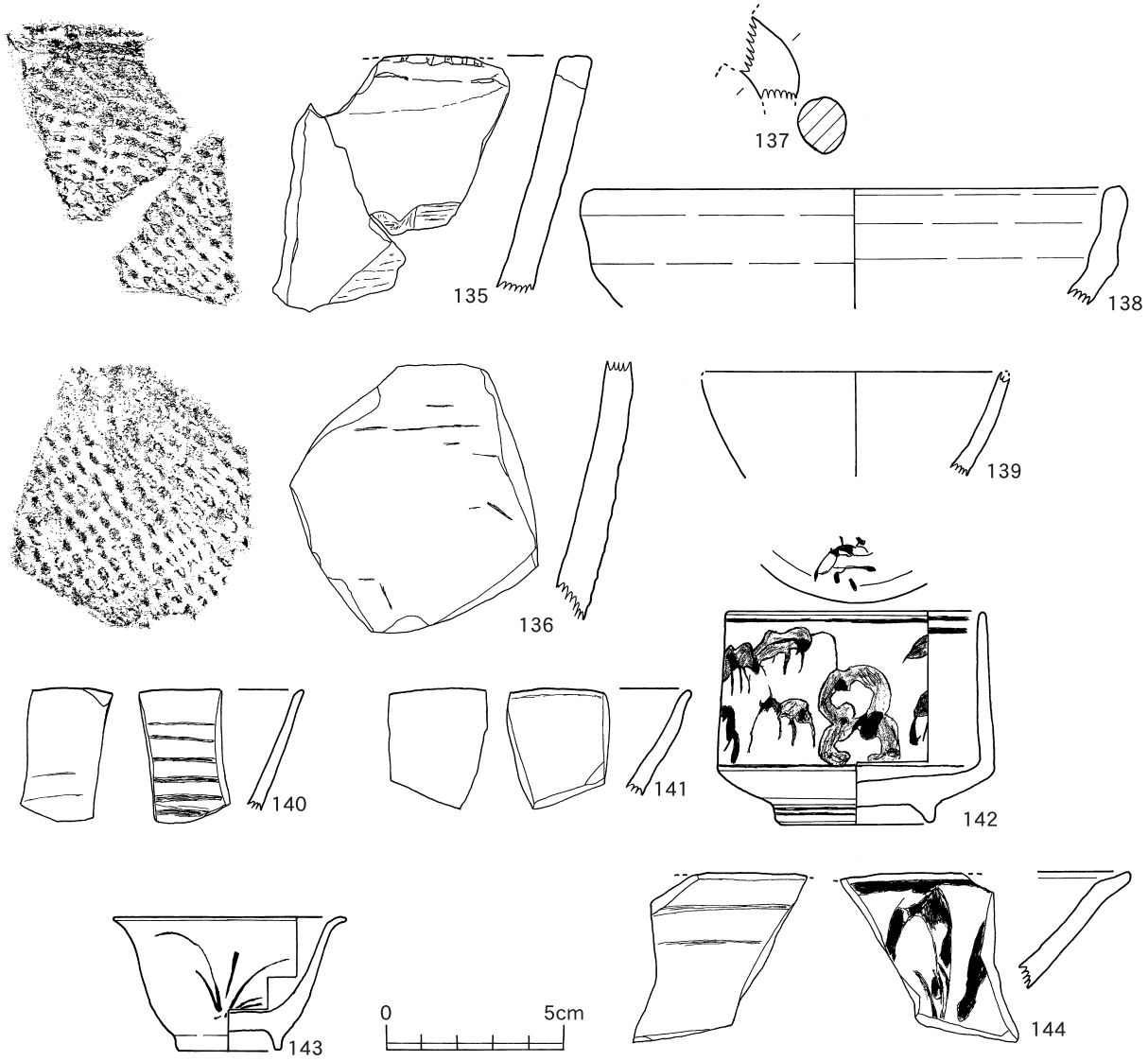
141は緑がかった飴釉のかかった埦で，赤っぽい茶褐色を呈している。142は口縁直径7.2㎝，高さ６㎝，高台直径4.4㎝の底部が外へ踏んばる染付碗である。底部からやや細まりながらまっすぐ口縁へ立ちあがる。外面は口縁に２条，底に１条，高台に３条の圏線があり，胴部にしだれ柳状の文様がみられる。内面には口縁付近に２条，底部付近に１条の圏線が巡る。内底部にも文様がみら

れる。

143は口縁直径6.5㎝，高さ3.8㎝，底部直径３㎝の磁器小坏である。外面３か所にススキ様の植物文様が描かれている。内底には砂目がみられる。144は口縁が外反する陶器の赤茶褐色浅鉢である。口縁は黒っぽい，外面は青緑っぽい釉がかかっている。内面は暗緑色釉の上に白っぽい釉がかかっているが，一部は厚くかかっている。内面には一条の横線と，蓮弁文様がある。

第Ⅵ章　発掘調査後の遺跡概要

今回，本調査を実施した県道紫尾田牧園線部分については調査を完了したが，この周辺については遺跡が残存している可能性が高い。特に春日式土器の多く出土したＡ地点の北側や南側，さらには東側には包含層の広がっている可能性がある。また，近世遺構の検出されたＢ地点の南側ではこの建物群の広がりが残っており，Ａ地点周辺も含め道跡など近世遺構の残存も広い範囲にうかがえる。さらに点々としている縄文時代早・前期の遺物も今回はその広がりをつかむことはできなかったが，この周辺に集中していることも考えられ，注意する必要がある。



第31図　Ｂ地点出土の土器

第Ⅶ章　まとめ

第１節　天降川中流域の遺跡と栫遺跡周辺

霧島火山群および国見岳（横川町）に源を発する天降川（長さ42.5㎞）には，多くの支流が存在するが，上流域と，中流域・下流域の広い地域で滝などの存する急流峡谷をなしている。下流域は扇状地状のデルタが広がっている。こうした地形から中流域には神話と結びつけた熊襲穴があり，下流域には大隅国府・国分寺跡，鹿児島神宮などが存在する。

中流域は丘陵からおりてきてゆるやかになった地点のシラス台地に幅１㎞ほどの狭い水田地帯がある。そのなかでは支流万膳川の流域に縄文時代早期から古墳時代にかけての遺跡がややまとまって存在する。

栫遺跡のある馬渡川流域にも旧石器時代から近世さらには現代までの歴史をもつ遺跡がある。栫遺跡では下流の字須崎から上流の字羽田まで狭い流域のため，集中はしていないものの点々と縄文時代早期の土器が出土している。この遺跡は馬渡川を狭んで幅が広くても60m位しかなく，その基盤層は砂礫であることから安定した集落が営まれたことはなかったであろう。前期では字二股で轟式土器が出土していることからキャンプ的な生活が営まれていたことがわかる。しかし，この時期の生活跡は長続きせず，中期中頃の春日式土器の時期になってようやくやや安定した生活がＡ地点で営まれる。この時期にはこの周辺では中福良遺跡で生活痕跡がみられるが，それほど豊かな生活があったとは思えない。

このあと，この遺跡では長い間空白の時期がある。次に人の痕跡が探れるのは平安時代頃であるが，出土品は少なく，中世でも同様である。二俣・須崎などの地で痕跡がみられる。

近世になって現代にまで続く集落が営まれたようで，Ａ地点ではくり返し使われた道跡が，Ｂ地点では建物跡がみつかっている。

第２節　春日式土器の分類

Ａ地点で主体的に出ているのは縄文時代中期の土器である春日式土器である。

春日式土器はかつて縄文時代前期のものとされたこともあったが，現在ではキャリパー形をしている器形，共伴資料，型式的編年などから中期のものとされ，細分化も試みられている。(註1) ここで出土している春日式土器は大きく２類に分けることができる。

１類はキャリパー形に内弯する口縁部で，ここに沈線・貼付文などがみられるものである。口唇部に貝殻腹縁による刻みがみられるものもある。これらの土器は，春日式土器を４段階に分けたうちの３段階にあたる轟木ヶ迫段階（大根占町轟木ヶ迫遺跡出土のものを標式とする）に該当する。

２類～６類は直口あるいは口縁端をわずかに内反させたり，貼付け突帯を施すなどしてキャリパー形の形状を残しているものである。文様は口縁部に集約され，口唇部に集中している傾向がある。文様の波状文は頂部がとがりぎみとなって鋸歯状に近くなっている。このような特徴をもつのは春日式土器を４段階に分けたうちの最終形態である南宮島段階（姶良町南宮島遺跡出土のものを標式とする）に該当すると考えられる。

南宮島段階の次には中尾田Ⅲ類土器が位置づけられているが，本遺跡で出土した土器には中尾田

Ⅲ類土器に相当する要素は全くみられない。このことから当遺跡の春日式土器は中期後半にあたる轟木ヶ迫段階から南宮島段階にかけての良好な資料と考えられる。

次に滑石のはいった土器について触れておきたい。この土器に含まれる良質の滑石は鹿児島県内には産出しないが，土器の器形や文様構成などは共伴している春日式土器とよく似ており，同時期のものと考えられる。

これまで鹿児島県内での春日式土器に伴う滑石混入土器は，北手牧段階に枕崎市鞍谷遺跡や鹿屋市榎木原遺跡などで，前谷段階に松山町前谷遺跡や末吉町桐木遺跡などで知られている。また，南宮島段階から中尾田Ⅲ類土器にかけては金峰町上焼田遺跡で出土している。今回の調査で滑石混入土器が出土したことによって，春日式土器の全期間から中尾田Ⅲ類土器の時期を通じて滑石混入土器の出土することがはっきりした。今後，これら滑石混入土器がどこで作られ，どのような経路で栫遺跡をはじめとするそれぞれの遺跡に持ち込まれたのかを追求することが大きな課題である。

第３節　近世の建物跡と道跡

鹿児島における近世建物の構造については，これまで主として民俗学的観点あるいは士族階級の麓集落の調査という現存している建物分析，建築学的見地からの分析しか行われていない。近世遺跡の考古学的調査が近年になってから始まったこと，近世遺跡が現存集落と重なっていることなどから，発掘資料から近世建物を分析することはほとんど行われていない。

これまで近世建物の調査がされているのは金峰町芝原遺跡，川内市成岡・西ノ平遺跡，輝北町新田遺跡などがあるが，これをこまかく分析した研究成果はない。また，芝原遺跡・新田遺跡については報告書が未刊である。

そういう点で当遺跡の近世建物群は狭い範囲の調査ではあるが山間部における農村集落のあり方をさぐるうえで重要である。

Ｂ地点では，掘立柱建物跡と思われる柱穴群，焼土域３か所，桶の入った土坑１基，粘土貼遺構（仮称）１基などを検出した。柱穴には，深さが１ｍを超えるものもあり，壁面では掘削の痕跡を明瞭に観察できるなど，残存状況は良好であった。これらのなかから２棟の建物を復元できたが，用地外へ延びているため規模ははっきりしなかった。ただ，建物のなかに焼土域がはいっているのは，この建物の床が高くなく土の上にあった可能性を示している。また柱穴自体は大きさ・深さとも大規模でありながら，根石をもつものがまったくないことは屋根の重量がそれほどかからないことを示しており，壁立ちの建物を想定できる。出土品が少なく時期は確定できないが，江戸時代中頃のものだろうか。

なお，Ａ地点でみつかった道跡は出土品からみてすべて近世以降のものと思われる。溝状遺構としたもののうち，古代のものと思われる２条以外についても道跡の可能性があり，この付近は長い間，現代にまで及ぶ道筋のあった場所と思われる。牧園と横川・加治木・大口などを結ぶ谷沿いの道筋であったのであろう。

〔註〕

１．東　和幸「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』№５　1991.12　南九州縄文研究会

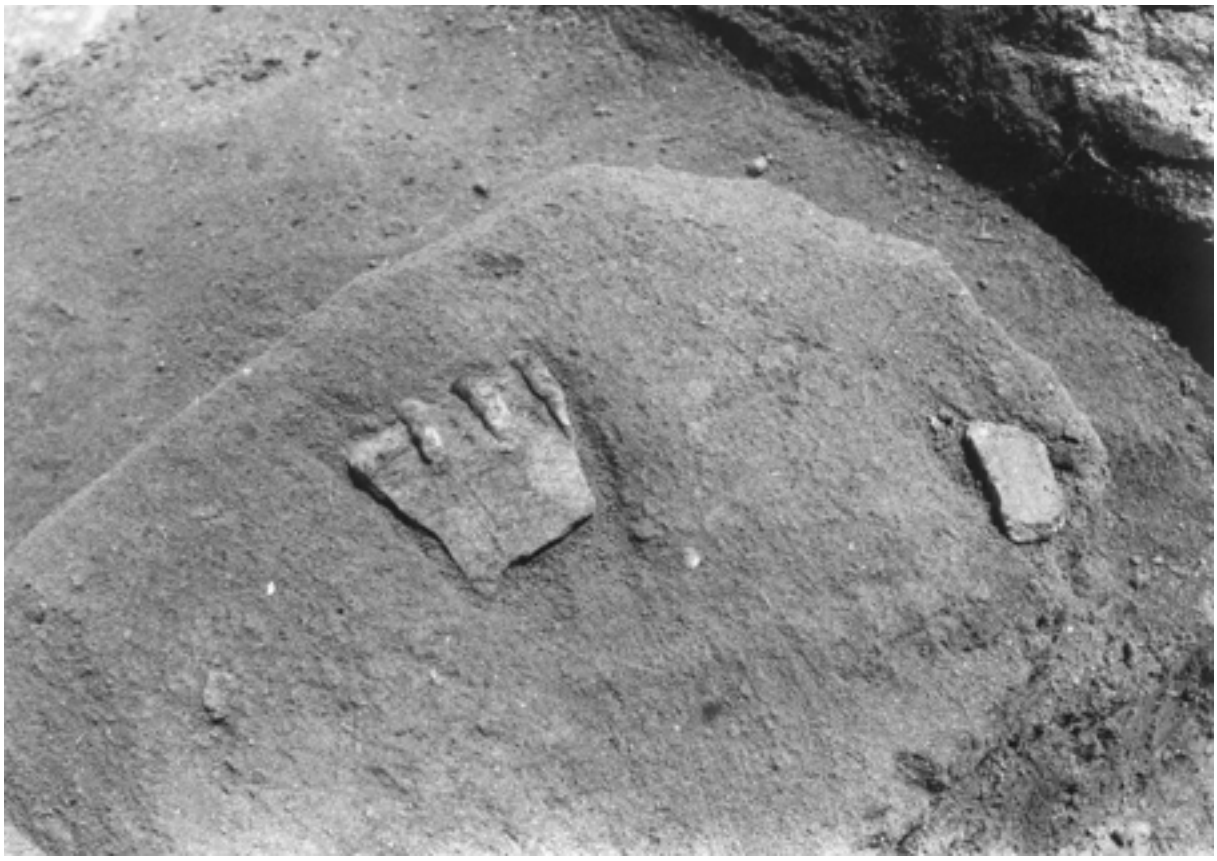
写　真　図　版

1　A地点近景（東から）

2　A地点の溝・古道（西から）

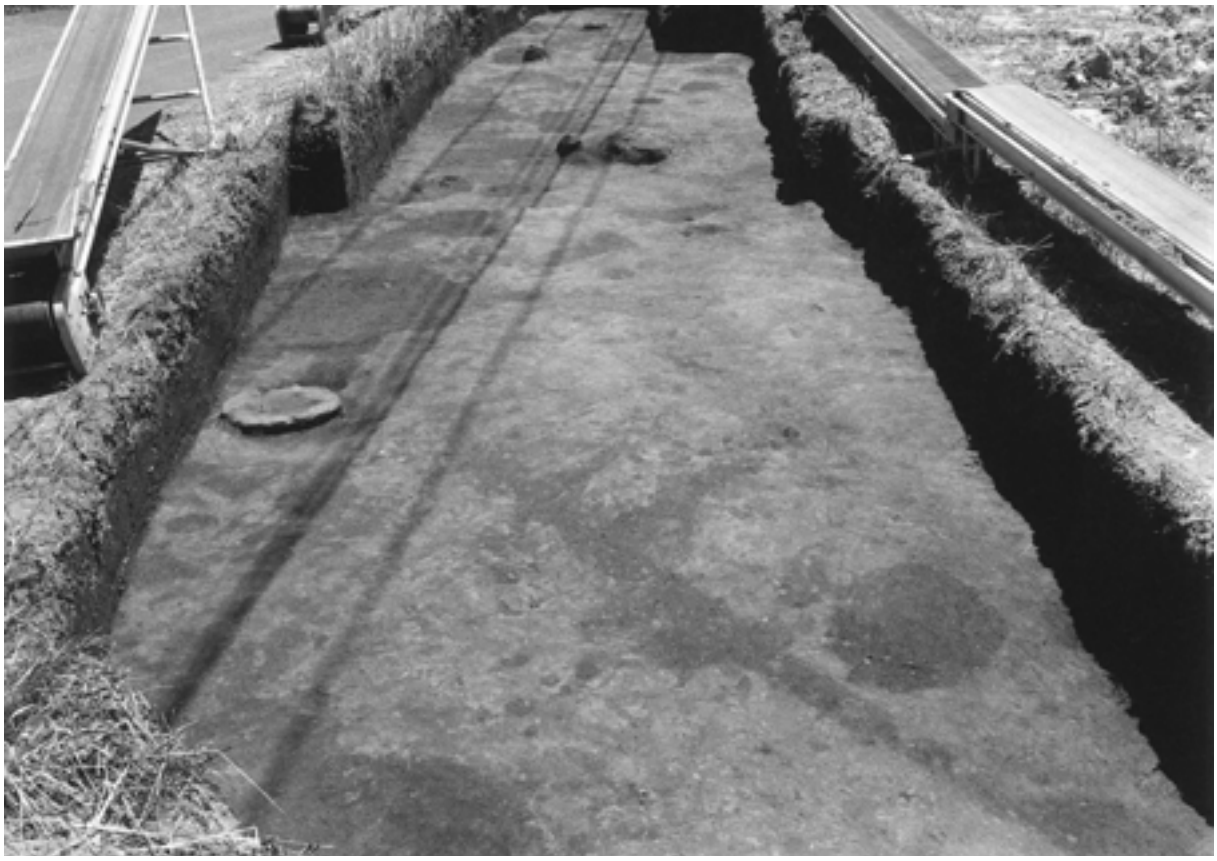
図版2

1　１号集石（北から）



2　春日式土器出土状況

1　B地点近景（西から）



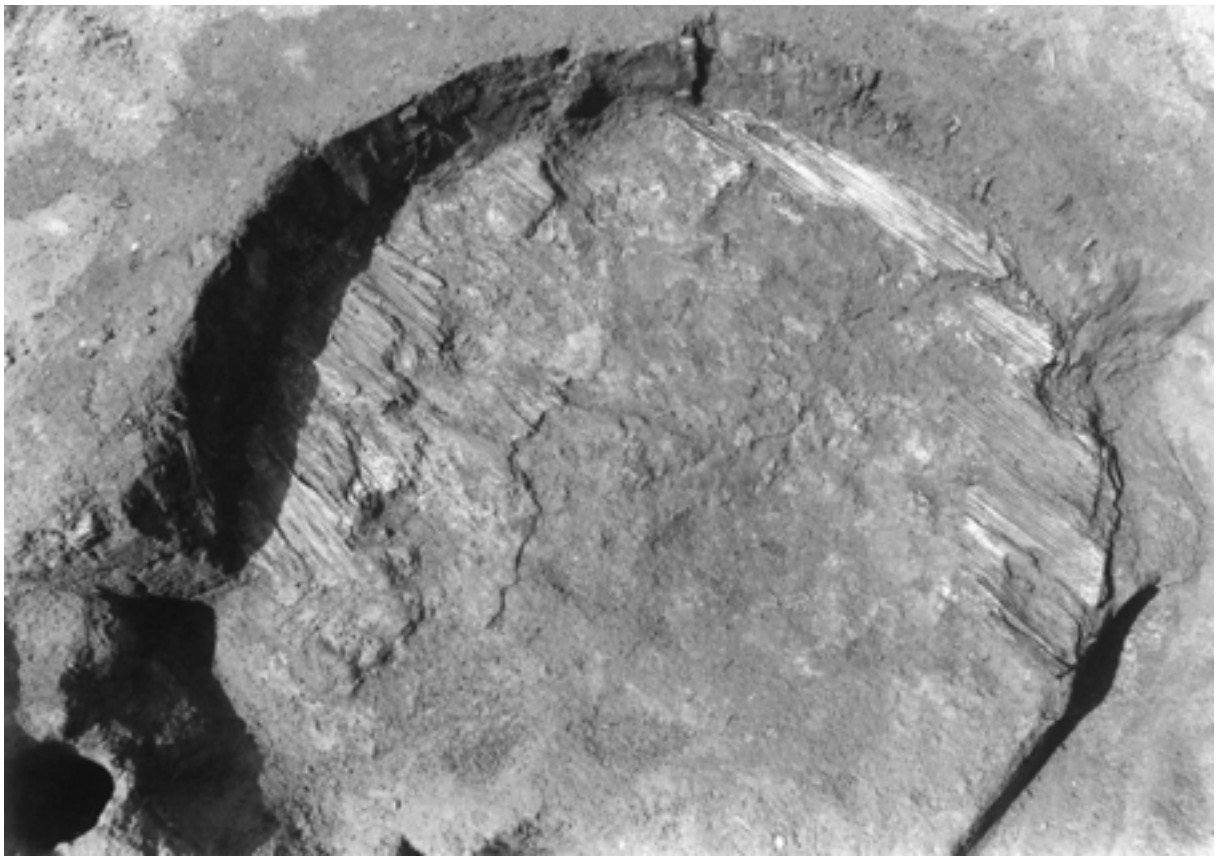
2　B地点遺構検出状況（東から）

図版4

1　B地点の遺構（東から）

2　B地点の遺構（西から）

1　土　坑

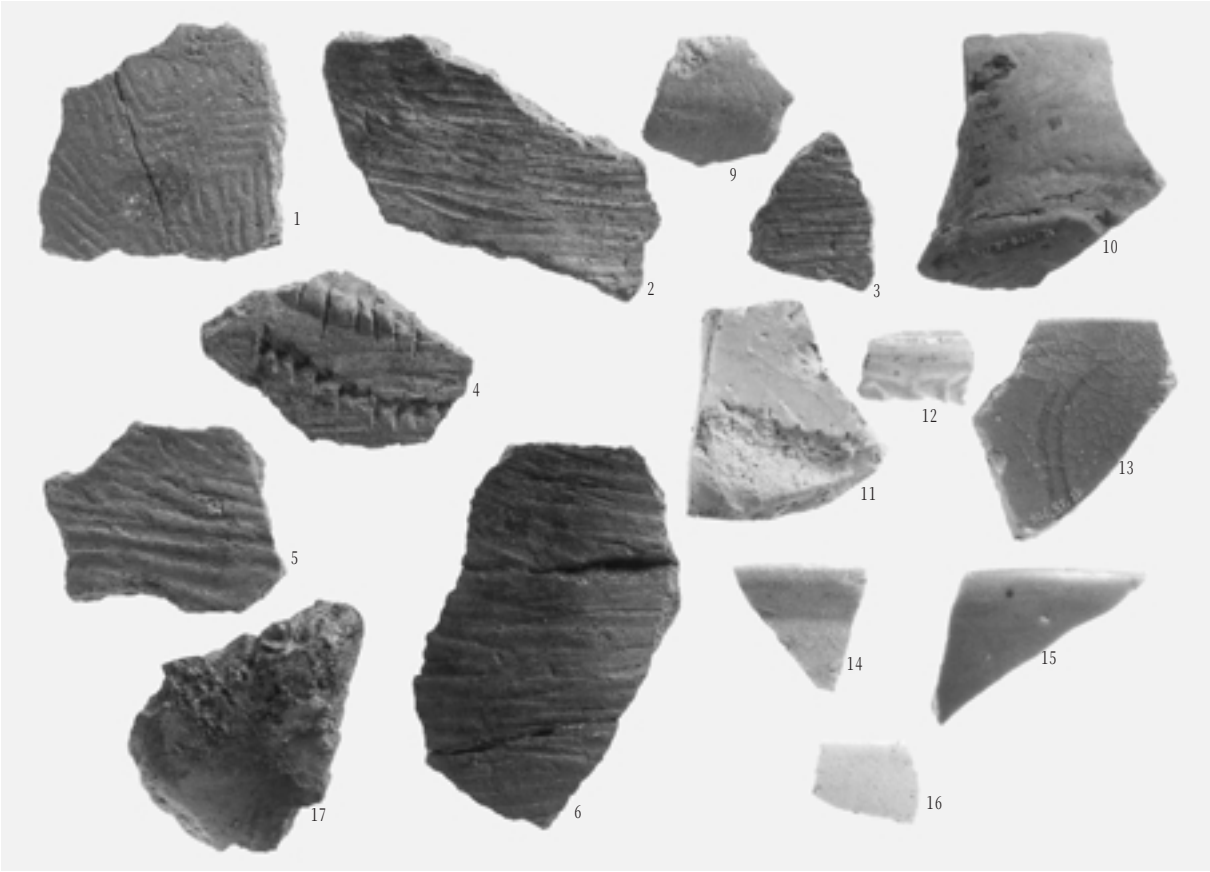


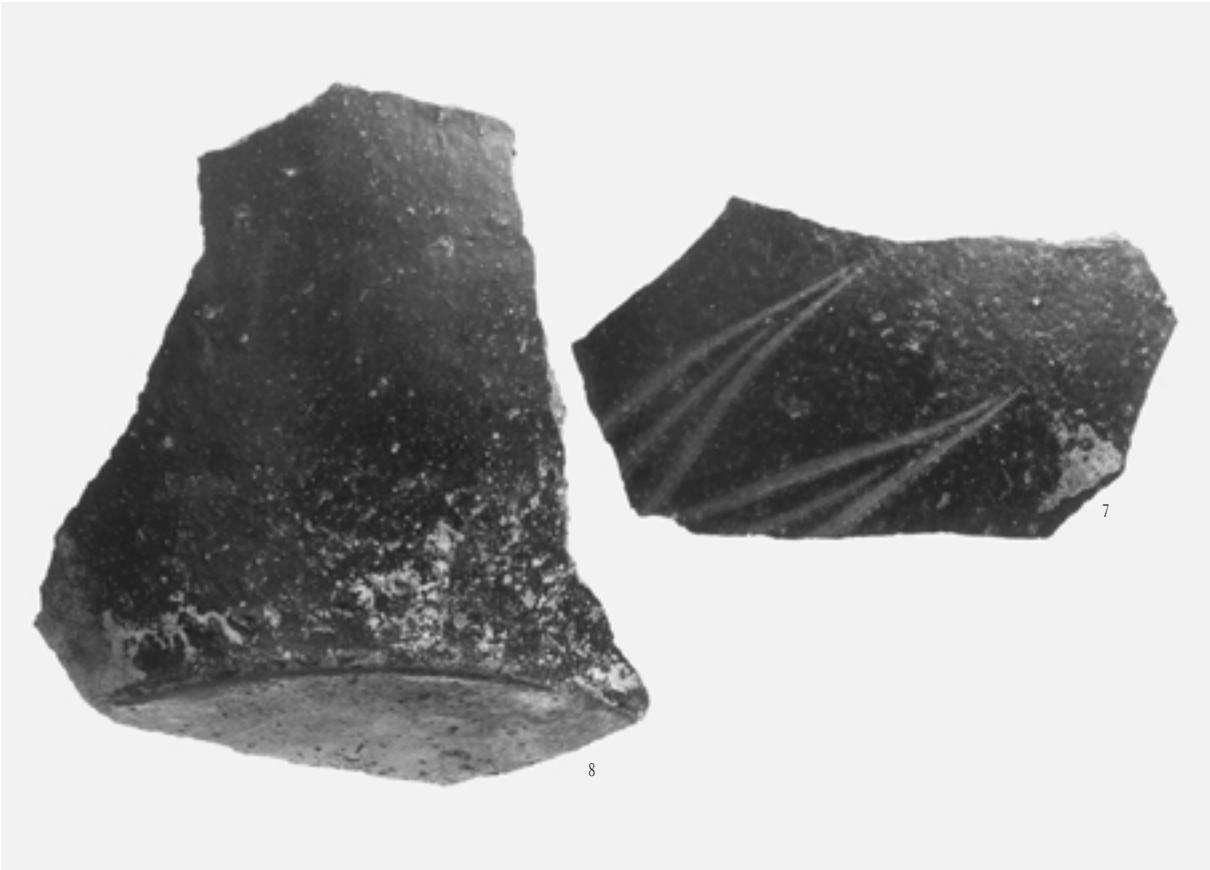
2　土　坑

図版6

1　焼土域1

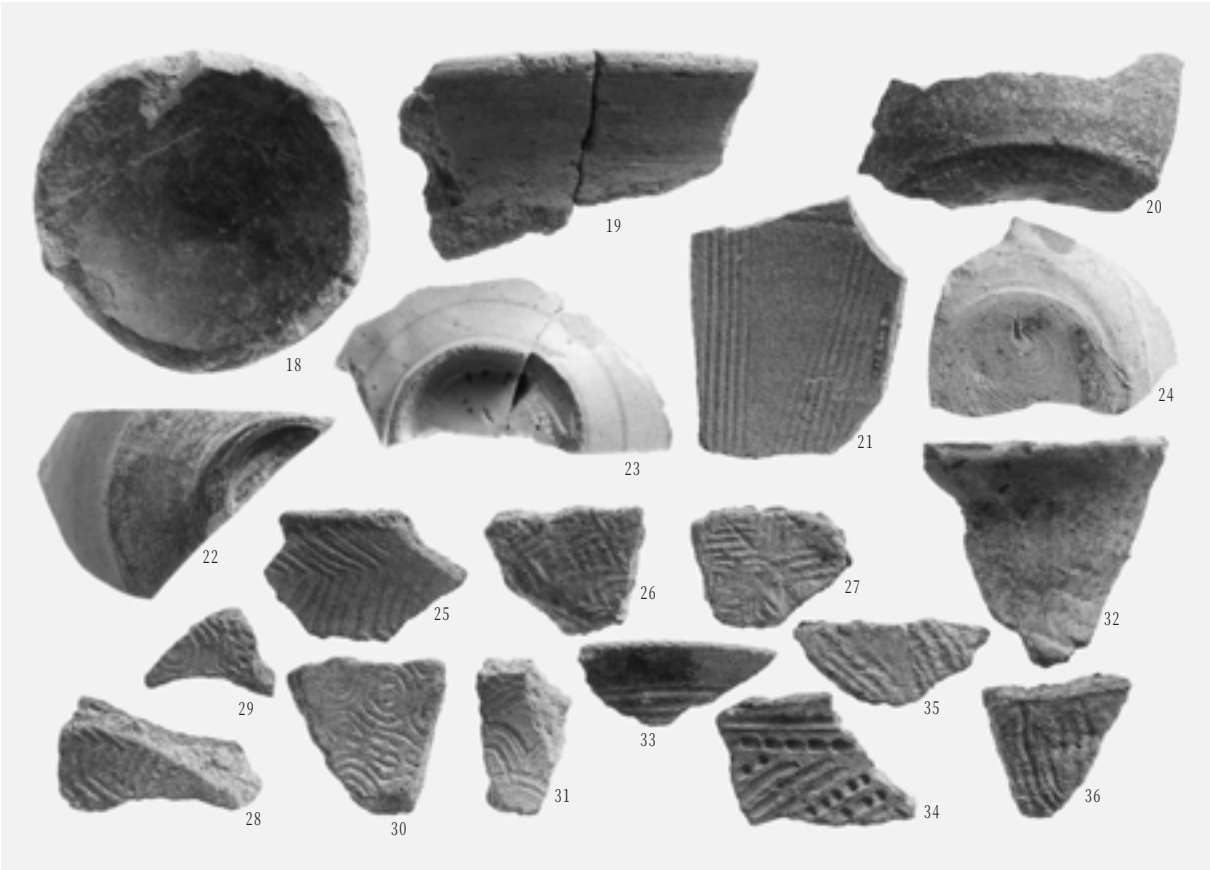
2　粘土貼遺構



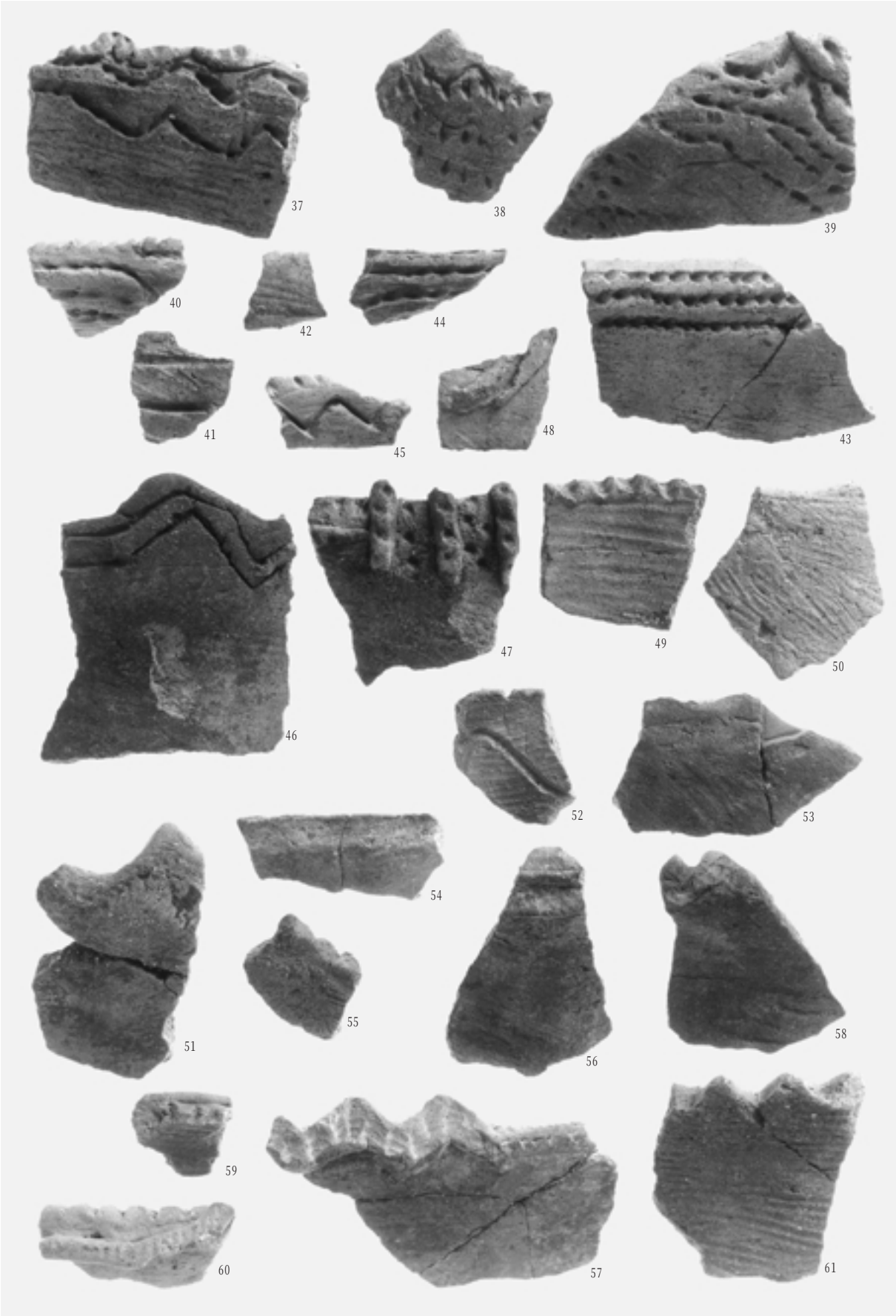


確認調査出土の遺物

図版8

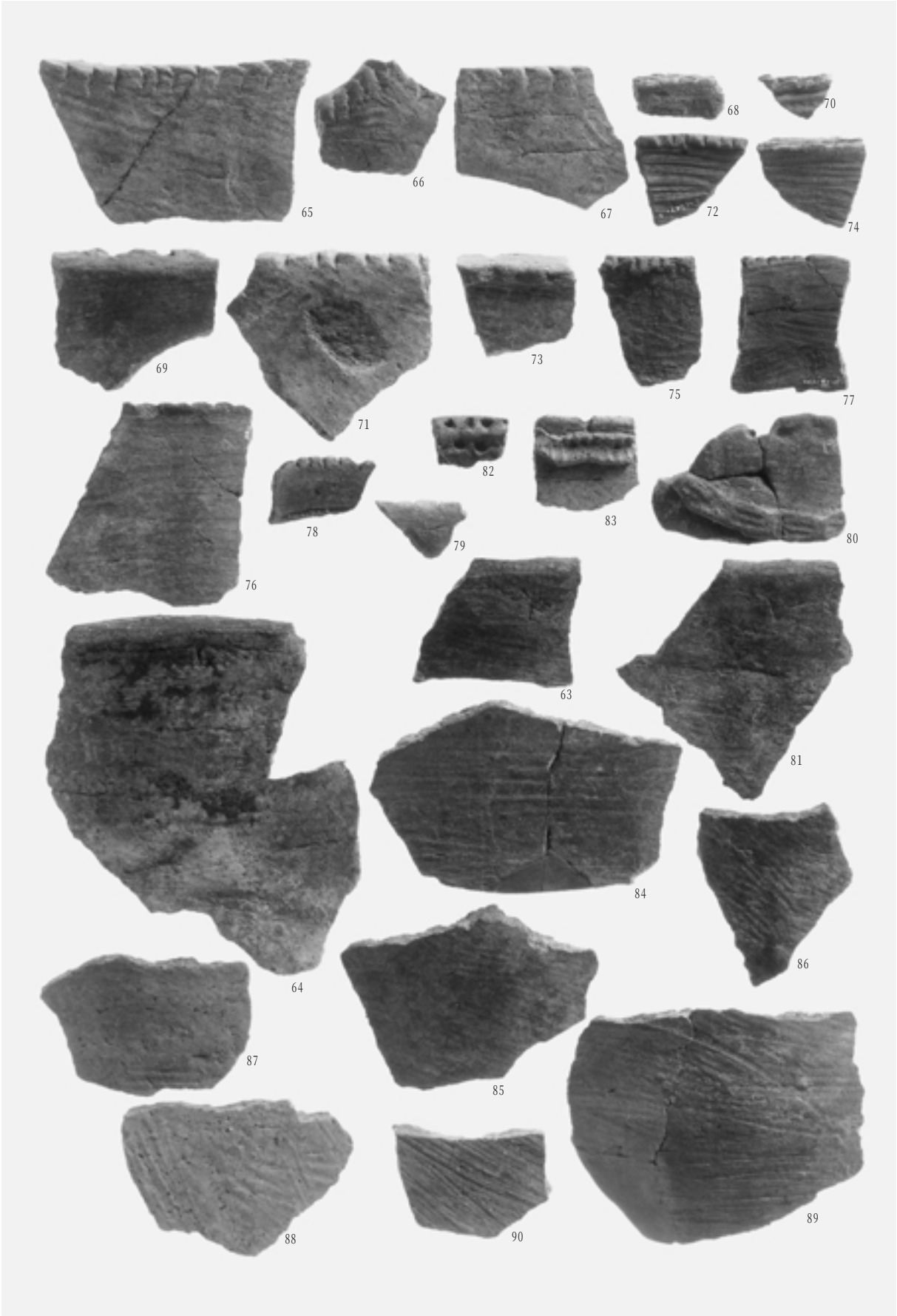


A地点出土の遺物

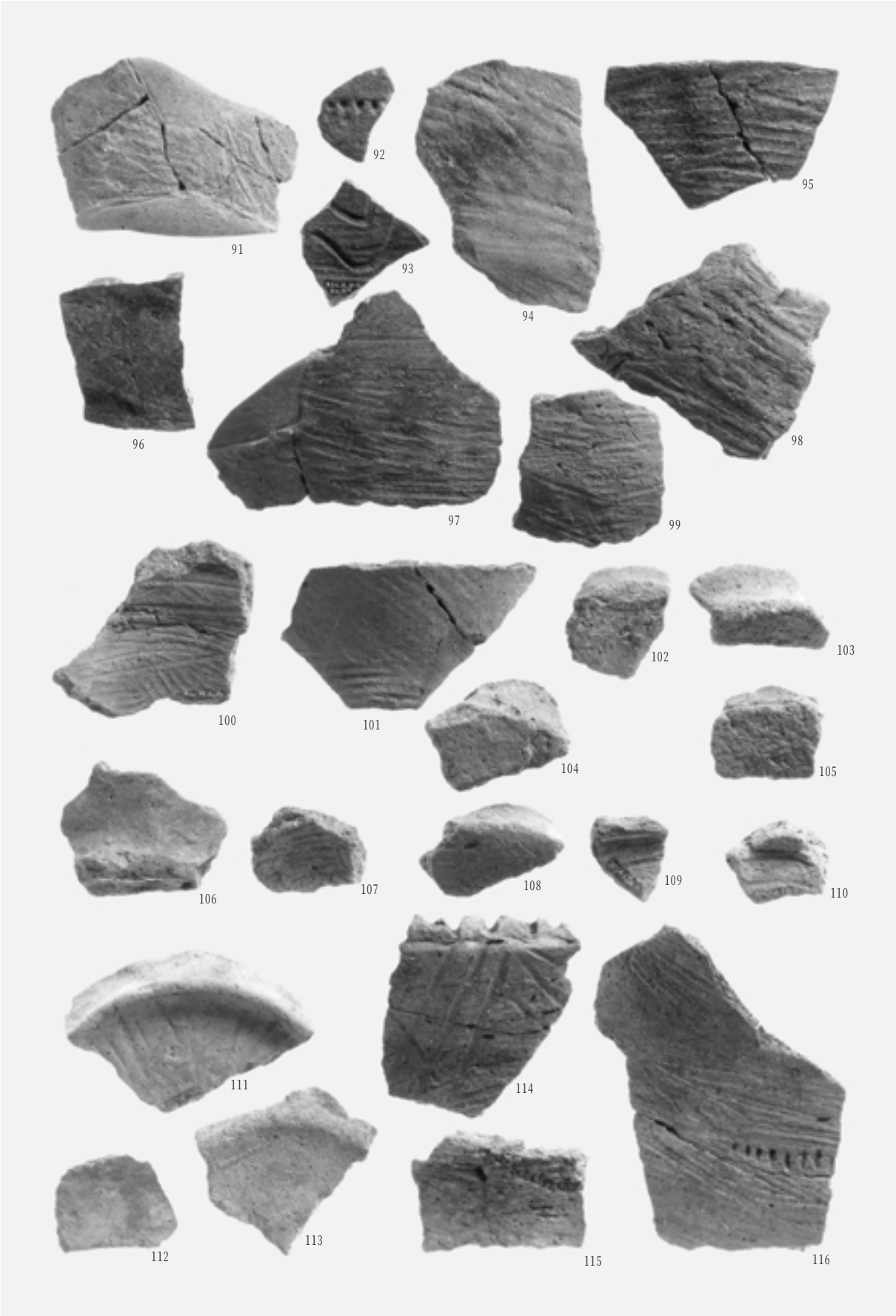

37
38
39
40
42
44
41
45
48
43
46
47
49
50
52
53
54
51
55
56
58
59
60
57
61

春日式土器(1)

図版10

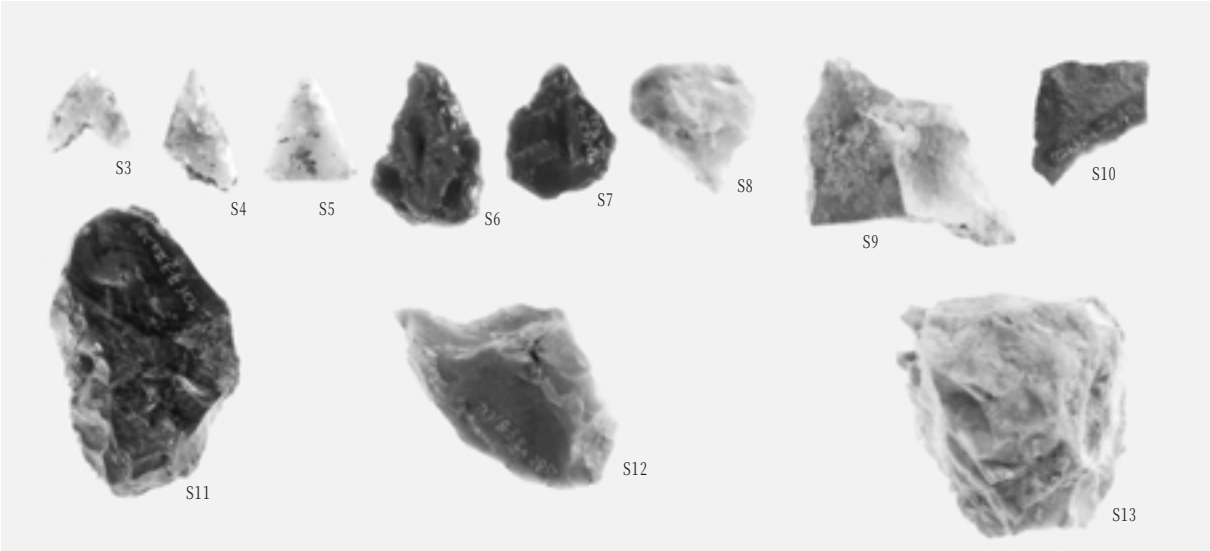

65
66
67
68
70
72
74
69
71
73
75
77
76
78
79
82
83
80
63
81
64
84
86
87
85
88
90
89

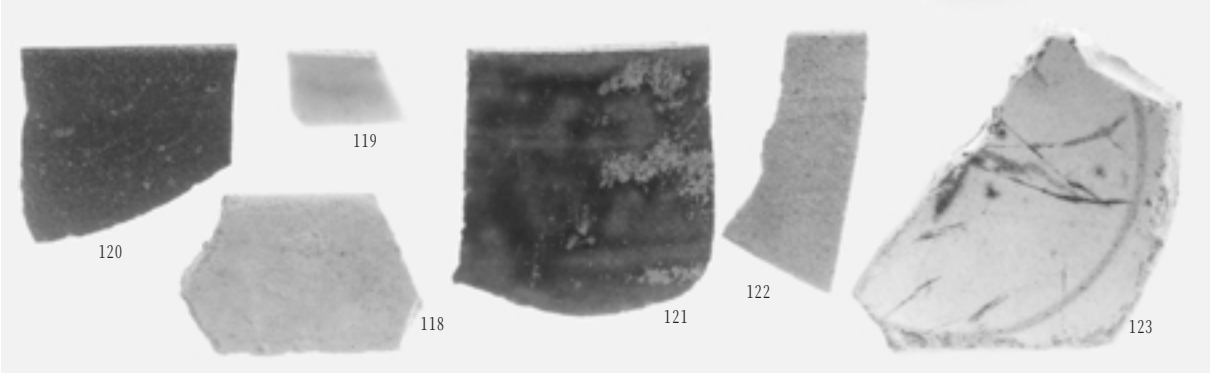
春日式土器(2)


91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116

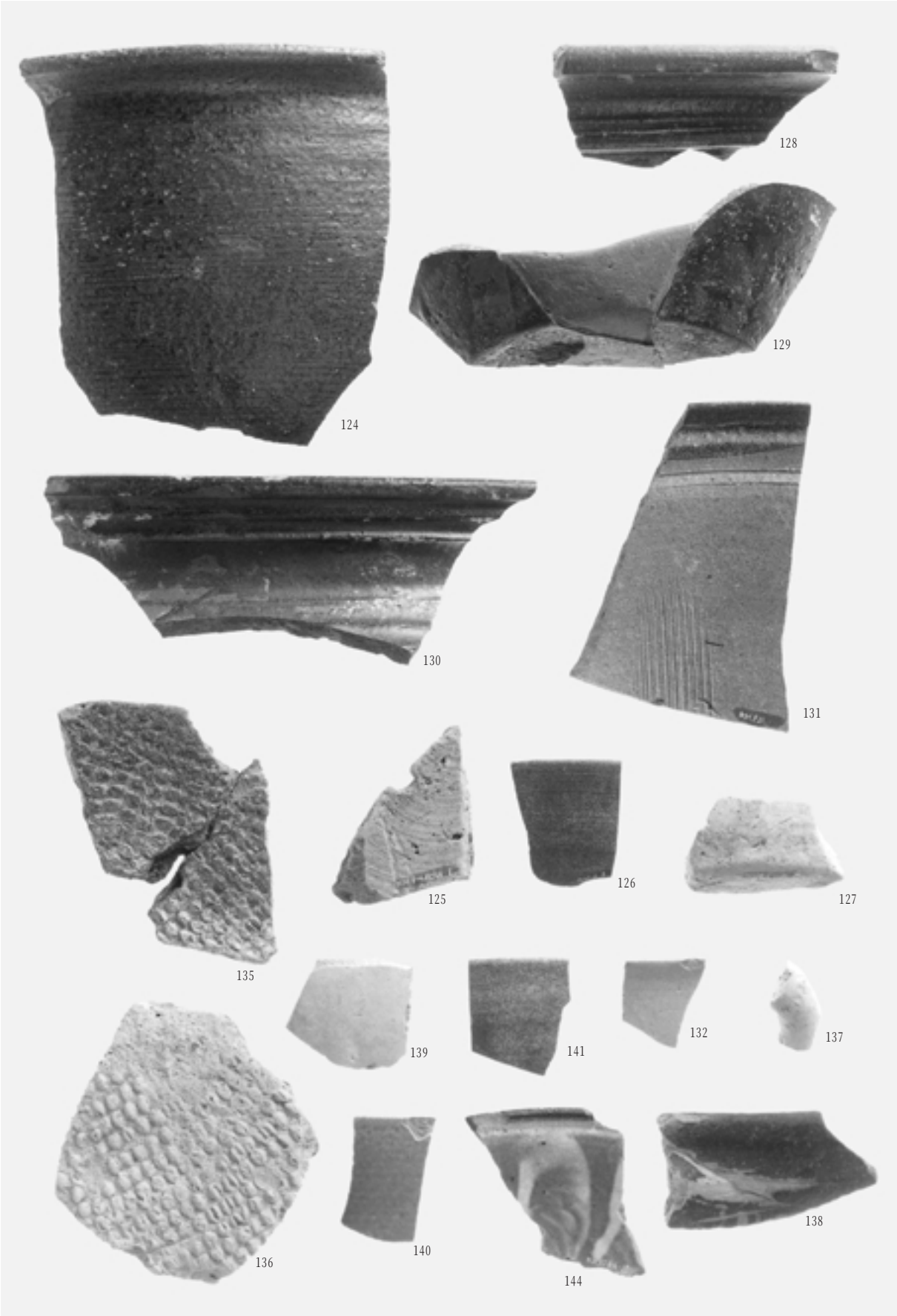
春日式土器(3)

図版12





A地点出土の石器・土器


128
129
124
130
131
125
126
127
135
139
141
132
137
136
140
144
138

B地点出土の遺物１

図版14

B地点出土の遺物２

あ　と　が　き

明治36年に鹿児島県初の鉄道である肥薩線が隼人～横川～吉松間に開通して以来，一世紀以上を経過した平成16年，九州新幹線の新八代駅～鹿児島中央駅間が開業を迎えた。

築後100年の歴史をもつ肥薩線嘉例川駅，誕生間もない鹿児島中央駅は，乗降客や鉄道ファンのみならず多くの人々が訪れるところとなっている。

栫遺跡は，肥薩線霧島温泉駅の西約1.3㎞に位置する。今回の調査で，発掘調査の契機となった一般地方道紫尾田牧園線に沿う形で「古道跡」を５条発見した。遺跡の中を縫うように馬渡川が東へと流れており，この道も川に沿うように形成されている。繰り返し行き来することで踏みしめられている様子が観察された。川は緩やかに蛇行を繰り返し，場所によっては川を渡る必要があったことだろう。遺跡の上空を溝辺空港へ向かう飛行機を眺めながら，ふと牧園産の踊馬が「馬渡川」を渡る光景があったのではないかと想像する。人や物の動きに必要な「道」も時代の移り変わりによって形を変えていくものである。

発掘調査は，７月下旬から８月上旬の猛暑の中での作業となった。炎天下にもかかわらず発掘作業に携わってくださった方々，難解な図面に向き合い，整理作業に従事してくださった方々に深く感謝申し上げます。（三垣）

○発掘作業員（確認調査・本調査　平成13・14年度）

赤崎智子・畝地静・畝地速子・畝地春雄・畝地益男・押領司フヂ子・大浦レイ子・大山令子・鬼塚イツ子・鬼塚キミ子・鬼塚忍・鬼塚禮子・小原スミ子・小原文夫・木佐貫正子・小城アイ子・小城チエ子・塩入トシ子・田中忠・谷口信枝・谷口雄一・谷口幸雄・堂下トシ子・時任一総・西香代・羽月みつ子・濵崎道雄・濵崎利美子・平原アキ子・福原セツ子・松下三子・松下勇二・馬渡輝代・山口かよ子・山住征子・吉井ハマ子・渡邉禮子

○整理作業員（平成16年度）

川路加代子・新中泰代・野﨑裕子　　（五十音順・敬称略）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（78）

一般地方道紫尾田牧園線改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

栫　遺　跡

発　行　　2004年12月

編　集　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4461 鹿児島県国分市上之段1175番地１
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）250－7033